
『地』属性は『最強』じゃないが『最高』だって言ってるだろ！！

これは俺の物語だ！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『地』属性は『最強』じゃないが『最高』だって言ってるだろ！！

【Nコード】

N2381W

【作者名】

これは俺の物語だ！

【あらすじ】

目が覚めると知らない爺が目の前にいた。どうやら俺は死んだらしい。その後、色々あって異世界に送られることになったが、爺が言うにはその異世界には魔法が存在する世界だと言う。その際に魔法の属性は何があるのか聞き、俺は『地』属性だけに特化させてくれと頼む。不人気だけいいのか？と聞かれたが・・・俺は『地』属性が『最強』ではないが『最高』だと思ってるので何の問題も無い。他にもいくつか能力をもらって異世界への扉をくぐる。こうして俺の第二の人生が始まったのである。

注意！この

小説には恋愛要素が全くありません。適当に主人公が好き勝手する話です。

第1話

目が覚めたら目の前に知らない爺がいて俺の顔を覗いていた。

「おっ、目が覚めたかのう」

「・・・オラアツ!!」

怖いのでとりあえず殴つといた。

「こ、こりゃ！何をするんじゃ！」

クツ！流石に寝ながらの体制だと当てられないか！

「目が覚めて知らない爺が目の前にいたら誰でも殴るだろ！」

「そんな訳あるか！今まで何人かここに来たがお主みたいな奴は初めてじゃ！」

ん・・・？何人もだと？

「何人もってどういうことだ？っていうか、そもそもここはどこだ？」

そう俺と爺がいるのは真っ白い何も無い空間だったのだ。

そして、その質問を待っていましたというばかりに爺がニヤニヤしたのがむかついたのでもう一発殴ってみる。

「フンッ！」

パンチが顔面に吸い込まれていくのを確認してよしっ！と思うが殴った感触がなかった。

「フツ……残像じゃよ！」

慌ててうしろを振り返ると爺がまたニヤニヤしていた。

「なん……だとっ!?!」

その後も何発か拳を振るってみるも全部避けられた……どうやら俺には爺を殴ることができないらしい。

悔しかった……まあ電器のヒモボクシングしかやってないから当然な気がするが……

「まあ、お遊びはここまでにして話を聞こうか」

「お主から仕掛けてきておいてよく言っわー！」

「ははは、何を言ってるんだこの爺は」

「はあ……まあいいわい……まあお主がなぜここにいるのかと言っと、お主は死んだのじゃよ」

「ふうん、まあ予想通りっちゃ予想通りだな」

「ほう、あっさり受け入れたの・・・」

「まあいつ死んでもおかしくない生活をしてたからな」

そう、俺は俗に言う廃人ゲーマーだった。

常に部屋に引きこもり外にはたまに食料と飲料補充に出かける程度である。

もちろんゲームに集中するあまり飲まず食わずの日も結構あった。

こんな生活を続けていれば死ぬのは時間の問題だっただろう。

あつ、ちなみに引きこもり費用は宝くじで1千万当たったからそれをやりくりしてたよ！

親に迷惑はかけてないんだから・・・かつ勘違いしないでよねっ！

「で、俺が死んだのはいいけど爺は何者だよ？」

「わしは神じゃ」

「ふうん」

「信じておらんな！」

「いや、信じる信じないじゃなくてさ、俺に何の用だよ。ってか神様って死んだ奴にわざわざ会いに来るほど暇なの？」

「そんな訳あるか！これでも忙しい中、時間を確保して会いに来てやったんじゃぞ！」

「はっ！まさか俺の体があまりにも魅力的だったからか!？」

「いや、わしの好みはもつとこうムチムチとしたお姉ちゃんの方が……って何を言わせるんじゃ！」

「ノリノリだな爺」

「わしも色々とストレスが溜まっておつての……」

「爺も苦勞してるんだな、んでそんな忙しい中わざわざ俺に会いに来たって事は何か重要な事なの？」

「いや、それがの、非常に言いにくいんじゃが……」

「なんだよ、はっきり言えよ。俺と爺の仲じゃないか」

と言っても会ってから20分も経ってないんだけどね。

「じつはの、異世界に行つて欲しいのじゃ」

ほうー！テンプレだな！

「理由は聞いても？」

「………じゃ」

「ん？何だつて？」

「……暇つぶしじゃ」

「……」

「……」

「フンッ！」

俺は再び爺に殴りにかかる。

「重要な話と思って真面目に聞いてれば暇つぶしだと！ぶざけんじやねえぞ爺！」

「ち、ちがうんじゃ！話を最後まで聞いてくれ！」

避けながら必死に言い訳をする爺。

「分かった、とりあえず言い訳を聞いてやろっ」

結局どれだけ殴ろうと思ってもやっぱり爺には当たらないから爺の言い訳を聞くことにする。

「暇つぶしをしたいのはわしではない別の神なのじゃ」

「ん？なら何で直接その神様が来ないんだ？爺ってもしかしてかなりしょぼい神様なのか？」

「違っわ！わしはこれでもこの世界で一番えらい神じゃぞ！」

「ならなんで直接その暇つぶしをしたい神様が来ないんだよ」

「それはのお・・・異世界の神だからじゃ。この世界における神なら用があれば直接言いに行くじゃろうよ」

「異世界の神ねえ・・・同じ神の爺は忙しいのにその異世界の神は暇なのか？」

「管理の仕組みが違うからの、わしは一人で全部管理しておるがぁ。つちは分担で管理しておるのじゃ」

「なら爺も分担にすればいいんじゃないかねえの？」

「それがの・・・わしと同程度の神がいればそれもできるんじゃないが。同程度の神がないのじゃ」

「あゝということは異世界は最高ランクの神様が何人もいるのか」

「そついうことじゃの、実に羨ましいかぎりじゃ・・・」

「まあ、理由は納得できたけどさ何で俺なのよ？別に暇つぶしなら大道芸人とかでもよくね？」

「いや・・・その異世界には魔法が普通に存在する世界での。魔法を使って面白い事をしてくれそうなのを送ってくれと言ってきたのじゃ」

「それって爺が従う必要あるのか？」

「いや、その・・・まあ・・・」

「何だよ、何か従わなきゃいけない理由があるのか？」

「賭けで負けちゃったの……てへっ」

「ソイヤッ！」

と拳ではもう駄目だと思った俺は股間の急所めがけて蹴りを放つ。

「あぶなっ！」

とまたも見た目に似合わない動作でよける爺。

「チツ、やっぱり当たらないか」

「股間は駄目じゃろ！股間は！」

「うるせー！賭けに巻き込まれる俺の身にもなってみろや！」

「いやいや、まさかあそこでロイヤルストレートフラッシュユが来るなんて誰にも予想できんじゃろ」

「ポーカーかよ！爺も絶対暇人だろ！つてか神様ならそれくらい予想しとけよ！」

「わしの手札はストレートフラッシュユじゃったんじゃぞ！勝てると思っじゃろ！」

「知るかボケエ！……ついでに聞いておくが爺が勝った場合は何がもらえたんだ？」

「ムチムチした秘書のお姉ちゃんじゃ！」

「爺・・・本当に神様なのか？」

「仕方ないじゃろ！わしも癒しが欲しいんじゃ！ワシの秘書どもは全員男で癒しがなくていかん！」

「はあ・・・もういい・・・でも魔法がある世界ならこっちの世界に比べて色々な事が出来そうだし、わざわざ異世界人を呼ばなくても住民に適当に力を与えれば暇にはならないと思うが」

「いやいや、試しに魔王とか勇者を作っても毎回同じような展開でつまらないんじゃと、だから異世界から人材を送ってくれと言ってきたわけじゃな」

「あれ？今まで何人か送ったんじゃねえのか？ここに来たのって俺が始めてじゃないんだよな？」

「ああ、その異世界は初めてじゃよ。他の異世界には勇者召喚とか魔王召喚の儀式で送った事はあるがの」

「ふうん、他の異世界に送った奴らも爺が賭けで負けて送ったのか？」

「いや、そもそも他の異世界から人を呼び寄せるにはちゃんとした理由がないと駄目なのじゃ。それが勇者召喚や魔王召喚の儀式というわけじゃな。」

「それも安易にできると言うわけでもなく神が世界を作る時に他の異世界から召喚するよーって決めておかないとできないのじゃ」

「つまりその異世界では決めてなかったと？」

「そういうことじゃな、決めておけばよかったとかなり後悔しておつたようじゃぞ」

「なるほどなあ、で賭けの対象にして送ってもらおうって考えて爺はまんまと負けたと」

「その通りじゃ！」

「でも送っても大丈夫なのか？ちゃんとした理由がないと駄目なんだろ？」

「一人くらいはどうかなるじやろって感じじゃな、それに召喚の儀式と違って死んだ人間を送るわけじゃしな」

「適当だなおい！」

「神なんてそんなもんじゃ！」

「そんなハツキリと断言する事かよ・・・」

「まあ、これで成功すれば他の召喚の儀式がない異世界からもお主は呼び出されるじやろうな。」

「何で俺だけ！？他にもいっぱいいるだろう！？」

「だってこれ以上わしの世界の人間を減らすわけにはいかないしい、召喚の儀式がある異世界からの呼び出しでかなり減ってるのに」

召喚の儀式がない異世界からも呼び出されたらたまったもんじゃないわい」

「てめえが賭けの対象にするのが悪いんだろうが！ってか何でこの世界から召喚される奴が多いんだよ！他の世界からも呼び出せるだろつが！」

「この世界から召喚された人間のハプニング率が異常に高いから人気があるのじゃよ。ご指名率ナンバーワンじゃな」

「なにその理由！？ハプニング率が高いから呼び出されるってどれだけハプニング期待してるんだよ！？」

「この世界から呼び出された人間はこの世界にある漫画みたいな展開が日常的に起こるらしいぞい」

「逆に怖いわ！ってか俺もそうなるのか！」

「死んだ人間を送るのは初めてじゃからなあ、どうなるかわからんわい」

「もういい、何か疲れたわ・・・そっぴや死んでる俺の肉体は再構成されるのか？それとも転生して赤ん坊からやり直すのか？」

「多分再構成じゃろうな、赤ん坊から見てるなんてそんなの待ちきれない！って言ってたからのお」

「おいおい、今まで数億年単位で見てきたんだろつが・・・十何年くらい我慢しろよ・・・」

「まず無理じゃろつな、勝負の日以降まだ来ないのか？まだ来ないのか？つてずつと言われておるからのお」

「何その期待感・・・ものすごいプレッシャーがかかるんだけど」

「まあ気にする必要はないじゃろ」

「気にするだる普通・・・だがどうかしようにも、どうしようもないしな。それより色々な事聞いておこつ」

「他にも聞きたいこと色々あるんだけど爺の時間は大丈夫か？」

「うむ、もうしばらくは大丈夫じゃ。まあ、わしに聞くより向こうの神に聞いた方が良い気がするがの」

「それは駄目だ、多分向こうの神様は話を聞く前に放り出される」

「それはさすがに・・・ありえる話じゃの」

「だろ？だからとりあえず爺に聞いておく」

「わかる範囲であれば答えてやろつ」

「まず異世界召喚にありがちなチート能力はもらえるのか？」

「何か希望があるのかの？あればわしが異世界の神に言っておこつ。ただし不死は駄目じゃぞ、死がないと他の異世界に送れないからの」

「ああ、不死になる気は別れない。命を失う危険性がないと見てる神様もつまらないだろつしな。不老は大丈夫なのか？」

「うむ、不老なら大丈夫じゃの。しかし良いのかの？不老だとひとつの場所に何年も留まる事は難しくなるぞい？」

「ああ、いいよ別に、そこら辺は上手くやるから。あとは異世界言語の習得だな、もう使われてない古代言語とかも含めてくれると嬉しい、もちろん読み書きできるレベルでな」

「ふむ、言語の方はデフォルトで向こうの神がつけてくれるじゃろ。しかし使われてない古代言語まで必要かの？」

「遺跡とか探索した時に役立つだろ？それに大体の伝承とか言い伝えて途中で権力者に都合の良いように捻じ曲げられてるからな、古代に書かれた書物などを読む事で真実を知る事ができるかもしれない」

「意外と勤勉なのじゃな」

「ちげーよ！それを元に矛盾点について人をおちよくするためだよ！俺は人をおちよくするためならどんな努力も怠らない！」

「お主、いい性格をしておるの・・・選んで正解じゃったわい。じやがそれなら最初から全知識を詰め込んだ方が早い気がするがの」

「わかってねーな爺は・・・俺だって知る楽しみが欲しいんだよ！最初から全部を知ってるなんてつまらないにもほどがある」

「なるほどのお、他に要望はあるかの？」

「あとは肉体強化と魔力強化くらいか」

「ふむ、肉体強化はまあ当然じゃろうな、すぐ死なれてもつまらんだろうし。魔力に関しても相応な量を与えられるじゃろ」

「魔法の属性はどうなってるんだ？」

「確かあの異世界の基本属性は『火』『風』『水』『地』『光』『闇』だったはずじゃ、もちろんこれにあてはまらない系統の『時』や『創造』も一応存在するがの」

「じゃあ『地』属性だけで特化してくれりゃいいや、あとはいらない」

「『地』属性だけでいいのか？それにしても『地』属性とはまた不人気で地味な属性を選んだのお、こういう時は『光』『闇』もしくは『創造』を選ぶ奴が多いんじゃないか」

「爺！『地』属性は最強ではないかもしれないが最高なんだよ！それを俺が証明してやるよ！」

そう・・・俺が考えるに『地』属性は最高の属性なのだ・・・俺がやってたゲームの中でも攻撃が地味で空を飛ぶ敵には役に立たないと言う理由で人気も無く誰も使いたがらない属性だった、

だがそれでもある程度の強さや補助魔法もあるのでソロゲーマーの俺にはピッタリな属性だったのだ、そこから考えるに多分、異世界でも人気が無い属性だと思う。

もしここで全属性とか特殊な属性を選ぶと間違いなく目立ってしまう、それは良くない。偉い人に目をつけられると自由が無くなるか

らな、それは非常に困る。

俺は自由が好きなのだ、自由最高！フリーイイイイダアアアアアアアム！！！！

おっとテンションがおかしなことになってしまった・・・落ち着こう。

「まあ、お主がそれでいいなら、わしは何も言わぬよ」

「信じてねえな爺・・・まあいいや。とりあえず能力はそれだけでいいや」

「よし、あとは何か質問はあるかの？」

「そついや種族ってどうなってんの？そこまで暇をもてあましてるなら知能が高い生物って人間だけじゃないよな？」

「うむ、例をあげるとキリがないくらいの多数の種族があるからそこはお主が直接確かめてみるとよいぞい」

「それもそうだな、聞きたい事はこれくらいかな。」

「うむ、それではお主を異世界に送るとしよう。この扉をくぐればそこはもう異世界じゃ」

と言い爺がどこぞの青狸が出てくるようなショッキングピンクの扉を出してきた。

「・・・パクったのか？」

「わしがオリジナルじゃ！あいつはわしが育てたのじゃ！」

もう駄目だこの爺、はやくどうにかしないと・・・

「色々ありがとうな爺。最後に握手させてもらっていいか？」

「うむ、いいじゃろっ」

と言い右手を出してきたので俺も右手を出す。

「オラアッ！！」

そしてにこやかに握手をした瞬間に爺の右手を引き寄せてあいてる左手で爺の顔面を殴る。

「ゴフウッ！！」

俺の最後の作戦は見事に成功した！利き腕じゃないから威力が弱かったのが悔いに残るがまあいいだろう！

「ようやく一発入ったか！それじゃ元気だな爺！」

蹲ってる爺を放置してさっさと扉をくぐる俺。

「この小童めがああああ・・・」

という爺の最後の叫びが聞こえたが俺にはどうでもよかった。

第1話（後書き）

初小説です。その場のノリと勢いで書いてるので矛盾や違和感があるかもしれませんが。

生暖かい目で見守ってください。よろしく願います。

第2話

おかしいな・・・扉をくぐってもまた白い空間に来たわけだが、爺
もしかして失敗したのか？と考えていると

「くくくいらつしやいませ！ようこそ我らの世界へ！」「」「」

「うお！びつくりした！」

4つの光の玉が現れて声をかけてきた。もしかしてこいつらが暇つ
ぶしに俺を呼んだ神様達か？

クソツ！実体があるように見えない！これじゃあ殴れないじゃない
かよおおおお！

「いや〜待ってましたよ！」

「さっそくイツちゃう！？今すぐイツちゃう！？」

「お楽しみキタ　(。　。　)　！」

「この時が来るのを待ってたぜえ！」

4つの光が左端から順に点滅して声を出す。

「うるせえ！とりあえず黙れ！暇神ひまじんども！」

とりあえず黙らせないと話が進まない。このまま喋らせてたらすぐ
に異世界に飛びされそうだ。

「「「はいつ！」「」」

ピタッと黙る神様達・・・本当に大丈夫なのかこの世界・・・ちょっと心配になるわ。

「大体の事は爺から聞いているから説明はいらない！欲しい能力は爺から聞いていると思うが・・・」

「おう！ばつちり聞いてるぜ！」

右端にある光の玉が喋る。

「じゃあちよつと確認の為にその神様、俺が欲しい能力は何か言ってみてよ」

と言い左端から2番目の光の玉に聞いてみる。

こいつらの聞いているという言葉だけでは不安すぎる。確認はしつかりしないと・・・俺の第二の人生がかかっているわけだし。

「神に向かってそのような口を聞くなんてっ！・・・・・・・・駄目っ！感じちゃっっ！」

「・・・もういい、左端の神様に聞くわ」

「ああ！これが放置プレイなのねっ！」

・・・とりあえず左端から2番目の神様は駄目だと言つ事がわかった。

「はい、身体能力の強化、不老、魔力の増大、『地』属性の特化、言語習得（古代言語含む）以上でよろしいでしょうか？」

「ああ、それであってる。」

よかった、左端はまともみたいだ。しばらくこの神様と会話しよう。

「しかしよろしいのですか？かなり能力が少ないですけど・・・」

えっ？これで少ないって・・・

「今までに作った勇者や魔王にはどんな能力をつけてたんだ？」

「ええっと最初は勇者だけに、身体能力の超強化、肉体超再生、理解力超強化、知識超強化、魔力無限大、全属性超強化、超幸運、超ハーレム体質、伝説の武具、などをつけたのですが」

・・・チートにも程があるだろ。

「それ見てて楽しかったか？」

「最初の頃は楽しかったんですが、すぐに飽きちゃいましたね」

だろうな！その勇者、旅に出た瞬間に魔王に会っても勝てるレベルだもんな！

「魔王にも実力を拮抗させるために似た能力をつけてみたら両者がすぐに相打ちになってしまい・・・」

「まあ、そうなるだろうな」

「それで今度は能力をほとんどつけずに旅に出させたのですがなかなか進まないから途中で飽きてしまっています・・・」

つける能力が極端すぎるんだよ・・・

「なるほどな、確かにあんた達から見れば少ないかもしれないが俺にはこれくらいがちょうどいいんだよ」

「そうですか・・・しかし『地』属性だけで本当にいいんですか？」

「何か問題でもあるのか？」

「いえ、問題と言いますか・・・他の世界の事は知りませんが、我らの世界では『地』属性魔法は土木作業や農作業にしか使われていませんので・・・そんな属性で本当に大丈夫なのかなと」

ああ・・・やっぱりそんな扱いなんだ『地』属性。

「ああ、何も問題は無いぞ、要は使い方の問題だしな。俺は『地』属性が最高の属性だと思っているからな」

「わかりました、あなたが了解しているのであれば何も言いません」

「そっぴやひとつだけ聞きたいことがあるんだが」

「何でしょうか？」

「俺は何をやってもいいのか？」

「基本的に何をやっても問題ありませんね、何か問題があれば声をかけますから」

ああ、よかった。これで俺の自由が保障された、それだけが心配だったからな。

フリイイイイダアアアアム!!おっとまたテンションが・・・

「りょーかい、それじゃあもう聞くこともないから能力をつけて送ってくれ。できれば最初は人間のいる街の近くがいいな」

「わかりました」

「ハアハア・・・たまんないわぁ・・・」

「(0°・・・)ワクワクテカテカ!」

「おっ!?!やっど行くのか!」

もう左端以外は黙ってるよ・・・

「それではこちらの扉を通ると街の近くの森に出ますので・・・」

と言ってまたもやショッキングピンクの扉が出てきた。

「・・・流行ってるのか?」

「・・・?」

どうやら分からないらしい、まさか本当にあの爺が青狸を育てたというのか!?

いや!そんなはずはない!あの青狸は漫画界の偉大な巨匠が育てたものだ!これは偶然だ!偶然なのだ!

忘れよう・・・

「それじゃ行くか・・・」

こうして俺の第二の人生が始まったのである・・・

第2話（後書き）

ちょっと短いです。

第3話（前書き）

12/01/03 誤字修正

第3話

シヨッキングピンクの扉を通り抜けて無事に異世界に到着！

通り抜けた後にシヨッキングピンクの扉は消えていった。

「ここが異世界か・・・ってわかるかつ！」

そう、例えばここが異世界でも見渡す限りの森なのだからわかるわけがない。森の外に出てみたら実は地球でしたってなってもおかしくないレベル。

「ってか街の近くって言ったのに見渡す限りの森ってなんだよ！確かに森って聞いてたけどせめて森の入り口くらいに出せよっ！どっちが街かもわからないだろうがっ！」

大きな声で見ているであろう神様達に向かって文句を言つとちよつとだけスッキリした。

「にしても装備は死んだ時のままか、素っ裸じゃなくてよかったな・・・」

装備品を神様に要求してもよかつたんだがそれじゃつまらないだろう？神様から貰った装備品なんて絶対に何らかの加護がついているに違いないからな。

あと良い装備品を持つてるとその分狙われやすくなるし、厄介事が多くなりそうで嫌なのだ。やっぱり自由がいいよ自由が！

フレイイイダ・・・えっ？もうそのネタはいいつて？仕方ないな・・・今回の所は勘弁してやろう。

ちなみに俺の装備品は黒のジャージズボンに白いTシャツ、靴は履いて無いがサンダルの形をしたスリッパを装着している。

まあ、装備品は街中で整えるとして自分の身体能力のチェックでもするか。

「フンッ！」

とりあえず軽く力を込めて近くにある木の幹を殴ってみる。

ドカツ！という音とともに拳が木の幹にめり込んでいた。

「軽くやってこのレベルか・・・手も全く痛くないし本気でやれば木くらいは簡単にへし折れそうだな」

手でこのレベルなら足はどうなるのか・・・怖いです！先生！

「足はジャンプ力で測定するか・・・木をへし折りたくないしな！ジャンプならある程度、力を出しても大丈夫だろうし！」

一応、屈伸をして準備体操。筋肉断裂とか嫌だからな！

「それじゃあ行きますか！・・・トオウツ！」

戦隊物っぽく叫んでジャンプ！

「うおおおおお！たっけえええええ！こえええええええ！」

俺は10mくらいの高さまで飛んでいた。ふと遠くに目をやると石できた壁らしき物が見えた。ちなみに視力も強化されてるぞっ！

「あれが街・・・かなああああああああ」

落ちながらそんな事を叫ぶ、結構余裕あるな俺。

「フンッ！」

と膝を曲げつつ着地する。ドンッ！と地面がちよつと陥没した。

「結構な衝撃だったけど体に異常は無しっ！と！すげーな俺！」

まあ、身体能力強化は保険みたいなものだ、俺は『地』属性の魔法使いとしてやっていくからな！あまり肉弾戦はしたくない。

そついや魔法の使い方を教えてもらってないな・・・まあ、いいや。街に行けばわかるだろ。

「それじゃ街に向かっていくかぁー！」

「おかしい・・・何でこついう時にお約束の獣が出てこないんだっ
！」

俺は今、森の中を歩いているのだが・・・こついう時にお約束なの

が大型の獣が出て襲い掛かってくる事だ。

「爺が言うハプニング体質になってるなら出てきてもおかしくないはずだが……」

まあ出てきたら倒さずに全力で逃げるんだがな！まあ、出てこないなら出てこないでいいや。楽だし。

とその時

「うああああああ！たすけてくれええええええ！」

見渡す限り声の主は近くにはいないみただが聴力も強化されているらしく、声はハッキリと聞こえてきた。

「救助フラグの方が！盗賊か獣どっちかなあ〜」

声のした方へ軽いジョギング程度の速度で走る。普通こっぴう時は全力で走るんだろっつが武器も魔法もない状態で体力を使い果たすのはお馬鹿さんのすることだ、

別に間に合わなくても何の問題もないしな！あとサンダルスリッパだから走りにくい！

そうしてしばらく走っていると、助けを求める声が近くなり木々が少なくなってきた、どうやら森を抜けた所で襲われているらしいな。

そろそろ気配を消さないといけな、学校に行つてた頃に習得した空気になるスキルを発動する。

な、泣いてなんてないんだからねっ！にしてもこんな所で役に立つとは人生何があるかわからないもんだ。

さてさてどうなってるのかなぁと・・・木に隠れながら様子をつかがってみる。

「ひぁぁぁあ！やめてくれえええ！」

と叫びながら逃げ惑う中年太りのおっさんがハアハア言いながら走り回っていた。追いかけているのは棍棒を持つてる緑色の小さい人の形をした魔物が1匹。

「あれはゴブリンかな、本当に異世界に来たんだなあ・・・」

とのんきに呟きながら追いかけてこを見守る。

「ってか1匹くらいあのおっさんにも倒せそうな気がするが」

どうしようか・・・助けてもいいけど助ける価値あるのかな？でもこういふフラグって後々面倒な事になるんだよな。

でもまあ異世界で初めて会った人だし助けるか。優しいな俺って・・・そう考えてる間にもおっさんは追いかけてらるている。

「今の身体能力なら投石で大丈夫だろ」

そう思い近くに落ちてる石を拾い集める。何個か拾ったところで

「おーい！おっさんー！」

と声をかけるとおっさんは走りながら顔だけこっちに振り向き

「た、たすけてくれえ！」

「助けてやつてもいいけどさー！いくら出すよー！」

よくいる主人公は無料で助けて色々な事に巻き込まれてるけど俺から見ればありえない、世の中はギブアンドテイクなのだ。

「いつ、1万ギル！1万ギル出すぞ！だから！は、はやく！たすけてくれえ！」

ふむ、この世界の通貨はギルなのか、それともこの国の通貨なのか？

1ギルがどれぐらいの価値かわらんが、ゴブリンっぽいの1匹だしまぁいいだろう。

「今手持ちでもってるのかー？」

「も、もってる！もってるぞ！はっ、はやくっ！・・・あっ！」

あっ、おっさん転んじやった。まぁ手持ちでもってるなら後払いで逃げられることはないだろう。

持ってなかったら色々と・・・な？

「嘘だったら許さないからなー！」

と言いつつ転んだおっさんに追いつきそうなゴブリンに向かって行きながら軽く投石。本気で投げたらぶち抜きそうだからな。

「ギャツ！」

うむ、狙い通り足に当たった。ゴブリンの足が止まり、近くへ来た俺の方へ顔を向ける。かなりご立腹らしい。

そのまま当たってない方の足へ投石をして命中させる。

「ギャイウウアアア！」

一投目より強く投げたせいかゴブリンが痛み悶えている。俺のドS心をくすぐりやがるぜ、このゴブリン。

まあこれではらく動けないだろう、下手したら足の骨が折れてるだろうし。痛み悶えてるゴブリンを放置して転んだままのおっさんに近づく。

「おっさん、大丈夫か？」

「あ、ああ・・・ありがとう、助かったよ！」

おっさんはまだ起き上がる気配がない、腰でも抜かしたのか？仕方ない起こしてやるか。

「ほら、手につかまって」

「す、すまないね。どうやら腰を抜かしてしまったらしい」

「いいよ、これくらい。で、報酬の件だけどさ？」

「ああ、わかつている。これでいいかい？」

と言つて金貨1枚を出すおっさん、ふむ……金貨1枚が1万ギルなのかな？

「できたら細かいお金の方がいいんだが……持つてるか？」

「細かいつて言うと大銀貨10枚かい？」

大銀貨10枚で金貨1枚分つてことは1000ギルが大銀貨1枚つて事か。

「ああ、無ければ別にいいんだが」

「すまないね、大銀貨10枚は持っていないよ」

「いいさ、じゃあ1万ギル確かに受け取つた」

「あのゴブリンは殺さないのかい？」

といまだに痛みに悶えているゴブリンを指差しおっさんが言う。やっぱりあの緑色の魔物はゴブリンであつてたんだ。

「殺したければ自分でやつてくれ、俺がおっさんと交わした契約はおっさんを助ける事であつて殺す事じゃない」

と、それっぽいことを言つてみるが実際はこのおっさんが支払いを渋つたらゴブリンに襲わせるつもりだったのである。

「そ、そうか……私は街に帰る予定だったのだが、君はどうする

んだい？」

「俺もとりあえず街に向かうから付き合っよ」

支払いを渋らなかつたからとりあえずおっさんと一緒に行く事にした。

「おお、それは心強いな」

心強いって石を投げた程度なのに何を期待してるんだ、このおっさん。

大量の魔物が出たら俺はおっさんを放置して逃げるぞ。

こうして俺とおっさんは街に向かって歩き出したのだった。

第3話（後書き）

ようやく異世界に突入しました。

第4話

街に向かう途中、情報収集のためにおっさんと会話。

おっさんの名前はカイヌスと言うらしい。カイヌスは商人で、商品を輸送した帰り道にゴブリンの集団に襲われたようだ。

ゴブリン達が荷馬車を漁る中、何とか逃げ出したものの1匹だけしつこく追いかけてきて必死に走り続けたらしい。

そのポツチャリ体系でよく逃げられたなと感心しちゃったよ。

護衛はつけてなかったのか？と聞くと馬車で6時間程度の距離だったのと今まで魔物に襲われなかったため大丈夫だろうと判断したんだとさ。

お馬鹿さんだなH A H A H A !

そしてカイヌスに名前を聞かれたのでMMOでよく使っていた岩男から取った『ロツク』って名前を言っておいた。

『地』属性最高！

「ロツクくんは旅人かい？」

唐突にカイヌスがそんなことを聞いてくる。

「ん？まあそんなもんだよ」

「にしては何も持って無いように見えるんだが」

「ああ、盗賊に全部荷物を取られちゃってさ。災難だったよ」

さらりと嘘を吐いてみる。

「おお、それは災難だったね」

簡単に信じたみたいだ。本当に商人をやってるのか？と不安になるが演技かもしれないので油断はしない。

「ゴブリンに襲われたカイヌスも災難だと思うけどな」

「ははっ、確かに私も災難だったよ」

などとくだらない会話をしつつ30分くらい歩くと高さ3mくらいの石壁に囲まれている街についた。

「ふう、ようやく街についた。これで安心だ」

とカイヌスが言う。

「街に入るのって手続きとかいるの？」

とりあえずの疑問を聞いてみる。

「ギルドカードを持っていけばいらないよ、持ってなければ名前などを書かねばならないがね」

「ふうん、ところで街で手っ取り早く儲けるにはどうすればいい？」

「腕に覚えがあるなら冒険者ギルドに行けばある程度の仕事は貰えるはずだ。元手があるなら商人ギルドで商売の許可を貰うといい」

「二つのギルドは掛け持ちできるのか？」

「多分できたはずだが・・・滅多にいないよ、そんな人は」

まあ、普通の人はそうだろうな。俺はある程度の資金が貯まれば『地』属性の魔法を使って商売を始める気だな！

「わかった、それじゃ元気でな、カイヌス」

「ああ、本当に助かったよ。ありがとう、ロックくん」

そう言って門にいる衛兵にカードを見せて通っていくカイヌス。

「俺も行くか・・・」

門に近づいていく。

「ギルドカードは持っているか？」

そう衛兵が聞いてきたので

「持って無い」

と正直に答える。

「だったらこの紙に書かれている項目を埋めていって、字は書けるか？」

「大丈夫だ」

と言って渡された紙を見て項目を埋めていく。

名前：ロック

年齢：23

街に来た理由：ギルドに登録するため

ふう、書き終わった。他にも出身地とかを書く欄があったけど異世界出身なんて書くわけにはいかないからな。

「これでいいか？」

と衛兵に渡す。

「ああ、問題ないよ。ようこそカルナッタの街へ」

この街はカルナッタと言うのか。とここで疑問に思った事を聞いてみる。

「ギルドに登録したらギルドカードを貰えるらしいけどさ、あなた

みたいな衛兵とか住人はどうしてるんだ？全員ギルドに登録してるのか？」

「いや、俺達みたいな国に従えてるものは国から専用のカードを貰っている。ギルドに登録して無い住人は街から出る時に一時的なカードを発行して渡すようになってる。

まあそんなことをしてるのは出入りを管理している大きな街ぐらいだろうけどな」

ふうん、まあ全部の街や村で出入りを管理できるわけないしな・・・そんなもんか。

「この街を管理してるのって誰？」

これは非常に重要な事である。厄介事に関らないためにも聞いておかねばならない。

「この街を管理しているのは領主のジングス様だな」

ジングスか・・・覚えておこう。

「わかった、色々ありがとう」

「いや、これも仕事の内さ。ああ、そうだ。街に入って真っ直ぐ行くど広場があるんだが冒険者ギルドならそこにあるぞ」

聞いてもないのに場所を教えてくれるとは何て親切な奴。今後も何かあれば利用させてもらおう。

だが何処のギルドに登録するかは書いてなかったはずなんだが旅人

だから冒険者ギルドと思われたのかね。まあいいんだけどね。

とりあえず門をくぐりぬけ街に入る。

流石に大きな街だけあって通りには全部石畳が敷き詰められている。建物も石材と木材を組み合わせてできているようだ。

衛兵に教えてもらった冒険者ギルドに行くために広場を目指す。広場へと続く道には露店が多くあり賑わっていた。

歩いている人の多くは人間っぽいがたまに耳が長かったりかなり小柄な人がいて気になる……が先にギルドに登録をしておかないとな。

そんな事を考えている間に広場についた、中央で噴水が湧き出ている。そんな中、辺りを見回してみると……

でっかくと冒険者ギルドと書かれた看板が取り付けられている建物を見つける。

「わかりやすいな……」

とりあえず中に入ってみる。両開きの大きな扉がついているが開きっぱなしだった。

中はかなり広くなっていていくつかテーブルもあることから待ち合わせ場所も兼ねてるみたいだ。

それにかなり明るい。窓がついているからとも思ったがどうも違う。よく見てみるとランプの様な物が置いてある。

ただ、俺がいた世界と違うのは中にあるのは燃え盛っている火ではなく光る石だったということだが・・・

石が光るなんてすげーなー異世界。

とりあえず正面にある受付らしき場所に行くとしよう。

何かジロジロと見られてる気がする。まあ変な格好してるからな。ジャージにTシャツだし、ジャージがこの世界にあるのかは知らないが・・・

受付にいるメガネのお姉さんに声をかける。

「ちよつといいかな」

「はい、ご依頼の申し込みですか？」

「いや、冒険者登録をしたいんだが」

「・・・冒険者登録ですか？」

ジロジロと受付のお姉さんに見られる。まあ武器も何も持っていない冒険者なんて始めてだろうな！

「もしかして魔導師の方ですか？」

「ああ、そつだ」

都合よく勘違いしてくれたのでそれで通す。

まだ魔法は使えないんだがな！にしてもこの世界で魔法を使う人は

魔導師というのか覚えておこう。

「それではこちらの紙に名前を書いてください」
名前を書き込んで渡す。

「はい、ロック様ですね。それではこちらの水晶に手を置いてもらえますか？」

と言われて大き目の水晶が出てきたので手を置く。

「・・・はい、以前に登録歴や犯罪歴はありませんね」

「そんなのわかるんだ？」

「はい、この水晶はギルド専属の魔導師が作った物として複数登録や犯罪者の登録を防ぐためにあるんですよ」

便利な魔法。

「その情報って国で共有されてるの？」

「そうですね、国と言うよりギルドで共有されてますね。」

「他国に行ったら登録しなおさないといけない？」

「いえ、ギルドがある国でしたら問題ありませんよ。」
なるほどなるほど。超便利じゃん。

「ギルドが無い国ってどこ？」

「魔族の国には無いですね」

魔族の国があ、行ってみたいな。お金が貯まったら行ってみるか。人間より魔族の方が面白そうだしな。会った事は一回も無いんだけどな！

「それではこちらがギルドカードになります、血を一滴垂らしていただけますか？」

と言いカードとナイフを差し出してくる。

「はいよ」

指先をピツと切ってカードに血を垂らすと、カードが光り出した。

「お疲れ様でした。これで登録は完了しました。カードは無くさないようにしてくださいね。再発行には手数料が掛かりますから」

まあ、そんな何回もポンポン発行できないよな。受け取ったカードを見てみるときちんと名前が刻印されていた。名前の横にはFと書かれている。

「依頼を受けるための説明を聞いておきますか？」

「うん、頼むよ」

「冒険者ギルドのランクはSSS、SS、S、A、B、C、D、E、Fとなっていて、ロック様は登録したばかりなのでFランクと

なっております」

「名前の横に書かれているFがランクって事でいいんだよね？」

「はい、そうです。ランクを上げれば受諾できる依頼が増えるのですが、ランクを上げるには昇格クエストを受けて頂かなくてはなりません」

「昇格クエストを受けなければランクは上がらないのか？」

「そうですね、基本的には上がりません。もちろん例外はありますけどね」

「例外って？」

「そのランクでは倒せないと言われていた魔物や魔獣などを複数倒した場合ですね」

なるほど・・・1匹なら偶然もありえるから複数か・・・まあ俺は目立ちたくないからくらいで止めるかな。

「他に注意する事は？」

「依頼を受けたあとに自分勝手な理由でキャンセルされる場合は違約金が発生しますので注意してください。とりあえずはそれくらいですね。」

他の細かい事は依頼を受ける時に説明いたしますので・・・」

「わかった、書店って何処に行けばあるかわかる？」

「書店ならここを出て右に入った所にありますよ」

「ありがとう、それじゃ」

そう言って受付に別れを告げ冒険者ギルドを後にする。

書店の場所を聞いたのは魔法の使い方を学ぶためだ。使い方さえ分かれば後はアレンジをしてどうにかできるだろうし……

ああー武器と防具も買わないとなあ……さすがにジャージとTシャツではいられないだろう、目立つし。あと靴も欲しい。

まだまだやることは多いが……結構楽しめそうだ。

第4話（後書き）

街や風景の描写は難しいですね。これから上手くなれると良いのですが・・・

それとようやく主人公の名前が出てきました。

安易な名前だと思いますが自分では結構気に入っています。

第5話

書店に入って気づいた。この世界の技術力は色々とおかしい。

この街並みからして本の出来には期待してなかったのだが

近くにあった本を手にとつて見てみると印刷されたみたいに字が綺麗で紙もちゃんとした紙だった・・・

それで建物は中世の街並みなんだぜ？違和感がすごいある。

まあ、これが異世界なんだと無理矢理自分を納得させる事にした。

初めての魔法と言う本を立ち読みした結果、以下の事が書いてあった。

立ち読みしていると店主にすごい睨まれてたが関係ないね！

- 1 ・魔力を手を集めます。
- 2 ・次に起こる結果をイメージします。
- 3 ・詠唱します。
- 4 ・魔法が発動します。

魔法の詠唱や効果などを教えてくれる人がいない場合は魔道書を

読んで覚えましょう。

魔力を集められても属性が合っていないと詠唱しても発動しない事が多々あります。自分にあつた属性を選びましょう。

まあ要約するとこんな感じだつた。次に『地』の魔道書を読もうと探すのだが・・・見当たらない。

『火』『水』『風』はすぐに見つかったのに『地』だけがない。『時』『創造』がないのは何となくわかる、レアっぽいからな。

だけど『地』だぜ？基本属性じゃないのか？と念入りに探していくと・・・見つけた。書店の奥の更に端の方にポツンと一冊だけ置いてあつた。

扱いひどくね？『火』『水』『風』は何種類も初級用の本があつたのに『地』だけ一冊だけとか・・・だがそれがいい！

『地』の魔道書：初級編を立ち読み開始、店主がはたきを持って襲い掛かつてきたが無視。

1・地を耕す魔法 >アースカルティベート<

2・地を盛り上げる魔法 >アースライズ<

3・地中の石ころを取り出す魔法 >ストーンイジェクト<

の3つの魔法が載っていた。やばい！完全に畑を作る魔法じゃないか・・・いいな！いいよ！流石だぜ『地』属性！興奮してきたぜ！！

ん？何か書いてあるな。

注意！『地』の魔法は手を地面につけないと発動しません！

・・・おいおい！更に制限かよ！たまらんな！！

おっと変に興奮してしまった。落ち着かないとな。にしても魔法の数がかなり少ない・・・初級だからか？などと考えていると

店主が泣きそうな顔になってきたのでそろそろ退散する事にした。基本さえ掴めばイメージと詠唱を変更して新しい魔法も作れそうだしな。

まあ、他の奴に俺が開発した魔法を使われても困るから新しい魔法を作っても人前で使う気はあまりない、無詠唱でできるようになれば別だけどね・・・できるのかね？

さて次は武器屋だ、店主に武器屋の場所を聞いたら涙を流しながらすぐに教えてくれた。何て優しい店主、また立ち読みに来ると伝えておいた。

ちなみに中級魔法や上級魔法の本も見ようと思ったのだが見当たらなかった、店主に聞くと初級以外は専門の店じゃないとないらしい。

書店から10分ほど歩いて武器屋に到着。中に入って店内を見てみるが俺以外に客はいないらしい。

それに武器屋だから武器だけ置いてあるのかと思ったたらどうやら防具も置いてあるようだ。

こいつはラッキーだ。防具屋を探さなくてすむ。

とりあえず安い武器が何処にあるのか聞こうと思い、

カウンターにいる逞しいヒゲの生えたムキムキのおっさんに声をかけようと近づいて気づいた。

やけに小さいおっさんだな？ドワーフか？ドワーフなのか？と考えていると

「何の用だ小僧、ドワーフが店にいるのがそんなに珍しいか？」

おおやっぱりドワーフなんだ。想像通りだな。

「珍しいっていつかドワーフを始めて見たからな、気に障ったなら謝るが」

「いらん・・・それより用件を言え」

うーむ、やっぱりドワーフって気難しいのかな。

「安いナイフって何処にある？」

「そこに積んである中から選べ」

と言われて見てみると適当に積まれたナイフや剣が置かれていた。

「こんな適当に置いてていいのか？」

「どうせ失敗作だからな」

なるほど失敗作を置いてるのか、溶かして再利用とかなしないのかな？

まあ、いいや。頑丈そうなの選ぼうと。

ふむ・・・これがいいかな。

俺が選んだナイフは刃渡り20cm、横幅は5cm、厚みは1cmもある。

正直、全く切れなさそうだが頑丈さだけはここに置いてある中でも一番だろうと思える一品だ。

「これにする、いくらだ？」

「・・・また妙な物を選んだな。1000ギルでいい、どうせ切れないしな」

1000ギルか。お買い得だな。念のために持つだけだしな。

「これでいいか？」

と言ってカイヌスから貰った金貨を渡す。

「ああ、失敗作を買ってくれた礼だ、鞆とベルトもつけといてやる」

それはありがたいな、抜き身でナイフを持ってたらただの危ない人だからな。

「ツリだ」

と言って、武器屋の親父が渡してきた大銀貨9枚を受け取る。カイヌスはちゃんと1万ギル払ってくれたみたいだ。

よかった・・・1万ギルじゃなかったら殴りに行っていたところだ。

「ここって武器や防具の買い取りとかはやってるのか？」

良い武器や防具を安く買い叩かれないためにも信頼できる店は必要だ。

このドワーフのおっさんは頑固で偏屈そうだが人を騙すような事はしないだろう。

「ああ、買い取りもやっている」

「そうか、防具で安いのはあるか？」

「あるにはある・・・が、やめておけ」

「理由は？」

「武器ならともかく、安物の防具は命知らずの馬鹿が買う物だ。見た限りお前はそういう風には見えん」

うっは！見ただけでわかるとかすげー。

まあ、確かに安物の防具をつけて動きを制限されるくらいならつけない方がマシか・・・

「わかった、忠告感謝する」

そう言っただけで店を出る。

いい店だったな。無駄に売りつけようとしないうえに店員が話しかけてくる店は苦手だ。

俺は一人で静かに商品を見たい、何かあったら聞くから黙ってると前の世界では常々思っていたよ。

何でお客がないのか気にはなったが、あの性格だからかな。

と勝手に結論付けて武器屋に行く途中で見つけた雑貨屋へと足を向ける。

雑貨屋ではとりあえず黒いフード付のマントだけ買っておいた。これで少しはマシな格好になるだろう。

靴もサンダルスリッパでは不味いと思い買おうと思ったのだが・・・靴下が見当たらなかったからやめた。

靴下なしで普通の革っぽい靴を履くのは俺には無理だ。それなら俺はサンダルスリッパでいい！

フード付マントのお値段は1500ギルだった。残り7500ギル、宿屋が1泊いくらなのか知りたい。あと1000の単位は銀貨だった。

だから今、俺が持つてるのは大銀貨7枚に銀貨5枚だ。とりあえずギルドに行つて、すぐに終わりそうな依頼がないか見てこよう。

ちなみに今はお昼過ぎくらいだと思う。書店で立ち読みしてる時に鐘が1回鳴つたから多分正午のお知らせだつたんだろう。

ギルドに入り、Fランクの依頼が貼つてある掲示板に目を向ける。

Fランクの報酬は5000ギル以下が基本らしい、今ある依頼の中では3000ギルが最高だ。

依頼：ボアの退治

北の草原に出てくるボアを退治してください。

薬草採取が出来なくて困ってます。

報酬：3000ギル

ボアって多分イノシシの事だよな？イノシシって森にいるんじゃないの？

まあ、いい。とりあえず受けてみようかと紙を取つていこうとしたその時である。

「どげよ」

ドンツと押されて俺が取ろうとした依頼書を取られた。

イラツとして振り向いてみると、女を二人連れているキザな男がいた。

キザ男の顔はそれなりで髪は金髪のセミロング。多分イケメンだと思うんだが何かキモチ悪い。

イラツとする顔って言えばいいのかな？説明が難しい。

装備としては背中に剣を背負っているが大きいので多分、両手剣だろう。

防具は金色の鎧をつけている。どこからどう見ても成金装備にしか見えない。

女の片方は金髪縦ロールの髪型をしていてこちらは銀の鎧を着込んでいる。

腰に下げているのはレイピアだろうか？

もう片方の女は黒髪のおっぱ頭をしていて、こちらはローブの様な物を纏っている。

赤色の石が埋め込まれた木の杖を持っているから魔導師だと思う。

三人を分析しているとキザ男が

「この依頼は俺様にピッタリの依頼だ、なあお前達？」

と後ろに居る二人に同意を求める。

「そうですね、フリーザ様にこそ、この依頼は相応しいですわっ」

金髪縦ロールが同意すると

「その通りです、フリーザ様以外には相応しくありません。」

黒髪おかつぱがそれに続く。

その名前を聞いた瞬間に俺は・・・

「ブフオッ！」

と嘔出してしまった。

「アッハッハッハ！フリーザ様！フリーザ様って！ハッハッハッ！
ゲホッ！ゲホッ！」

やばい笑いすぎてむせた。にしてもこの世界でフリーザ様の名前を
聞くとは思わなかった。周りの連中も何事かとこっちを見ている。

「ちょっとあなた！何がおかしいんですの!？」

「そうです！失礼です！」

いやいや！俺だって普通にフリーザと自己紹介されたらさ、ああ同
じ名前なんだなって思ったけどさ！

様づけで呼ぶからさ！もうあのお方しか思い浮かばないわけで・・・
デスーム撃つてくれないかなあ。

「おい！貴様！俺様が第八代目の勇者の子孫と知っててそんな態度
を取ってるのか！」

おいおい！更に笑わせる気かよ、やめてくれよ！笑い死にしそうだ
よ！

周りの連中も第八代目勇者の子孫と聞いてザワザワしだした。

「子孫のお前が偉ぶってるんじゃないやねえよ、偉いのは第八代目の勇者
であってお前じゃねえっつーの！それにその勇者様の子孫がフラン
クで何してるんですかあ〜？」

おっと・・・つい正直に言ってしまった。こういう時、正直者は困
るな。

「き！貴様！殺してやる！」

「いけませんわフリーザ様！落ち着いてくださいまし！」

「そうです！殺さなくてもこんな奴すぐに死にます！」

「おお、怖い怖い。勇者様の子孫は乱暴でちゅね〜」

俺は人をおちよくる時は全力を出す！

「くっ！貴様あああ！」

おお、怒ってる怒ってる。今は痛かった！痛かったぞお！くらい怒ってる。

このネタ分らない人がいたらごめんねっ！

人をおちよくるのは楽しいなあ〜 と思っていると

「も、もう行きましょう！フリーザ様」

「そ、そうですねっ！相手にしても時間の無駄ですっ」

「くそっ！覚えてやがれ！」

と、二人の女を連れて去っていく、フリーザ様御一行。

ああ楽しかった。さて北の草原に行く依頼を探すか。

え？何でかって？そりゃもちろん・・・フリーザを・・・な？

笑えはしたけど俺は許した覚えはないよ？俺は受けた恩は忘れるが仇は絶対に忘れないからな！

おっとこの依頼がよさそうだな。

依頼：薬草採取

北の草原で薬草を採取してきてください。

薬草の詳細はギルド受付で。

報酬：1束200ギル 最低10束は持つてくること！

数を集めればボア討伐より儲かりそうだけど簡単に見つかるかわからないのがネックだな。

依頼書を受付に持っていく。

「この依頼を受けたいんだけど」

「はい、薬草採取ですね。」

トラブルがあったのに平然としてやがる。素晴らしい受付嬢だな。それとも聞いてなかったのか？

「それではこちらの紙に書かれている薬草を採取してきてください
ね」

「わかった、ちょっと聞きたいんだが・・・」

「先ほどの冒険者の事ですか？」

やっぱり聞いてたんだ。まあ、あれだけ騒げばな。

「ああ、勇者の子孫だって言ってたけど本当なのか？」

「ええ、本当ですよ」

「勇者の子孫が何でFランクなんだ？」

「聞いた話では実力はあるみたいですよ？ですが、ああいう性格ですから依頼主とのトラブルが多いみたいで・・・」

「ああーなるほどね。変にプライドが高そうだったもんな・・・まあ、その命も今日で・・・」

「勇者の子孫って全員あんな性格してるの？」

「いえいえ、そんな訳ないですよ。あの人は三男なんですけど二人のお兄様方はそれはもう立派な方ですよ」

「甘やかされて天狗になったタイプか。兄が二人もいるってことはやっぱりあいつ必要ないな。一人っ子だったら面倒な事になりそうだからやめようかなと考えるとところだったけど」

「まあ、考えるだけでやめはしなれないと思うけどね！」

「今から楽しみだなああいつの悔しそうに歪んだ死に顔を見るのが！」

「H A H H A H A !」

「ふうん、あいつと関わった依頼主も大変だな。それじゃ、依頼をこなしてくるよ。北の草原は近いのか？」

「30分ほど歩けば到着するはずですよ」

「わかった」

そうして俺はあくまでも依頼を達成するために北の草原に向かって歩き出した。

ホントウダヨ？ウソツイテナイヨ？

第5話（後書き）

ようやく魔法を覚えました。詠唱は単純にしています。
考えるのがめんどくさ・・・ゲフンゲフン

第6話

草原に向かう途中、いい感じに土がむき出しになっている地面があったので魔法を試してみる事にした。

一応周囲を確認して誰もいない事を確認。

目を閉じて魔力を手に集めるイメージを試してみる。

唸れ！俺の妄想力！

そうしてしばらくイメージしていると手が淡く光りだした。恐らくこれが魔力なのだろう。

でも手が光るって仕掛ける時に敵にばれやすいな……

光らないようにできないかなと頭の中でイメージしてみると、フッと光は消えた。

手に魔力が集まっている感覚は残っている。

「意外と簡単に成功したな。でも俺ですら簡単に出来るってことは他の奴もできる可能性が高いな。魔導師と戦う時は気をつけないと」

とりあえず耕してみるか。地面に手をつけて……

「……>アースカルティベート<！」

そう唱えた瞬間！ズザザザと言う音とともに当たり一面の地面が耕されていくのだが・・・

「やっべ・・・やりすぎた・・・」

ちよつとだけ耕すつもりが集めた魔力が多すぎたのか数百メートル範囲で耕されていた。

耕された範囲内に生えていた木が柔らかい地面に耐えられなかったのか、斜めに傾いている。

「今度はやりすぎないように注意してつと・・・>アースライズ<！」

一回やってコツを掴んだおかげか、素早く魔力を集められるようになっていた。

グモモモつと盛り上がっていく地面、今度は百メートルほど直進して止まった。

「威力の調整が難しいな、でも盛り土はちゃんとできてるみたいだつと最後に・・・>ストーンジェクト<！」

パアツと地面が光った後、当たり一面に5cm～30cmくらいの石が転がっていた。

「ふむ、こんなものか。>アースカルティベート<と>ストーンジェクト<が範囲効果で>アースライズ<が直線効果だな。

まあイメージの仕方で変わるかも知れないが・・・やっぱ楽しい

な『地』属性！最高だぜ『地』属性！」

つとそろそろ草原に行かないとフリーザ様御一行がミッションを達成してしまうかもしれない。

草原に到着つと・・・道中で魔物の死体がいくつかあったけど、あいつら掃除してくれたのかね。

ありがたいことだ、俺が襲われないように掃除してくれるなんてさ！

さて、あいつらはどこかなつと・・・目を凝らして探してみる。

・・・いた！100mくらい先にいるようだが、まだボアは見つかられてないようだ。必死に探してやがる。

俺は草に隠れて気配を消し、あいつらの会話を聞いてみる。これだけ離れていても集中すれば聞こえてくるんだから身体強化はありがたいね。

「くそつ！本当にここにいるのか！もう森に帰ったんじゃないか！？」

なるほど、やっぱりボアは森に住んでるのか。見つからないからもう帰ったんじゃないかとフリーザは言ってるわけだ。

「いえ、フリーザ様。ボアはここにいるはずですよ」

「そうです。一度手に入れた縄張りを捨てるとは思えません。」

「ならお前達二人で探して来い！俺様はここで待つてるからな！」

「わかりましたわ」

「わかったです」

女二人に探させるのかよ！しかも了承してるし・・・

「まったく！何で俺様がこんなFランクの依頼をしなきゃいけないんだ！俺様にはもっと上位のランクの依頼が相応しいのに！」

おいおい、俺から横取りしておいてよく言うな。しかも自分にピツタリって言ったのに・・・

「にしてもあいつらはいつまで俺様を待たせるつもりだ！」

おお、まだ数分も経ってないのにイライラしてる。あんな奴が本当に実力あるのか？とそんな事を考えていると・・・

ガサガサッ！

という音がしてかなりでかい牙が生えた体長2mくらいのイノシシみたいな獣が出てきた。あれがボアかね？

「チッ！ボアか！探しに行ったあいつらは本当に使えないな！父様に言っただえてもらうか！」

とボアを前に両手剣を取り出してかまえるフリーザ。

ふむ、あの様子からして勝てるみたいだな。

それでは・・・作戦開始と行きますか！

「プギイイイイ！」

おお！ボアがフリーザを見て怒っている！わかるぞ、その気持ち！俺も見た瞬間に殴りたくなる！

ドドドドドドドドドド...

「ハッ！当たるかよ！獣風情が！」

ボアの突進をサツと避け、すれ違う瞬間に手に持った両手剣で斬りつける。

ガギン！

だがボアの毛はかなり硬いらしくボアに傷ついた様子は無かった。

すごいなボア！剣で斬りつけられても無傷とか、まあそんな簡単に倒せるなら依頼を出すわけもないか・・・

ってこんな観察をしている暇はない、すぐさま準備しないと！

大事なのはイメージだ・・・あいつの立っている地面が深く・・・柔らかく・・・耕されているイメージ！

「行くぞっ……>アースカルテイベイト<！」

詠唱した瞬間、フリーザの立っている地面の周辺だけが柔らかい地面になっていた。

「よしっ！成功した！」

「な！？なんだっ！？」

急に地面が柔らかくなったせいかバランスを取れなくなっただけ焦ってる焦ってる！やばい超楽しいい！ひゃっほおおおう！

「っと楽しんでる暇はないな！>ストーンイジエクト<！」

今度は投げやすい石だけをイメージして詠唱する。

こちらは無事に成功したらしく手元の地面が一瞬光った後に、投げやすいサイズの手ごろな石が落ちていた。

「狙いはあいつの手……オラアッ！」

俺が投げた石は吸い込まれるようにフリーザの手に命中した。

「ウグアッ!？」

あまりの痛さに剣を落とすフリーザ、その瞬間を待っていたかのようにボアが突撃を開始する。

「プギイイイイ！」

「な！？ま、まずい！」

逃げようとするフリーザ、だが柔らかい土に足を取られてなかなか動けないようだ。

念には念を入れて足も狙っておくかなと思った時、視界の片隅に映る二人の女の姿があった。

「チツ、もう戻ってきたか・・・どうすっかな」

フリーザも二人に気づいたらしく。

「おい！お前達！俺様を助ける！」

二人も異常に気づいたらしく、慌ててフリーザの元へ駆け寄っていく。

「おっと！助けさせる訳には行かないよっと！>アースカルティベイトく！」

フリーザにした様に二人が走っている足元の地面を柔らかくしている。

「な、なんですのこれは！？」

「う、動きにくいです！」

そりゃそうだろう、動きにくくするために唱えてるんだし。にしても『地』属性魔法でこういう事ができるのは知られてないのかな？

いまだに魔法だと気づいていないみたいだ・・・まあ、本来は畑を耕す魔法だから仕方ないのかね。

「くうっ！こうなればイリス！魔法を使いなさい！」

「駄目です！届かないです！」

「それでもいいから使うのですわ！」

「わかったです！」

おっと、やっぱり黒髪おかつぱは魔導師か。名前はイリスと言うようだ。届かないと言っているが止めておかないと、万が一と言う事もあるからな。

「狙いはフリーザの時と同じ手で大丈夫だろ、詠唱が出来ないように喉を狙ってもいいが喉だと殺してしまうかも知れないからな。死の恐怖を刻み付けて殺さないと面白くないし・・・フンッ！」

こちら狙い通りにイリスの手に当たる。

「あいたっ！」

と杖を落とすイリス。

「イリス！何をやってますの！」

「ち、違つです！石が飛んできて手に当たつたです！」

「そんなのどうでもいいですわ！早く杖を拾って魔法を・・・！」

と言っている間にもボアはフリーザへと迫り……

「や、やめろ！俺様は勇者の子孫なんだぞ！偉いんだぞ！」

HAHAHA！獣相手に命乞いとか最後まで楽しませてくれるな。

「う、うわぁああああ！？」

ドンツ！というでかい音とともにフリーザは吹っ飛んでいった。にしても全身に鎧をつけた男一人を吹っ飛ばすなんて、ボアってどれだけ強いんだよ。

「フリーザ様！」

二人が叫ぶが……ボアは追撃の手を弱める事をなく吹っ飛んだフリーザへ向かって更に突撃をかけていった。

「うはー容赦ねえな……あれで生きてたらとりあえず目の前でおちよくってやろう」

とある程度フリーザに突撃をして満足したのか、次にボアは二人の方へ威嚇を始めた。ちなみにフリーザは地面に倒れたままピクリとも動かない

「プギプギイ！」

「よくもフリーザ様を！許しませんわ！」

「許さないです！」

と二人はボアと戦う気満々みたいだ。

んーどうすっかな、二人には特に恨みとかないけど俺のドS心が疼いているからとりあえずボアにやらせて様子をみよう。

「プギイイイイイ！」

二人に突進していくボア！狙いはイリスのようだ。

「イリス！早く魔法を唱えなさい！」

「わかってるです！>ファイアボール<！」

杖に光が集まりイリスが詠唱をすると杖の先から15cmくらいの丸い形をした火の玉が飛び出してきた。

ふむ、杖についてた赤い石から『火』属性っぽいと思ってたけど本当に『火』属性だったのか。

ってか他人の魔法を初めて見たけどやっぱり『地』属性だけ地面に手をつけないといけないっぽいな。

戦闘中に地面に手をつけるのは隙が大きいらなあ、時間があるときに色々試して改良しないと・・・案はあるんだけどな！

つと続き続き。

火の玉がボアに迫るが、ボアは避けようともせずそのまま火の玉に突っ込んだ！

「うは！ボアさんすげー！」

思わず、さん付けしてしまうほどの勇ましさを見せたボアは火の玉が当たっても額の毛がちょっと焦げただけだった。

「かけー！ボアさんかけー！」

とテンションがハイになってしまった俺と違って二人は驚き焦っていた。

「な、何で効かないんですの！？イリス！ちゃんと魔力は込めましたの！？」

「込めたです！何で効かないのかこつちが聞きたいです！」

「くっ！こうなったら、わたくしが！」

と言って腰に下げたレイピアを取り出し構える金髪縦ロール。

うーん、ボアの突進力でカウンターが決まれば串刺しでボアは死ぬかもしれないな。それは困るなあ、せつかく楽しくなってきたのに。

「これでもくらいなさい！」

突進してくるボアに向かってレイピアを突き出す！・・・が足場が悪いせいか真っ直ぐ突けないようだ。

念のためにボアの様子も見てみる。すると金髪縦ロールと同じように足元を耕されているはずなんだが関係ないとばかりに突っ走って

いる。

すげえな！野生の力かな！

「きゃあっ！」

と跳ね飛ばされる金髪縦ロール。跳ね飛ばされた衝撃でレイピアも落としたみたいだ。

「これは終わったかな」

と思っていると

「よくもジュリアを！これならどうですかっ！>ファイアアロー<」

ふうん、金髪縦ロールはジュリアというのか。っと今はそんな事考えてる場合じゃないな。

詠唱を終えたイリスの持っている杖の先から30cm程の火の矢が飛んだ！

火の矢はそのまま吸い込まれるようにジュリアに追撃をかけようとしていたボアの額を貫いた！

「プギイツ！？」

「ボアさああああん！」

と超小声で相手に聞こえないように叫ぶ俺。

だが貫いたように見えた。>ファイアアロー<はさほど効いていないようで、また額がちよっと焦げているだけだった。

「ふう、流石だぜ、ボアさん！一瞬焦っちゃったよ！」

「な・・・なんで効かないですか！おかしいです！こ、こうなったら私が覚えてる魔法で一番攻撃力の高い魔法を使っです！」

初撃が全く効果なかったんだから、二発目にその魔法を撃てばよかったのにな！

出し惜しみするなんてお馬鹿さん！

まあ、ボアが死ななかったから俺にはありがたいんだけどね！

「プギイイ！プギイイ！」

おお、流石のボアも、今の>ファイアアロー<は痛かったようだ。かなりご立腹のようで目標をジュリアからイリスに変更した。

ドドドドドと派手な音を立てつつイリスに向かって突進！

さて、また魔法を唱えられたら面倒だから妨害するかな。いや、でも攻撃力の高い魔法を見てみたい気がする。

「いくです！>ファイアランス<！」

イリスの上空に、1mはあるであろう火の槍が出てきた。

あれ？杖の先から出てくると思ったんだが、魔法によって変わるのかな。

上空に出てきた火の槍がボアへ向けて一直線に飛ぶ！当たるかと思っただその時！

ドドドドドド・・・ピタッ！

ボアが急停止したのである！直進していたら当たっていたであろう火の槍は、そのまま地面へと突き刺さり消えていった。

「な！？避けるなんて・・・もう魔力が・・・」

魔力切れるの早いな、まだ3発しか撃ってないはずだが・・・それとも別行動してる時に何回か戦闘したのかな。

それに杖の先から火の槍が出てたら角度的に停止しても真っ直ぐ貫いたのに、運がないなあ、ハッハッハ！

と考えている間にイリスは跳ね飛ばされて倒れていた。

あれ？イリスは鎧を着てないからボアの牙に胴体を貫かれると思っただけだ、

貫かれなかったな・・・何でだろう？まあ、見に行けばわかるかな？

全員動かない事にボアは満足げな表情している。

にしても『地』属性を使った初の戦闘は思いのほか上手くいったな。

魔物相手に通じるかわからないが常識で凝り固まった人間相手なら楽勝レベルだろう。

まあ、これが戦闘って言えるかどうかかわらないけどね！やっぱり楽しいな『地』属性は〜

それに結構魔法使ったのに魔力も全然減ってないみたいだしな。

強化されてるとはいえもつと減ると思ったんだけど・・・初級魔法だからかな？

第6話（後書き）

ようやく戦闘？シーンです。

第7話

ボアが立ち去ってからしばらくして、倒れてる三人の元へ歩いていく。

まずは最初にやられたフリーザの元へ行ってみよう。

「うお・・・生きてるし、腐っても勇者の子孫か」

てつきり死んだと思っていたのに、フリーザは生きていた。まあ意識はないし虫の息っぽいが。

「さて、生きていると言う事はおちよくらなくてはいけないが！まずは金目の物を漁るか」

と金色の鎧を剥いで行き金目の物を探す。

「あれ？お金は持ってないんだな、まあいいや。鎧と剣だけ貰っておくか・・・さて次はっ」と

鎧の下に着ている服を切り裂いていく。え？何故かって？もし生きて戻れた時に恥をかかせるためだよ！

男の裸なんて見たくも無いが俺は人をおちよくるためなら我慢する！我慢するさ！もちろんパンツもちゃんと切り裂いておくよ？

「・・・小さっ！」

おっと思わず声が出てしまった。何がとは言わないが俺のキャノン砲に比べて余りにも小さいからびっくりしちゃったぜ。その大きさはポークビッツ以下と言っても過言ではないだろう。

さて、次は金髪縦ロールのジュリアか。

「ふむ、こいつも生きてるのか」

まあ、どうでもいいけどね。早速金品を頂かないと、とりあえず鎧を脱がせて・・・

「おっ！あつたあつた！お財布発見つもちろん全額ボツシユートです」

うっほほーい！重さ的に結構ありそうだ、ラッキー！

さて、次はもう何をするか・・・賢明な諸君ならわかるな？

「切り裂きタートル」

服を次々に切っていく、だがパンツだけは切り裂かずに貰っておく。淡いピンク色をしたシンプルなパンツだ。

うむ、なかなかエロい体をしておる。しかもノーブラみたいだ。この世界にブラがあるのかはわからないがとりあえず揉んでおこう。

ふむふむ、サイズはこと言ったところか。

程よい揉み心地に手に収まるフィット感は素晴らしいの一言に尽きる。

ずっと揉んでいたいが、目覚めると面倒なのでこれにて終了。ちなみにアンダーなヘアも金色だったよ！

さて最後は黒髪おかつぱのイリスか・・・

「なるほど、小柄な体だったから牙が刺さらなかったのか」

着ているローブには二つほど切り裂かれた後がある。多分ここを牙が通過したのだろう。

「さてさて、金目の物をつと・・・」

そこでふと気づく、このローブを荷物入れにすれば持ち運びが楽になるのではないか？

穴が開いてる部分は結んでしまえば問題ないだろう。そう思い急いでイリスのローブを脱がすが・・・

予想以上の貧乳っぷりだった。ローブの上からでも無いように見えただがここまで無いとは思わなかった。

最早哀れみを感じるレベルである。まあ俺は貧乳巨乳問わずおっぱいが好きだから問題ないんだけどね。

そして脱がした時にローブに入っていたお財布は回収しておいた。こちらの財布も結構入ってそうだ。

もちろんパンツも回収しておいたよ！予想外だったのは黒の大人びたパンツだったことだ。

「さて、予想以上の貧乳だが一応揉んでおくか」

ほとんど無い乳を寄せ集めて揉んでみる。ちょっとだけむなしさを感じるのは何故だろうか。ちなみにアンダーヘアはノーヘアだったよ！

よし、そろそろ撤退するかな。薬草も探さないといけないし。

とその時、俺の脳裏に衝撃的な閃きがよぎった！

このふたつのパンツをフリーザーに身につけさせるのはどうだろうか・・・？もちろん片方は顔に身につけさせるのだ！

これはやばい！何がやばいって三人が目を覚ました瞬間に悲鳴が飛び交う事は間違いなくかなり面白い事になるだろう！

くう！悩む！初めての戦果は取っておきたい！だが！だがしかし！パンツを被せたい気持ちもある！ああ神よっ！俺はどうすればいい！

（呼びました？）

（ハアハア・・・私も脱がされたいっ）

（出番キタ（。。）！）

（俺の出番だな！）

突然、この世界の神様達の声が俺の脳内に響いた。

「出てくるのかよっひまじん暇神どもは帰れ！」

（それではまた）

（呼び出されてすぐに帰られる・・・何てひどい・・・ハアハア）

（ ） （ ） ノ バイバイ

（今度は暴れさせろよ！）

「もう出てくるなよ！」

と馬鹿な事をやっていると時間が無いことに気づきパンツを被せるのは断念。

奪った荷物をローブに入れて背中に背負い薬草を探す。

目標の薬草は思った以上に簡単に見つかり適当に何束か取ってローブの中に入れる。

「これだけ取れば十分だろ。流石に全部取るわけには行かないし、これ以上時間をかけてフリーザ達が目覚めると面倒だしな」

と言う訳で草原から撤退。

帰りの道も特に何の問題もなくカルナツタの街についた。青かった空は夕暮れに染まっていた。

依頼達成をギルドに報告する前に武器屋のおっさんのところで背負っている荷物を売り飛ばそう。

武器屋に到着して中に入る。

「おーい、おっさん」

「何だ小僧・・・また来たのか」

「武器とか防具を拾ったから買い取ってもらおうと思ってな」

「見せてみる」

と言つので拾ってきた両手剣、レイピア、赤い石のついた木の杖、金と銀の鎧をカウンターに置いていく。

「やけに多いが・・・どうやって手に入れた？」

「そうか？普通に落ちてたぞ？」

嘘は言って無いよ！

「フン、まあいい。見た限りじゃ割と質は良いようだが・・・小僧は使わないのか？」

「俺の趣味じゃない、そんな事より査定してくれ」

「わかってる、ちょっと待ってる。・・・この両手剣は良い仕事してるな、レイピアは多少曲がってるが問題あるまい、この杖も良い石を使ってる」

ほう、なかなか良い装備をもっていたみたいだな、俺と同じフランクの癖に・・・流石は勇者様の子孫とお付って所か

カウンターに置いた品物を見ていくおっさんの手が金色の鎧に差し掛かると手が止まった。

「こいつは金メッキだな。物が良くても、これじゃ価値が下がる。」

金メッキだったのかよ！しかも価値が下がるって何だよ！そんなに見栄張りたかったのか！

そして全部の鑑定を終えておっさんが出した金額は5万3000ギルだった。

「5万3000ギルか、内訳は？」

「この両手剣が1万5000ギル、レイピアが折れ曲がってるから8000ギル、杖が1万ギル、金と銀の鎧がそれぞれ1万ギルだ」

「そんなもんか、鎧の金メッキが無ければいくらくらいだった？」

「・・・そうだな、1万5000ギルってとこだ」

5000ギルも価値が下がるのかよ！くそフリーザが！

「チツ、仕方ないか。それでいい買い取ってくれ」

「わかった、金だ」

ドワーフのおっさんから金貨5枚と大銀貨3枚を受け取る。

「確かに、それじゃまた来る」

と言って武器屋を後にする。

次はギルドか・・・

ギルドに到着し受付に報告をする。

「薬草採取の依頼を受けたんだが何処に渡せばいいんだ？」

「はい、薬草などはあちらの買取カウンターの方へお渡しください」

「わかった」

そう言って買取カウンターの方へ向かう

受付には耳の長いエルフっぽい美人のお姉さんがいた。

「薬草採取の依頼を受けたんだが・・・」

「はい、こちらで買取させて頂いております」

「そうか、ならこれを買取って欲しい」

と言って採取してきた薬草を全部渡す。

「これはFランクの薬草採取依頼ですね？」

流石だな、薬草を見ただけでランクがわかるのか

「ああ、そうだ」

「1束200ギルですから・・・ええーつと23束ありますから4600ギルですね」

おお、23束もあったか、これはいい金稼ぎになったな。ボア退治より高くなったし。

「それではこちらが依頼達成書と4600ギル、大銀貨4枚と銀貨6枚になっております」

「ありがとうございます。これを受付に渡せばいいんだよね？」

「はい、こちらの依頼達成書を渡して初めて依頼完了になりますので・・・」

「わかった、それじゃ」

と言いままた受付の方へ戻る。

「ほら、依頼達成書だ」

「はい、確かに受け取りました。ギルドカードもお渡し願いますか？」

ギルドカードも渡さなきゃ駄目なのか。ジャージのポケットから取り出して受付に渡す。

「はい、確かに受け取りました」

そう言うと受付はギルドカードを水晶に挿入し、何やら操作しだした。

「これで依頼完了手続きは終了しました。ギルドカードをお返しします」

と言い水晶から取り出したカードを渡してくる受付嬢、カードを見てみると名前とランクは変わっていないが右下の方に1/1と言う数字が追加されていた。

「この右下の数字は何だ？」

「それは依頼を受けた数と成功した数を書いています。右の数字が受けた数で左の数字が成功した数です」

ふうん、依頼の成功率までわかるのか。便利だな、ギルドカード。

「これで終わりか？」

「はい、これで依頼完了の報告は終了です。毎回繰り返すので覚え

「ておいてくださいね」

「護衛依頼の達成とかはどう報告する？薬草や討伐みたいに証明するものがないが」

「その場合は依頼主から依頼達成書を受け取って、それをこの受付に渡してもらおう事になります」

「依頼は達成したが依頼主が依頼達成書を出さなかったらどうする？」

「その場合はギルドに報告していただければすぐに調査いたします」

「わかった。そういえば今日の宿がまだ決まって無いんだ、どこか良い宿を知らないか？飯が美味しい宿だったらありがたい」

「それでしたらこのギルドを出て左に真っ直ぐ行くとある、宿がお勧めですよ。」

「その宿の名前は？」

「ええーつと確か「満腹のお宿」だったかと」

何そのセンスが無い名前。

「行ってみるよ。ありがとう」

行って飯が不味かったら・・・覚えてるよ。

冒険者ギルドを出て言われた場所へと向かう。手続きにちょっと時

間がかかったせいか、もう外は暗くなっていた。

「ちよつと待ちなあ！」

面倒くさそうな事になりそうなので、とりあえず無視。

「待てって言うてんだろ！」

無視したら無視。

「この野郎！無視してんじゃねえぞ！」

と言って肩を掴んで来たので振り向いてみると見るからにチンピラ！
！って奴がいた。

「何の用だ」

「お前依頼を達成したばかりだろ？奢れよ」

何を言ってるんだこの馬鹿は？

「奢る理由がないだろ？馬鹿か？」

「何だとてめえ！これを見てもそんな事が言えんのかあ！」

そつ男が言うつと隠れていたのか四人ほどチンピラが出てきた。

「見たけど何？奢る理由と関係ないだろ？本当に馬鹿なの？」

「おいおい強がるなよ！怖いんだろ？この人数差でよお！こじじや

目立つからなあ！ついて来い！」

・・・やばいな、本当の馬鹿だ。どうしよう殺すか？でも目立ちたくないしなあ・・・ああ、ハプニング体質も大変だぜ。

まあ、身体能力が強化されてるから負ける気がしないが・・・

おお！そうだ！こいつらには近接戦闘でどこまで出来るか実験台になってもらおう！

とりあえず目立って困るのは俺も同じだから男の後をついていく。

路地裏に入った所で周囲に人がいないことを確認し、目の前の男の股間を蹴り上げて潰す。

「ギヤアツ！」

グチャツと言う音とともに男は崩れ落ちた。サンダルスリッパが脱げないように蹴るの結構大変なんだぜ。潰した感触がダイレクトに伝わるしさ！

ん？だつたらやらなければいいって？

・・・だが断る！

「おい！何やってんだてめえ！」

と後にいた四人が剣を抜いて襲い掛かってきたので、股間を潰されて倒れている男の首を掴んで起こし盾にする。

「ひ、卑怯だぞ！」

と変な事を言う男達。流石に仲間を斬る事はできないようだ。

「何を言っているんだ？人数を盾に脅迫してきたのはそちらだろう？殺されないだけありがたいと思えよ」

「くっ！野郎どもやっちまえ！」

「おいおい、仲間を見捨てるのかよ」

「うるせえ！」

と斬りかかってきた奴の剣に合わせて気絶している男を差し出す。

相手の男は慌てて剣を止めようとするも一度勢いがついた剣は止まることがなく、俺が手に持っている男を斬りさいた。

「・・・ア」

気絶しているせいか大した反応は無く男は絶命した。

「ひどい事をするなあ・・・死んじやつたじゃないか」

「あ・・・ああ・・・わ、わざとじゃない・・・わざとじゃないんだ！」

仲間を斬った男はかなり混乱しているようだ・・・追い討ちをかけるとするか。

俺は斬られた男の顔とあごを持ち

「いてえーよおー仲間じゃなかったのかよー」

と口元を腹話術みたいに動かす。

「ひい！？ち、違う！違うんだあ！」

声とか全然違うのに面白いようにうるたえている。 H A H A H A !
楽しいな！

他の奴らも仲間が死んだ事で動揺しているのか何もして来ない。こんな事をやっていて死なないとも思っていたのだろうか？

とりあえずうるたえている男もさっきと同じように股間を潰しておく

「ヒギヤッー！」

うむ、今度も見事に潰れたようだ。そしていまだに動揺している男達に声をかける。

「お前達は逃げないのか？」

「に、逃げるわけねえだろ！仲間の敵討ちだ！」

「ふうん、まあ別にいいけどな」

残っている男達の中で一番近い奴に向かって接近する。

「ひいー！」

男が慌てて剣を振るうが当たる訳もなく・・・剣を持っている腕を押さえてそのまま股間を蹴り上げて潰す。

「ギャヒイツ！」

倒れる男を前にして残り二人が襲い掛かってきた。

近づいてきた片方の男の背後に回って剣を持つてる手を力づくで操りもう片方の男に突き刺す。

「ウゲアツ・・・な、なん・・・で・・・」

と言って刺した男を見ながら倒れていく男。

「ち、ちがう！こ、こいつが無理矢理！」

と言いつつ訳をしているが、刺された相手からしてみれば剣が胴体を貫通しているのだから躊躇なく刺したように思えるだろう。

「あーあ、仲間を刺しちゃった。最低だな」

「お、お前が無理矢理やったんじゃないか！」

「何言ってるの？お前がやったんだよ。嫌なら剣から手を離せばよかったのに、離さないからこうなったんだ。」

「そ、それは・・・」

おっ、見事に動揺してるな。まあ実際は離す暇なんて与えなかった

だけなんだがな！

にしても朝から何も食って無いから腹が減ったな、さっさと片付けて宿に行こうと。

「それじゃお前もサヨナラだ」

と言って股間を蹴り上げる。

「ギャツ！」

ちなみに俺が股間を潰しているのは手っ取り早く戦意を喪失させるからである。決して俺のドS心が疼いたわけじゃない、決してだ！

血を派手に出させて戦意を喪失させても良かったんだが俺の服が血で汚れては困るからな。おかげで俺の服はほとんど汚れていない。

相手の股間は血と小便でひどいことになってるがな！蹴り上げたサンドルスリッパは汚れてないよ！純潔を守ってるよ！

さて、後始末どうするかな。

放置してもいいんだけど・・・復讐に来られると面倒くさいし、俺が強いつて知られるのも困るから殺しちやおつか？

問題はどうかやって殺すかだな、剣で殺すのは返り血を浴びそうで嫌なんだが、手っ取り早いのは確かなんだよな。

あと手っ取り早く殺せるとしたら首の骨を折るくらいか？

血も噴出さないだろうし。よし、あの技を使うか！

「くらえっ！必殺！サッカーボールキック！」

説明しよう！サッカーボールキックとは！

人間の頭をサッカーボールに見立てて蹴り上げる事である！

ボールは友達さ！と言っておいて容赦なく足蹴りにする某サッカー漫画の主人公と何か通ずるものがあるよね！

え？ない？・・・諸君にはガツカリだ！

こうして全員にサッカーボールキックをくらわせて、首が変な方向に向いたのを確認し、足早に立ち去る。

これ多分本気で蹴ったら首が飛ぶな。怖いぜ俺の身体能力・・・

人を殺したのはもちろん初めてだったので、漫画みたいに葛藤があるのかと思ったらそんな事はなかった。

これなら楽しく生きていけそうで安心した。

「もうその発想が俺のおかしさを証明してるな・・・」

と呟きつつ、俺はようやく「満腹のお宿」にたどり着いた。

中に入り早速受付へ、受付には人の良さそうな恰幅のいいおばちゃんが出た。

「いらつしゃい！食事かい？泊まりかい？」

「泊まりでお願いしたいんだが」

「あいよ！一泊3000ギル、朝夕の食事付だと3500ギル、食事のみなら一食400ギルになってるよ」

「食事は部屋で食べれるのか？」

俺は一人で静かに食事をするのが好きだ。

それにどこぞの主人公みたいに食事中にトラブルに巻き込まれるのは嫌だしな。

「大丈夫だよ、出来上がりは持っていくけど食べ終わったら自分で食器を持ってきてもらうことになるけどね」

「ああ、それでいい。食事付で二泊お願いする」

とりあえず二日だけ、一日でも問題ないとは思つが……念のために拠点は確保しておきたい。

「あいよ！料金は前払いになるよ」

「これでいいか？」

7000ギルをおばちゃんに渡す。

「大銀貨7枚、ピッタリだね。食事はすぐに用意するかい？」

「お願いできるか？」

「あいよ！部屋は二階の一番奥になるからね、食事はすぐに持っていくよ」

鍵を受け取り二階の奥の部屋へ、鍵を開けて中を見てみると6畳くらいの部屋にベッドとテーブルがひとつずつ。角部屋のせいか窓はふたつ。

テーブルの上にはギルドでも見かけた光る石が入っているランプの様な物が置いてある。これって寝る時どうするんだ？

と近くに厚手の布が置いてあるのを発見。これを被せればいいのかと納得する。

部屋の端の方に扉がついていたので中を見てみると

「うおっ！水洗トイレがついてる！すげー！洗面台もあるし！紙もロール状にはなっていないが置いてあるし！」

技術的に無理だと思うのだが魔法でどうにかしてるのか？うーむ、不思議だ異世界。考えているとドンドン！とノックの音がして

「食事を持ってきたよ！」

おばちゃんが食事をトレーに乗せて持ってきてくれた。

「ありがとう」

「食器とトレーは下にいる店員に渡してくれればいいからね！」

と言って慌しく出て行った。忙しいのだろうか？

まあいい、それより飯だ！

部屋に運ばれてきた飯はパン、サラダ、シチューの様な食べ物、飲み物は木のコップに入った水。サラダ用のフォークとシチュー用のスプーンがついている。

パンはちぎってシチューにたっぷりつけて美味しく頂きました。サラダはシャキシャキとした野菜の歯ごたえと酸味の利いたさっぱりとした味わいのドレッシングがグッド。

水も冷えてて美味しかった。

「ふう・・・「満腹のお宿」と言うだけあって味はよかったな。でもやっぱり日本人である俺は米が食いたいぜ」

まあ、我俣を言っても仕方ないしな。とりあえず食器を返しに言って今日の戦果を確認するか。

一階に行って食器を返す。おばちゃんに美味かったよって言うのも忘れない。明日の夕食は大盛りにしてくれるらしい。やったぜ！

「さて戦果確認だ。まずはあいつら二人が持っていた財布からだな」

まずジュリアが持っていた財布を開けて中身を全部テーブルにばら撒く

「金貨2枚、大銀貨3枚、銀貨が8枚に・・・これは銅貨かな？銅貨が5枚と」

うーん、銅貨の価値がわからんな。10か1の位だと思っただけど・・・まあ、今はいいか

次はイリスの財布か。

「んー、金貨1枚、大銀貨6枚、銀貨4枚に銅貨が7枚」

うむ、結構持ってたな。まあ満足だ。これで俺の所持金は銅貨を除いて9万8300ギルか、初日の稼ぎには十分だろう。

あと手に入れたのはパンツが2枚か、ちなみに俺はパンツをくんかくんかする性癖はない！被ったり履いたりする性癖もない！

ただ持ち主が履いたり脱いだりする所を妄想するだけである。うむ、立派な変態だな！

戦果の確認はこんなものでいいだろう。

「明日は魔法関係の店を見に行こうかな、全く異世界に来て初日だっというのに色んなイベントがあって疲れたぜえ・・・」

今日はグッスリ眠れそうだ、ちゃんと入り口と窓の鍵を閉めてと・・・さあ寝よう！

ランプに布を被せてベッドに入ると、すぐに眠気が襲ってきた。

ステータス

名前：ロツク

冒険者ランク：F

依頼成功率：1 / 1

所持金：9万8300ギル 金貨8枚、大銀貨16枚、銀貨23枚
価値の分らない銅貨、12枚

装備品：白のTシャツ、黒のジャージズボン、サンダルスリッパ、
黒のフード付マント、ナマクラナイフ

持ち物：パンツ2枚、ロープで作った荷物入れ、ギルドカード

使える魔法：>アースカルティベイト<、>アースライズ<、>ス
トーンイジエクト<

第7話（後書き）

一日目が終了しました。

二日目が書き終わってないのでちょっと更新止まります。

第8話

カーテンの隙間から朝日が差し込んでくる、もう朝のようだ。

外ではギョエーギョエーと鳥が鳴いている。

「そこはチュンチュンかコケコツコーにしとけよっ！」

と言つて俺は目を覚ます。

「いやー、久々だなこんなに寝たの。廃人だった頃は睡眠時間も削つてたからなあ」

と言いながら体をほぐす、飯はもうできてるかな？トイレに付いてる洗面台で顔を洗つて一階へ向かう。

歯も磨きたいけど歯ブラシなんてなさそうだし、この世界の人はどうしてるんだらうか。

一階に行くとおばちゃんに会った、いつもいるような気がするけどこの人ちゃんと寝てるのかね？

「おや！もう起きたのかい！早起きだねえ！」

「昨日は早めに寝たからな、食事はもう出来てるか？」

「食事はもうちょっと待ちな！できたら持っていくからね！」

「わかった。それと、寝起きで口の中が気持ち悪いんだが・・・」

「洗淨水なら一杯50ギルだよ！」

・・・洗淨水とな？普通の水じゃないのか？

「洗淨水？」

「なんだい！知らないのかい？昔の偉い魔導師が開発したお水でね、それでうがいをするとか口の中が綺麗になってスッキリするんだよ！」

何その便利な水。しかも魔導師が開発した水って事は魔法で作ってるのか？

「ああ、じゃあ一杯もらえるか？」

「食事の時に一緒に持っていくよ！お金もその時に払っておくれ！」

「わかった」

とりあえず部屋に戻る。ああー口内が綺麗になるって知ったらお風呂も入りたくなってきたなー

その洗淨水って体にも使えねーのかな。でもコップ一杯で50ギルって事は全身洗うの高くなりそーだな。

おばちゃんが来た時に聞いてみるか。

とりあえず今日は魔法関係の店に行って服屋にも行かないとな、流石にずっと同じ服を着ている訳には行かない。

あとは雑貨屋で何か使えそうなのないか探すか、お金も増えたしな。

コンコン

ん？おばちゃんのリックじゃないな？誰だ？

「誰だ？」

「お食事をお持ちしました」

「入ってくれ」

と言ってドアを開ける、入ってきたのはポニーテールの髪型をした可愛いらしい女の子でした。

おばちゃんと全然違うな、おばちゃんは返事をする前に容赦なく入ってくるのに……

「ありがとう。テーブルの上に置いといてくれ」

「あの、洗淨水の代金を……」

「これでいいか？」

そうやって銀貨を1枚渡す、これで銅貨の価値がわかるはずだ。

「はい、お釣りの50ギルです」

銅貨を5枚渡された。ふむ、銅貨は1枚10ギルか、これで俺の所

持金は銅貨も合わせて9万8370ギルになった訳だ。

「絵が描いてあるコップに入っているのが洗浄水ですので・・・」
と説明をしてくれるポニーテール。

「これって体や髪を洗うのには使えないのか？」

「体ですか？洗えますけど・・・そんな事をしているのはお金持ちの貴族か王族の方だけだと思いますよ？」

体を洗いたいのでしたら店の裏手にある小屋にシャワー室がありますので」

「ですよねー・・・ってシャワーあんの！？水洗トイレの時も思ったけど文化水準がわかんねえええええ！」

「そのシャワーってお湯は出るのか？」

「お湯が出るシャワーもありますが、そちらは有料になっております」

「なら水のみは無料って事だな？」

「はい、井戸から水を引いているだけですから・・・でも体を拭くタオルは有料ですよ？」

何そのシステム、タオルは持参した方が良さそうだな。

「わかった、色々ありがとう」

「いえ、」ゆっくりどうぞ」

そうしてポニーテールは出て行った。

さて、先にうがいをするか・・・洗面台に行き洗淨水を半分使つてうがいをする。

「ガラガラガラガラガラガラ・・・ペッ！」

・・・何この水すげえ！！・・・正直舐めてました。味は全くしないんだが終わった後のスッキリ感が凄まじい。

歯もトゥルトウルになっていた。ツルツルじゃない！トゥルトウルだ！

これを発明した魔導師はすごいな・・・天才だったのか？これの作り方が知りたい・・・

まあ、今は飯を食おう。

今日の朝食はパンに野菜と肉を挟んだもの、つまりはサンドイッチだ。肉には濃い味付けのタレが絡まっついてそれがパンと野菜に染み込んで美味しい。

飲み物は水じゃなく、さっぱりとしたレモンジュースの様な飲み物でこれもまた美味しい。

今日の夕食も楽しみだな。大盛りにしてくれるらしいが・・・覚えてなさそうな予感もしている。

さて、残してある洗淨水でうがいをして活動を開始するか。まだ朝早い。店が開いているといいな、開いてなかったらギルドで適当な依頼をこなそう。

一階で食器をおばちゃんに返す、美味しかったという言葉も忘れない。何事も繰り返して言う事が大切なのだ。

そのまま鍵を預け外に出ようとするとおばちゃんに呼び止められた。

「外に行くなら気をつけなよ!」

「何かあったのか?」

「この宿の近くで人が殺されてたらしいからね!」

・・・ああー昨日のチンピラどもかな。

「まあ殺されてたのは盗賊ギルドの連中だって言うからあんたは大丈夫だと思うけどね!」

「盗賊ギルド?」

あいつら盗賊ギルド所属だったのかよ・・・殺したのは早計だったかな。

でも殺さなかつたら更に面倒ごとになりそうだったからいいか。

「ああ！ならず者たちが集まって作ったギルドさ！」

「そんなギルドが存在を認められてるのか？」

「表立つては認められて無いけど裏じゃどうだかわかんないね！」

なるほど、利用価値はあるってことか・・・

「わかった、気をつけておくよ」

そう言つて外に出る。

ちなみに荷物は全部持つていつている。

まあさほど荷物らしい荷物を持つて無いんだけどね、荷物を置いてきて奪つた女性のパンツ見られたら嫌だし。

ちなみに魔法関係の店は昨日街をうるついている時にそれっぽい店を見つけてある。

さすがだな俺！

しばらく歩いて店の前についた。どうやら開いているようだ。看板には「魔」とシンプルに書かれているだけだ。

中に入り店内を見渡すと怪しい品がいっぱいあった。どうやら俺以外に客はいないようだ。

色々と見てみるが使い方や効果がわからないのでカウンターでフ
ドを深く被って顔を隠している人に聞いてみる。

「すまない、ちょっといいだろうか？」

「何でしょう？」

声を聞いて驚いた。てっきり爺か婆かと思ったのにかなり若い女の
声だったのだ。

まあ、若かろうが何だろろうが店を持つてるのでそれなりの知識はあ
るのだろろう。色々聞いてみよう。

「俺はこういう店に来るのは初めてなんだがお勧めの物はあるか？」

ここは素直にお勧めを聞いておかないとね、知ったかぶっても良い
事ないし、どんな物があるかもわかんないしねー。

「初めてですか・・・でしたらこの店に来たのも領けますね」

「・・・どういう意味だ？」

「この店は普通の冒険者や魔導師たちは訪れませんかから
んん？意味がわからないぞ。」

「紹介状でもいるのか？」

「いえ、紹介状などはいりませんが・・・」

被っているフードを取る店員。

「私は・・・魔族ですから・・・」

そう言っただけで現れたのは肌が青く耳が尖っているがそんなのは気にならないくらいに美しさを持った（ここ重要！）女性だった。

美人キターー！！魔族は初めて見たけど全員こんなに美人なのか！？

もしそうだとしたら俺は魔族の国に住みたいぞおお！

つといつまでもじろじろ見てると変に思われるな。

「魔族だと何か問題でもあるのか？」

「問題と言いますか、人と魔族では種族としての力の差がありすぎるので魔族を恐れる人が多いのです」

ああ、そういうことなのね。

「ふうん、種族としての力の差があるのは獣人なども同じじゃないのか？」

「魔族よりは力の差がありませんから恐れる人はほとんどいないです」

そんなものなのかね？

「強いからって無差別に人間を襲ったりしないんだろ？」

「そうですね、強大な力を持った魔王がいた時代は暴れてたみたいですがそういう魔王が倒されてからは滅多にありませんね」

「なら何も問題は無い」

と思う。

「人族にしては珍しい性格をしていますね」

「褒め言葉として受け取っておこう。それより魔王ってまだ居るのか？」

さっきの言い方だと強大な力を持ってない魔王は残ってるみたいじゃないか。

「ええ、魔族が住んでいる国・・・「魔国」と言っんですけど魔国領内の各地を治めている人たちが魔王と呼んでいます」

ほう、領主の事を魔王と呼んでいるのか何か物騒だな。

「そういえばお勧めの物を探してるんですけどね。失礼ですが冒険者の方ですか？」

「冒険者ギルドに所属している魔導師だ」

「魔導師の方でしたか。属性をお聞きしてもよろしいですか？」

「属性って魔法の属性だよな？それなら『地』属性だ」

「・・・あなたは本当に珍しい人ですね。今時『地』属性を使う人

がいたとは驚きです」

えっ？どういうこと？土木作業や農作業の人が使ってるんじゃないの？

「ちょっと待った。今時つてどういうことだ？まるで今は使ってる人がいないみたいじゃないか」

「え？」

「え？」

シーンとする店内、辺りに気まずい空気が流れる。

「・・・もしかして知らないのですか？」

「すまないが田舎から出てきたばかりで冒険者ギルドに入ったのも昨日の事なんだ。良ければ教えてくれないか？」

「なるほど、それなら知らないのも仕方ありませんね。説明しますと今は魔法がかかっている道具、それを「魔道具」というのですが・・・

それが普及しているので『地』属性魔法でやっていた作業は皆さん魔道具を使ってやられてますよ？魔道具は魔法が使えない人でも簡単に使えますからね」

・・・マジで？どつりでフリーザ達に『地』属性魔法を使った時に気づかれないわけだ。

ずっとあいつらが馬鹿だからと思ってたのに。ショッキング！

もしかしてギルドや宿にあった光っている石も魔道具だったのか？

「その魔道具って永遠に効果を発揮するのか？」

「いえ、魔道具には核となる「魔石」が埋め込まれているんですがその魔石が壊れたり、魔石に溜め込まれた魔力が無くなると効果を発揮しなくなりますね。

あつ、魔力が無くなった場合は魔石に魔力を注ぎ込めば再び使えるようになりますよ」

なん・・・だっ！？

「魔道具が便利なのはわかったが『地』属性に適正がある奴はどうしてるんだ？使われなくても適正がある奴はいるだろ？

それに自分に合わない属性の魔法を使おうとすると発動しない事があるらしいじゃないか」

「今は杖の性能も上がってますから魔力がある程度あれば『地』属性の適正者も威力は劣りますが他属性も使えますよ？」

あるえー？本に書いてあつた事と違うじゃん・・・

「んん？俺が読んだ本には発動しない事が多々あると書いていたが・・・」

「ああ、それは初心者用の本ですね。あの本は魔法に興味を持たせるのが目的であって書いてあるのは結構適当なんですよね」

えっ、なにそれ怖い。

「そもそも本に書いてある通りにやって魔法を発動できる人なんていませんからね。自分の適正属性すら分からない訳ですから」

確かに属性を判別する方法は書いてなかったな・・・なんというトランプ！

俺は神様からチートを貰って更に適正属性がわかってたから発動したって訳か・・・

「普通はどうやって適正属性を判断するんだ？」

「一般的には魔導師を育てる学園に入学する際に検査をしてくれませぬ。あとは魔導師に弟子入りすれば魔導師ギルドが検査してくれます」

なるほどなるほど。

「結構面倒なんだな。俺は独学で適当にやってたらわかったんだが・・・」

本当は元からわかってただけだね！

「ああ、たまにそういう人もいますね」

いるのかよっ！

「あつ、ちなみに人族以外の種族で『地』属性を使う種族はいますよ」

「ん？そうなのか？」

「『地』属性は範囲魔法が多いのですが人族の持つ魔力の量だと範囲魔法を使っているとすぐに魔力が切れそうですからね。」

ですから魔力の量が多い種族だとそういうのは気にしませんからね」

ああー・・・なるほど、魔力の量も理由の1つなのか。

他にも色々聞いてみたところ種族によって魔法も色々あるらしい。

精霊と親しい種族は精霊と契約をして精霊魔法を、膨大な魔力を持つ種族は人族には使えない属性を使う事が出来るとか・・・

ちなみに他の種族が『地』属性を使えるって言うてもやっぱり戦闘には使わないらしい。

強いと思うんだがなあ、だがこれは利用できそうだ。

相手が予想しない属性って事は初めて戦う相手の場合かなり有利になる。他にも色々・・・H A H A H A！やっぱり『地』属性は最高だZ E！

でもやっぱりデメリットもあるわけで・・・

「誰も使ってませんので『地』属性を補助する杖などは置いてませんよ?」

だつてさ!そりゃそうだよね!

「まあ、仕方ないな。そういえば杖ってどんな効果の物があるんだ?」

これは聞いておかないとな。

「基本は各属性の補助ですね。どんな種類の杖でも属性補助が必ず入っています」

「適正属性がなくても魔法が使えるって奴だよな?」

「はい、例えば『火』属性補助が入った杖だと『火』属性魔法が使えるようになります」

「その場合元々『火』属性の適正を持っていたらどうなるんだ?」

「魔法の威力や発動速度がアップしますね」

ふむ、本当に補助なんだな。

「杖には一つの属性補助しか入ってないのか?」

「高価な杖だと複数入ってることもありますよ」

うーむ、複数持ちは相手にするのが面倒そうだな。

「他に効果はあるのか？」

「あとは魔力消費を減らしたり魔法の発動を早めたりするくらいですかね」

んー『地』属性以外使う気はないから杖は買うのはやめておこうかな。

「私のお勧めは『火』か『水』属性補助がついた杖ですね。人気があつて応用も利きますから色々と便利ですよ？如何ですか？」

「悪いが『地』属性以外使う気はないんだ。杖はもういいから他に何か魔道具はないか？」

「んーそうですね、それならこの着火石は如何でしょう？」

そついつて店員が取り出した物を見ると手に収まるサイズの石？に小さな赤い石が埋め込まれている。

「着火石？」

「はい、こちらの着火石は火をつける魔道具でして、冒険者が必ず持っていると言つても良い位の必須商品です。試しに使ってみますから見ていてくださいね」

店員が手に持った着火石を発動させると小さな赤い石が光りだしてちろちろと小さな炎が出てきた。

要するにライターか。確かに冒険者には必須だよな。

「それは便利だな、ひとつ貰おう」

「ありがとうございます」

「その赤い石が魔石で良いんだよね？」

「そうですね、こちらの石が魔石です。属性によって色が変わるようになっていきます」

「なるほどね、『火』属性だから赤いのか、魔力が切れた場合はすぐに気づける物なのか？」

「気づかないで冒険に出て後で使えない事に気づくとか笑えないぞ。」

「魔石に込めた魔力が減りますと魔石の色が黒ずんでくるので無くなる前に気づくと思います」

「なんて便利な・・・」

「魔力を魔石に溜めるにはどうすればいいんだ？」

「魔法を使う時に魔力を集めますよね？その要領で魔石に流し込めば良いだけです」

「案外簡単なんだな」

「はい、ですから新人の魔導師は魔石への魔力溜めでお小遣い稼ぎをしているみたいですよ」

「ああ、魔石に魔力を溜めるだけで金になるのか。何て安定した職業

なんだ魔導師……

「あっ、でも魔石の許容量を超えて魔力を注ぎ込むと魔石が割れま
すので注意してくださいね」

「それはどうやって判断すればいいんだ？」

「魔石の色の強さで判断して貰うしかありませんね。余りにも魔石
が強く輝き出すと危険です」

ふむふむ。

「ですから魔力が多い魔族の場合は小さい魔石だと魔力を溜められ
ないんですよ。一瞬で壊れちゃいますから」

むう、魔力が多いと危ないって事は俺の場合もすぐに壊れそうだな
注意しないと……

その後も色々と役立ちそうな物を買って店を出る。

ちなみに買った物は

1：着火石 1500ギル

効果：小さい炎を出す事が出来る。

2：結界針 1万ギル

効果：刺した場所から半径2mの範囲に魔物を防ぐ結界を張る事が出来る。

継続時間は魔石に魔力が満たされている状態で24時間程。

ただし張った結界は一定以上のダメージを受けると壊れてしまう。

3：冷水筒 3000ギル

効果：いつでも冷たい飲み物を飲む事ができる水筒。容量は5リットル程。

ちなみに水筒と書いてあるが筒状ではなく特殊な皮を使った袋状の物なので使わない時は小さく折りたたんでおく事ができる。

買った魔道具はこれだけだ。

水が冷やす袋があるなら食材を冷やす魔道具があっても良い筈だと思っただけ聞いてみたらあるらしい。

だったらそれも買おうと思っただけだが冷水筒みたいな柔らかい皮製の物がなく硬い素材でできた物しかないのだとか・・・

さすがにそれじゃ旅するのに邪魔すぎるから買わなかった訳だ。

とりあえずこの3つさえあれば旅はある程度大丈夫だろう。何か足

りないと思ったらまた買えばいいだけだしな。

ついでに中級以上の『地』の魔道書がないか聞いてみたが残念ながらないと言われてしまった。

魔法学園がある街「サイクオッツ」なら資料用としてあるだろうとの事。

・・・資料用ってひどくね？

主人公の所持金 9万8370ギル 8万3870ギル

適当に街をぶらついていると子供がドンとぶつかってきた。

これはもしかして・・・盗人フラグか？と思い即座に荷物をチェックしてみるが特に異常はなかった。

俺が荷物をチェックしている間に子供は謝りもせず足早に去っていった。

次に会ったらボコボコにしてやると心に誓っていると

「おい！あんた！ガキを見なかったか！？」

高い服だといくらになるか想像がつかん。

どうすっかなあー替えがないとさすがにきつい。我慢するか・・・？

いや！駄目だ！服の着心地が悪いとイライラするからな。

どうすっかなー・・・

「そこのお兄さん・・・何かお悩みのようだね・・・？」

ローブを被った婆が話しかけてきた。婆の前には水晶玉があつて怪しきMAXだ。

「わかるか？俺は今とても悩んでいるんだ」

服の生地。

「どうだい・・・？占つてみないかい？答えが見つかるかもしれないよっ。」

「俺の悩みを当ててくれたら考えるよ」

「ヒヒヒ・・・簡単だよ、お兄さんは今仕事で悩んでるね・・・？」

はい！違う！婆インチキ決定！

「仕事では全く悩んでないな」

「わかってるさ、冗談だよ・・・恋人関係だろう・・・？」

・・・この婆はこうやって当たるまで冗談で通すのだろうか？

「恋人関係でも悩んで無い」

「ヒヒヒ・・・だったらアレだね。アレしかないよ・・・」

とうとうアレとか言い出したぞ、この婆駄目すぎる。死ねばいいのに。

「婆もう黙れ、天に召される」

と言って立ち去る。

「ま、まっておくれえ・・・ゴホッゴホッ・・・ああ・・・持病の発作が・・・」

おいおい、今度は同情を引こうとしてるし・・・

「そのまま死ね」

全く変なのが多い街だぜ・・・

仕方ない・・・とりあえず服は諦めて道具屋でも探すかな。

そうして歩いていると道具屋っぽい店を発見っ！

店名はつと・・・ん？カイヌス商店？

カイヌスって何処かで聞いたような・・・

あつ、俺が助けた商人か。

確かに商人って言ってたけど本格的な店持ってたのか・・・

護衛無しで外に出るくらいだからってつきり露天商くらいかと思ってたんだがな

まあいいや、入ってみよう。

店の中に入ると結構な数の客がいた。

結構流行ってるんだなあ・・・と考えていると

「いらつしゃいませ〜何か御入用ですか？」

と何処にでもいそうな人族の青年が話しかけてきた。

他にも客はいるのに何で俺にだけ話しかけてくるんだ？と思いながらとりあえず基本的な事を聞いてみる。

「ここって道具屋であってるんだよね？」

「はい、当店は冒険者に必要な道具を取り揃えたお店でございます」
「ふむ、冒険者用の道具屋だったのか・・・って言われても違いがわ

からねえよ！

こっちは異世界二日目だぞこの野郎！

まあそんな事は置いてだ。

「何で俺に話しかけてきたんだ？」

一応聞いておかないとね。

「初めて見えられたお客様には話しかけるようにはしておりますので
来た客を全員覚えてるのかよ。

「ところで何かお探しのものはございますか？」

ふむ、探し回るのも面倒だし全部用意してもらおうか。

「とりあえず旅に出るのに最低限必要な物を探している」

こう言っておけば余計な物は勧められないはずだ・・・多分。

「それでしたらこちらの「新人冒険者さん必見！これさえあれば大丈夫！・・・かもしれないセット」はいかがでしょう？」

何その商品名・・・

「どんな商品か聞いてもいいか？」

「はい！こちらはですね、これから旅を始める新人冒険者さんに向

けた商品でして・・・」

説明を求められるのが嬉しいのか嬉々として説明を始めた店員・・・
だが！長いのでカットさせてもらおう！

商品の内容は以下の通り。

1：毛布×1 2000ギル

寒い日も安心！これ1枚あるだけで大満足な暖か毛布！暖かい日？
なにそれ？おいしいの？洗濯はマメにしてよねっ！

2：包帯×1 200ギル

傷口を覆って優しく保護！傷口が無くても巻いていけば「クツ！
が疼くぜ！」って出来ちゃう厨二病のあなたにもお勧めの一品。

3：ポーション×5 250ギル×5

簡単な傷を癒す薬。飲んでよし！傷口にかけてもよし！飲んだ場合は
体力もちよこつと回復するよ！傷口にかけた場合は超しみるから
SMプレイにもお勧めだよ！液体の色は赤。

4：解毒ポーション×5 300ギル×5

簡単な毒なら解毒しちゃう薬。これは飲み薬です。ぶっかけても効
果はないから要注意だ！液体の色は緑。

5：縄×1 300ギル

そう簡単には切れない・・・はずの丈夫な縄。縛っちゃうのかい？
縛っちゃえよ！俺は簡易SMPプレイが大好きだあああ！あつもち
ろん普通の用途にも使えるよ。

6：片手鍋×1 1000ギル

煮てよし！焼いてよし！あれば便利な片手鍋！保存食だけじゃ物足
りない！そんなあなたにピッタリだ！

7：道具袋×1 1500ギル

入っちゃうよ！上の道具が全部まとめて入っちゃうよ！それでも空
きスペースがあるよ！これはもう道具袋の粋を越えているのではな
いか荷物入れでもおかしくは無い。

ちなみに巾着みたいに紐で口の部分をギュッと出来るよ！

以上7点がまとめられているセットだ。

ふむ、あつてよし！だな。ちなみにポーション類は透明の容器で出
来た平底プラスチック状の容器に入っている。テンプレの容器だな。

ゲームとかでよく見かけてたが、実物を見ると激しい戦闘とかした
ら割れそうで怖いな。

「このポーション類は割れないのか？」

「強い衝撃があると割れてしまいます。戦闘をする時は注意して貰
うしかないですね。あつ、空容器は買い取りしてますので是非持っ
てきてくださいね」

・・・容器の買い取りって昔あった瓶ジュースを思い出すなあ。

更に詳しく聞くとこの容器以外だと品質が変わって効果を失ってしまつらしい。気難しい液体だな。

「こちらは単品で買い揃えますと7750ギルなんですがセット品と言つ事で7000ギルとなっております」

「ふむ、ならそのセット品と道具袋を後二つくれ」

財布用と食材入れるよつの袋も買っちゃうぜ。

「はい！ありがとうございます！道具袋のサイズはどうしましょう？」

と言われたから用途にあったサイズを選んでお会計。

ちなみに財布用の小サイズが500ギルで食材用の中サイズが800ギルほどだった。

合計で8300ギルを払い店を出る。

ちなみにカイヌスの姿を見かける事は無かった。

にしても良い買い物をしたな。

道具袋が手に入ったのでローブで作った荷物入れは捨てた。もう必要ねえんだよおおお！

さて、それじゃあ今日もお金を稼ぐためにギルドへ行きますかねー

主人公の所持金 8万3870ギル 7万5570ギル

ギルドへ到着すると何やら受付が騒がしい。

騒がしいって言うか受付が見えないくらい人が集まっている。

何かあったのか？と思って近くにいた野次馬に聞いてみる。

「騒がしいが何があったんだ？」

「ああ、フリーザって言う冒険者が来ててな。そいつが受付で騒いでるんだよ」

フリーザ？フリーザって昨日、俺がおちよくってボアにボコボコにされて体のある部分がポークビッツ以下のあいつだよな？生きてたのか。

それにもう動けるようになってるとは予想外だ。どうやって治療したんだろう。

同名の別人って事も考えられるが、何人もあんな名前の奴がいても困る。

「そのフリーザって奴は何を騒いでるんだ？」

「フリーザが言うには依頼を誰かに妨害を受けたんだとさ」

ふむ、妨害された事に気づいたのか、まあ気づかない方がおかしいくらい妨害したんですがね！

「それでフリーザの後に北の草原の依頼を受けた奴がいるって何処からか聞いたらしくて、そいつが俺達をはめたに違いないって騒いでるんだ」

うむ、俺のことに間違いないな。だが俺自身がフリーザ達に姿を見られたわけでもないし、何の問題もないだろう。

依頼を受けただけで犯人に決め付けられないだろうしな。

「それにこれは聞いた話なんだが・・・」

「ん？他にもあるのか？」

「昨日街に帰ってきた時に裸に葉っぱ姿だったらしい」

・・・葉っぱ？

「葉っぱ？」

「そう、葉っぱ」

「・・・ブハツ！」

「おいおい、大丈夫か？」

「だ、大丈夫じゃない・・・わ、笑いが止まらない・・・クツクツ
クツ」

「だよなあ、俺も聞いた時は吹き出したからなあ・・・」

「す、すまんすまん。ふう・・・ようやく落ち着いてきた。で、それ
れって本当なのか？」

「何人も見た奴がいるから本当じゃないか？ちなみに顔も葉っぱで
覆ってたらしい」

顔も覆ってたとか、完全に変質者だな。

「よくそんな怪しい格好した奴が街の中に入ってこれたな」

「いやあ、それがな門の衛兵に向かって「俺は勇者の子孫だ！」っ
て言ったらしい」

「ブフウツ！」

「うおっ！」

「ゲホツゲホツ・・・ひ、ひどいなそれ」

笑いを通り越してむせてしまったぜ。

「だろ？昨日そんな事があつた上から今度は何をするんだろって
皆集まって見てるらしい」

ふむ、完全にネタキャラになったようだ。

と受付の会話が聞こえてきたので聞いてみよう。

「ですから！そういう事はギルドの信用に関わりますから言えないと言っているじゃないですか！」

おお、あの大人しそうな受付嬢が怒ってるようだ。

「勇者の子孫である俺様の依頼を邪魔したんだぞ！？」

「ですから証拠はあるんですか！」

「証拠なんてなくても俺様がそう思っているんだ！俺様が正しいに決まってるだろ！」

何処までも馬鹿だなアイツ。

「それがおかしいと言っているんです！それに妨害されたと言ってますが目撃もしてないんですよ！？
本当に妨害されたと言えるんですか？」

頑張れ受付嬢！俺に被害が及ばない限り俺は味方だぞ！！

「目が覚めた時に装備品がなかったんだぞ！俺様の後に依頼を受けた奴が盗んだに違いない！」

「妨害関係なくなってるじゃないですか！それに目が覚めたって事は敵にやられて気絶してたんですよ？盗まれても完全に自業自得だと思いますけど？」

「だから俺様がボアごときに気絶させられるわけないと言っているんだ！そいつが邪魔したに違いない！」

「実際にやられて気絶してるじゃないですか！それにあなたのパーティにはあなたを含めて三人もいたんですよ？」

あなたが言うには三人とも妨害を受けたんですよ？それなのに誰も目撃していないっておかしいじゃないですか！しかも何をされたかもわからないって・・・

あなた達は結果として依頼を達成できなかった！それはまだいいでしょう、失敗するのはよくある事ですので他の冒険者に受けてもらえばいいだけですから。

しかしあなた達は失敗の理由を他の冒険者の妨害のせいだと言い張っている。

それも証拠があるならいいでしょう！ギルドが責任を持って調べ、本当に妨害をしていたならきちんと罰を与えます！

冒険者ギルドの原則として依頼内容が同じ物でない限り、冒険者が冒険者の邪魔をする事は禁止されていますからね！

ですがあなた達は証拠も無い、目撃もしていない、何をされたかもわからない、そんな話を誰が信じるって言うんですか！

ギルド側から言わせてもらえば、敵にやられたのも装備品を盗られたのも実力に合わない依頼を受けたあなた方の自業自得です！」

プププ・・・正論で返されてやがる。

でも同じ依頼なら相手の妨害をしても良いってそんな原則あったんだな。今初めて聞いたぞ。

禁止しても防げないからか？

まあ、今はそんなことよりだ・・・お顔が真っ赤なフリーザ様は何て返すのかな？

あれ？そついやお供の二人がいないな。何処にいるんだろ？

「クソツ！お前みたいなたつ端じゃ話にならん！ギルドマスターを呼べー！」

おいおい、ギルドマスターまで呼ぶのかよ。無理だろ。

と思っていると入り口から誰かが入ってきた。

フリーザを見ていた野次馬達がその人物に気づくと慌てて道を開けていく。

見よ！人垣が割れていくぞ！まるでモーゼの再来だ！

モーゼが割ったのは海ですけどね！と自分のボケに自分がツッコミを入れる一人漫才をしていると・・・

「兄さん！」

とフリーザが言った。

兄さん！？と慌ててその人物を観察するとイリスとジュリアを連れ
た一人の男がそこにいた。

その男の容姿は筋肉質のガツチリした体に髪の色だけはフリーザと
同じ金色だが短髪が似合う爽やかなイケメン・・・

装備品も心臓の部分だけを覆うプレートとそれと対の形をした背中
を守るプレートを繋げただけの銀色の鎧と手甲に足甲の、余計な装
飾などないシンプルな装備。

完全に動きやすさ重視だな。武器は持っていないように見えるが・
・徒手空拳で戦う人か？

にしても・・・にてねええええ！何なの？本当に兄弟なの？フリー
ザは橋の下の子じゃないの？

「兄さん！聞いてくれよ！この受付が全然僕の話聞いてくれない
んだよ！」

あれ、俺様って言わなくなったな。言葉使いも変わってるし、流石
に兄は怖いのか？

でも受付はちゃんと話を聞いていたぞ、聞いてなかったのはお前の
方だ。

などと考えていると・・・ブツツと言う音とともにフリーザがギル
ドの外へ吹っ飛んでいた。

第8話（後書き）

お久しぶりです。お待たせしてすみません。

第9話

フリーザが外へ吹っ飛び周りが騒然としている中、俺は今、目の前で起こった事について考えていた。

外へ吹っ飛ばされたフリーザはどうでもいいんだが、問題なのは・
・何をやったのかほとんど見えなかった事だ。

フリーザ兄が動いたのはわかっている・
・だがどうやって吹っ飛ばしたのが全く見えなかった。

今の俺が戦ったら多分勝てないっていうのはすぐにわかったけどな！

「ガハッ！・・・兄さん・・・な・・・んで・・・」

と言いフリーザは気を失う。

「愚弟が迷惑をかけた、詳細はここにいる二人から聞いている。ギルドに落ち度は一切無い、全部こいつの慢心が原因だ。また後日、正式に謝罪に来させる」

そう言っ肩にフリーザを担ぎ兄はジュリアとイリスを連れて去っていった。

・・・かけえええええ！何あれ！あれこそ勇者の子孫って名乗っていいレベルだよな！

それに比べて弟は・・・

まあ、どうでもいいか。

もう会う事もないだろう・・・ないよね？

・・・気を取り直して依頼をこなしていこー！

Fランクの依頼が貼ってある掲示板を見ていく。

おっ、またボア退治の依頼があるな。馬鹿が失敗したせいか報酬金額が上がってる。

だが俺はこの依頼を受ける気は無い。俺をあれだけ楽しませてくれたボアを殺すなんて・・・できないよ！

まあ出会ったら殺すんだろうけどね。

そんな事を考えつつ依頼を見ていくと高額なの発見！

依頼：ヌンドックの捕獲

西の森にいるヌンドックを捕獲してきてください。

なるべく傷をつけずをお願いします。

報酬：3500ギル 状態によっては増額します。

西の森っていうのは多分、俺が出てきた森だろう。

又ンドックなんて生物いたのか？っていうかあの森で生物を一匹も見て無いんだが・・・

まあ、森の位置はわかってるし縄もあるから捕獲も問題ないだろう。

どんな生物かは受付に聞こうつと。

受付に依頼を持っていく。

「この依頼を受けたいんだが」

「はい、どの依頼で・・・あっ！あなたは！」

「何だ？」

面倒くさい事になりそうな・・・予感！

受付嬢が顔を近づけてヒソヒソと話しかけてきた。

「昨日、北の草原に行きましたよね？」

「行ったがそれがどうかしたか？」

何も悪い事はしてないのだから堂々と答える。

「その時に何か見かけませんでしたか？」

「裸で寝ている三人組がいたが・・・気持ち良さそうに寝てたからそういうプレイだと思って放置したぞ」

「ッ！・・・他に誰か見かけませんでしたか？」

「いや、特に何も見なかったな」

「そうですか・・・」

何か納得してなさそう顔をしているが俺は知らん！知らんぞ！

「それより依頼なんだが・・・」

「あつ、失礼しました。ヌンドックの捕獲ですね。ヌンドックがどのような生物かは知っていますか？」

どうやら面倒くさい事にはならないらしい。よかったよかった。まあ面倒くさい事になっても街から出ればいいから何も問題は無い。

「全く知らない」

名前から犬っぽいっていうのはわかるんだけどね。

「そうですか、ヌンドックは小型の魔獣でしてヌンヌンと鳴きます。それさえ知っておけばヌンドックとすぐに判別できるでしょう」

えっ？魔獣なの？しかもヌンヌンって何？ワンワンでいいじゃん。

「魔獣って危険じゃないのか？」

「いえ、危険はそんなにありません。ヌンドックは性格が大人しくこちらが手を出さなければ襲われる事はそうそうないですよ」

大人しい魔獣ねえ・・・だったら普通の獣扱いでいいんじゃないの？

まあ、見に行つて無理そうなら諦めよう。

「捕獲した後はどうすればいいんだ？」

流石に魔獣を連れて街には入れないだろ。死んでるなら別だが。

「捕獲した後は門にいるギルド職員に言って引き渡してもらえば大丈夫です」

「門にギルド職員がいるのか？」

「ええ、街が襲撃された際に即座に緊急クエストを発行するために常に待機しています」

ふうん、色々やってるんだな。

「わかった、捕獲した魔獣の査定もそいつがやってくれるんだな？」

「はい、その際に依頼達成書をお渡しするので、それをこちらまでお持ちください」

「わかった。依頼には関係ないがちょっと聞きたい事があるんだが」

「なんでしょうか？」

「先ほどギルドに入って来た男は誰だ？」

「レイ様の事ですか？」

「名前は知らないが・・・フリーザだったか？そいつを担いで出て行った奴だ」

「だったらレイ様で間違いありませんね。レイ様はフリーザ様の兄で三兄弟の次男になります」

「あいつも冒険者なのか？」

「そうですね、レイ様はBランクの冒険者です」

あの実力でBランクとかその上にいる連中はどれ程の化け物だよ・

「ちなみに長男のグレイル様はSランクの冒険者ですよ？」

長男がSで次男がBなのに三男がF・・・？

やっぱりフリーザは面白い奴だな！H A H A H A !

「Sランクってどれくらい強いんだ？」

「そうですね・・・今ギルドに登録している冒険者の中では上位10人に必ず名前が入る実力者ですね」

何それスゲー！

「ちなみにレイって奴はどうなんだ？」

「レイ様も冒険者ランクはBですが実力はAくらいありますからね。上位100人には入ってるでしょうね」

「んん？実力はAなのにランクはBっておかしくないか？ランクアップしてないの？」

「ギルドからも何度かランクアップの要請は出しているのですが、イ様は大規模PTを組んでまして新人育成もあるからって断ってるんですよ」

「面倒見も良いとか・・・お前がナンバーワンだ！って言いたくらいの人格者だな。」

にしても

「大規模PTって何だ？」

「そんな単語初めて聞きましたけどお！」

「20人以上のPTを大規模PTと言うんですよ」

「20人以上って多いなあおい！」

「それPTとして機能するの？」

「もちろんクエストを受ける時は何グループかで別れて受けるのが普通ですよ？大規模PTは利益も多いのですがもちろん不利益もありますのでご説明しますね」

と言つて説明をする受付嬢。面倒だから俺がまとめるよ！よ！

1：情報やアイテムの共有

強い人からおこぼれを貰うよ！魔物の情報も聞けて便利だよ！安全度が上がるね！まあこれは普通のPTでは情報くらいだね共有は！アイテムは個人持ちつてのが多いよ！

持っていないフリしてPT仲間のアイテムを無料で貰おうとする奴もいるからね！要注意だつ！

2：依頼の共有

依頼も共有できちゃうよ！報酬は冒険者のランクによって差額が出ちゃうけどね！もちろん死んでも責任は取らないよ！

でも強い人にくつついて依頼の成功率を上げるには便利かもよ！まあ、酷いPTだと使い捨ての駒にされることもあるらしいけどね！ちなみに普通のPTの場合はランクを合計して平均値の依頼が上限になっちゃうよ！AとFが組んだ場合、平均はCかDだけど低い方を取られるからDまでの依頼しか受けられないよ！

だから普通はランク差のあるPTなんて組まないよ！1つか2つくらい差じゃないとおいしくないからね！

3：PT加入、脱退の制限

大規模PTは普通のPTと違って申請書を出さないと加入できないし脱退も出来ない。加入はPTリーダーの許可が必要だが脱退に関

しては本人だけで行える。

ちなみに1回脱退した大規模PTに再度加入する事は出来ない！アイテムの持ち逃げがないかって？あるみたいだよ。まあでも脱退する時にギルドがある程度調べるみたいだね。

あと普通のPTを組むには依頼を受ける時に言っておけばPT扱いされる、途中で加入はできないのだよおお！脱退はできるみたいだね。

とりあえず説明するのはこれくらいだっ！

「なるほど。結構面白いシステムだな」

「まあ、そういうことですので個人としてはAランク級なのです」。

「わかった、色々ありがとう。そろそろ依頼に向かうよ」

ギルドから出て西にある門へ向かう。

あっ、言い忘れてたけどこの街の門は東西南北にあるが使用できるのは西、南、東のみ。

北の門は領主の家の敷地内にあるから緊急事態じゃない限り使用禁止らしい。

だから昨日の依頼も西の門から出て北に向かったからちょっと時間がかかって面倒だったよ。

ちなみにどうでもいいことだが、俺は未だに西の門しか利用した事が無い。

この街にやってきた時に通ったのも西の門だったし、依頼で出入りしたのも西の門だったからだ！

本当にどうでもいいことだったな。それじゃあらためて出発だ。

西の門にいる衛兵に挨拶をして外に出る。

森に向かう途中であることを思い出した。

昨日殺さずに放置したゴブリンはどうなったのだろうか？

「ちょっと見に行ってみるか」

と見に来てみたのはいいのだが・・・

「くらえっ!!」

「ギャッ!」

見知らぬ少年がゴブリンをボコボコにしていた。

ゴブリンはボコボコにされながらも生きているようだ。

生命力たけーなー。昨日から丸一日経っているのに生きているとは・

・さすが魔物だ。

とりあえず少年に近づいて話しかけてみるか。

近づいて少年を観察してみると鉄製の鎧に剣を腰に身に着けている。戦士か？

「何をしているんだ？」

「見て分かんない？魔物を倒してるんだ！」

「冒険者なのか？」

「ああ！そうさ！すごいだろ！」

いや、俺も冒険者なんだけどさ。

「ランクは？」

「今はFだけどすぐに上がってみせるさ！」

ふうーん。

「そのゴブリンは殺さないのか？」

遠くから見てたけど持つてる剣も使わずに蹴り飛ばしてるだけなんだよな。

「ああ、こいつには仲間の所に案内してもらおうんだ！それでゴブリンどもを皆殺しにして報酬をもらおうって寸法さ！」

はて？Fの依頼にゴブリン討伐なんてあったっけ？

「Fランクでゴブリン討伐依頼なんてあったか？」

「無かったから受付に言ったんだけどさ、受けさせてくれないから独断でやってるんだ！ゴブリンごときなら僕一人でも余裕で倒せるって言う事をギルドに証明するんだ！」

「・・・ちよつとギルドカード見せてもらって良いか？」

「いいよっ！ほらっ！」

と言って見せてもらったなら依頼達成数が0/0だった。ちなみに名前はボブだ。

「無茶じゃないか？」

「ハハッ！受付の人と同じ事を言うね！でも大丈夫さ！ほら！こっちはやって倒せてるだろ？」

と言って倒れてるゴブリンを蹴飛ばしている。

そいつは俺が昨日弱らせておいたんだけどなあ・・・

と考えていたら、俺の強化された視力が遠くの方に何か動く物体を捉えた。

「そっか、まあ頑張ってくれよ」

俺は嫌な予感がしたので急いでその場を後にする。

「ああ！すぐに僕の名前が国中に広がるよ！楽しみにしてて！」

と俺に向かって大声で言い放ち、ゴブリンに蹴りを入れるボブ。

「ギヤアアイ！」

叫びをあげるゴブリン。

その声を聞いて遠くから砂煙を上げて何か近づいてくる。

足早に歩きながら砂煙を上げている何かをよく見てみると・・・

「やっぱりゴブリンの集団かよ！」

遠くから砂煙を上げながら近づいてきているのはボコボコにされている仲間を見て怒り狂っているゴブリンの集団だった。

俺は急いで森の中に入り隠れてゴブリンの集団とボブを観察する。

ボブはまだ気づいていないようで倒れているゴブリンをボコボコにしていた。

「哀れボブ・・・」

ゴブリンの集団がかなり近づいて来たところで流石にボブも気が付いたらしい。

「な、なんだ?!」

迫ってくるゴブリンの集団を目にしたボブは

「ゴブリンか！そっちから来てくれるとは手間が省けたよ！」

やる気満々だった。

「やる気満々とかすごいな、集団の利をわかってないのか？例え一撃で倒せる奴らでも集団になると恐ろしい力を持つというのに・・・」

「

俺がなんで知っているかって？MMOやった時に敵に囲まれてHPがギョングюн減っていくのを体験してるからな！

ちなみに、昨日の夜にチンピラが襲い掛かって来た時に戦ったのは相手が人間だったからだ。

人間は感情のふり幅が大きいからまだ楽な方、あれが魔物だったら俺も逃げている・・・と思うよ？

っていうかあんなに自信満々って事はもしかして勝てるのかね。

さて、ボブの観戦に戻るか。

「ゴブリンよ！僕の糧となれっ！」

と格好つけて剣を振るうが・・・

あっさりと避けられてしまった。

その隙をついて木の棒を持っているゴブリンがボブに襲い掛かる。

「痛っ！」

痛みに負けてあっさりと剣を落としてしまっ。

「クッ！ゴブリンのくせにっ！」

まだ諦めていないのか素手で殴ろうとしている。

「逃げりゃいいのに・・・ゴブリン馬鹿にしすぎだろ」

その時、ボブの願いが通じたのか振るった拳がゴブリンに当たる。

殴られてフラっとするゴブリンを見たボブは

「ハハッ！やっぱり僕は強いんだ！ゴブリンに負けるはずないんだ
！」

と、そんな事を言っている間に背後から木の棒で頭を叩かれる。

「ぐあっ！」

と言いながらボブは気を失い、倒れていった。

「ああー兜も身につけていれば勝て・・・るわけないか」

倒れた所をボコボコにされ、ピクリともしなくなった所でゴブリン達は食事に入るようだ。

「おおっ、ボブだった物がどんどんゴブリンの腹に収まっていった」

とても・・・グロいです・・・

食事を終えたゴブリンたちはボブの装備品を身に付けて立ち去っていった。

んーどうするかなー熱血漫画みたいにボブの仇だあああって言いながらゴブリン倒してもいいけど・・・やっぱり放置かな。

俺に害が無い限りは全力で放置っ！

それに街道からも近いし、誰かがギルドに知らせるさあー

「よし、又ドック探しに行こうっ」と

そうして俺はその場を後にして森の中へと入っていくのであった。

第9話（後書き）

ちよつと短めです。

ちなみに作者はボブみたいな可哀想なキャラが大好きです。

第10話

「又ンドオオック、出ておいでー何もしないからー」

と呼びかけながら森の中で又ンドックを探す。

又ンドック出てこないよ・・・まあ、探し始めて5分も経ってないんですけどね！

ガサガサッ！

「おっ？又ンドックか？」

と思い見てみると出てきたのは・・・

「ウサギかよ！期待外れだよ！」

こちらをつぶらな瞳で見ている50cm程のウサギらしき生き物だった。ちなみに毛は茶色。

「にしても垂れ耳ウサギとはマニアックな・・・」

そう、一般的なウサギと違いこのウサギは耳が垂れていた。

「でかい垂れ耳ウサギって確かに可愛いけどさあ・・・今は又ンドック探してるんだよねえ・・・」

「ヌーン」

・・・えっ？ヌーン？

「もしかしてヌンドック？」

「ヌウン？」

おいおい！犬じゃねえのかよヌンドックって名前なんだからよおおお！

いやいや！待て俺！確かにヌーンと鳴いているがヌンヌンとは鳴いていない！

あとこいつが魔獣には見えない！違う！獣違いだ！そうに違うない！
っていうか普通の獣と魔獣の違いを聞いてくるんだったZEE！うっ
かりミスだっ！

俺がそんな事を考えていると、ヌンドック？はこっちに近づいてきて俺の匂いをスンスンと嗅ぎ始めた。

「大人しいっていうのは当てはまるな・・・どうするよこれ」

・・・とりあえず撫でておくか。

ナデナデ

「ヌーン」

気持ち良さそうに目を細めるヌンヌン。

ナデナデ

「ヌーン」

気持ち良さそうに・・・以下略

「・・・ハッ！こんな事してる場合じゃねえ!？」

「ヌウン!？」

「おっと驚かせてしまったな。スマンスマン」

と言いつつ再び撫でる俺。

「ヌーン」

癒されるな・・・この世界に来て初めての癒しだ。

まあまだ二日目なんだけどね!

にしてもなあ・・・受付はすぐ判断できるって言ってただけど判断できねえええ!

ドックだろ?ヌンドックなんだろ?これウサギじゃん!俺が悪いのか?俺の先入観が悪いのか?

これでこいつが犬とかいうオチだったら俺は絶対に許さんぞ!この世界を!

と又ンドック？をナデナデしながら軽い現実逃避をしていると

ガサガサッ！

「またかよっ！今度は何だ？」

と思い見てみると

見るからにガラの悪そうな男が二人出てきた。

「おい兄ちゃん！その魔獣を渡してもらおうか！」

またこういうフラグかよ！っていうか魔獣なのかよ！あと呼ぶなら魔獣じゃなくて正式名称で呼んでくれよ！

「その前に聞きたいんだが・・・」

喋りかけて来た髭男に逆に尋ねてみる。

「ああ！？何を聞きたいってんだ！」

「この魔獣の名称を教えてくださいませんか？」

「・・・ああ？兄ちゃん知らねえのか？」

「全く知らないね」

「そいつぁ又ビットって言う貴重な魔獣でなあ！その筋の愛好家は高く売れるんだよ！」

・・・やっぱり又ンドックじゃなかったああああ！俺の予感ギリギリ当たってたああああ！

っていうか名称しか聞いてないのに貴重とか高く売れるってわざわざ教えてくれるとか髭男ナイス。

「喋りすぎだ馬鹿！おい！お前！さっさと寄越せ！」

と思っていたらバンダナをつけた男に髭男が注意されていた。哀れ髭男。

「残念だが・・・そいつは無理な相談だな」

俺は二人に堂々と言ってやった。

「おいおい兄ちゃん！教えてやったのにそいつあねえよ！」

「断るなら痛い目にあってもらうしかないな！」

フツ、脅しなんかには俺は動じない何故なら・・・

「おいおい・・・お前ら・・・まだ気づいてないのか？」

「ああん！？何をだ！」

「もうとっくに又ビットはここにいないと言っ事！」

「「な、なんだとっ！？」」

依頼の魔獣じゃない時点で捕獲しておく意味がないからな。

まあ、俺が逃がしたんじゃないやなくバンダナ男が髭男に注意してる隙に勝手に逃げ出したんだけどね。

「おい！早く追いかけるぞ！今ならまだ追いつける！」

「ああ！」

そう言つて髭男とバンダナは去つていった。

・・・ウサギを追いかける男二人組とか第三者からすれば微笑ましい光景だよな。

「さて、俺は俺でヌンドックを探すかー」

・・・見つからぬ！見つからぬぞ！

既に1時間以上捜し歩いてるがヌンドックのヌの字も見つけられぬ！

つてかヌビット以降生物見かけねええええ！この森よくわかんねえええ！

どうすればいいんですかあああああ！

と絶望にくれていると・・・

「ウワアアアアア！」

という声が聞こえてきた。

「また救助フラグかあ！」

と叫びながら俺は声が聞こえてきた方へと向かう。

襲っているのが又ンドツクだったらしいなと思うが大人しい魔獣らしいから期待はせずに行ってみる。

え？関係なさそうなら行かなければいいじゃないかって？

・・・人が襲われてるんだぞ！あと、こんな面白そうな見世物を行かない訳ないだろ！

っとそろそろかな、速度を落として隠れ身の術っ！

隠れ身の術って言うてもただ単に物陰に隠れてるだけですけどね。

さてさて、どうなってるのかなぁっと覗いてみると・・・

一人の男が倒れていた。

あるえー？結構急いできたんだけどもう終わったのかね？

とりあえず男に声を掛けてみようか。

物陰から出て男に近づいて行こうと思ったのだが、起き上がりに襲われてると言うパターンもありそうなのでちよつと離れた距離から話しかける。

「おい、生きてるかー？」

声をかけると男の指が動き、顔をこちらに向けた。

何だ、死んでると思ったのに普通に生きてるみたいだな。つまらん。

「一体何があつたんだー」

「・・・うつ・・・た、たすけ・・・て・・・足が動かないんだ」

「お断りします」

とりあえず一回は断っておかないとね。

「そ、そんな・・・」

うはは、絶望してるぞ。

「まず何があつたか説明をしろ、助ける助けはないはそれから決める」

怪我してたら問答無用で助ける善人主人公とは違つのだよ！

「ま、魔獣に襲われたんだ」

「まあ、それは見ればわかるよ。何ていう魔獣に襲われたんだ？」

「又ンドックだ・・・」

「ここで来た！又ンドック来た！又ンドック来たぞおおおお！」

「つと冷静に冷静に・・・」

「大人しい魔獣だろ？何で襲われたんだ」

「受付からはそう聞いているぞ！」

「・・・」

「おろろ？急にだんまり決め込んだじゃいましたよ？」

「どうした？急に喋らなくなったな」

「うっ！足が痛くて・・・先に治療をしてくれないか・・・」

「今喋れてるだろ？ほら、さっさと襲われた理由を言えよ」

「又ンドックの・・・子供を捕獲したんだよ・・・」

「ふーん、それで親に襲われたのか。もしかして又ンドック捕獲の依頼か？」

「ああ！そうさ！依頼を受けて探しに来たら都合良く子供だけ居たから捕獲して」

街に帰ろうとしたところを襲われたんだ！理由は話したる！速く治療をつ！ウグツ！」

叫ぶ元気があるなら大丈夫だろとか思わなくもない。

「待て待て、落ち着けよ。その親は子を取り戻したんだろ？どつちに行ったんだ？」

「あつちだよ！もういいだろ！動けないのはつらいんだよ！早く治療してくれよ……」

「だが断るっ！」

「なっ！何でだよ！全部話しただろ！？」

「いやあ、悪い悪い。言ってなかったけど俺も同じ依頼受けててさあ。又ンドックが必要なんだよねえ」

「なっ！？」

「だから放置させて貰うわ、治療は他の人に頼めばいいよ。それじゃ」

そう言っつて男を放置して立ち去る俺。

「ま、まっつてくれ！こんなところ誰も通るわけがっ！」

何か聞こえる気がするがスルー。

いやあ、又ンドックの情報が手に入ってよかったよかった。

情報通りの方向へ俺は急いで走る。

又ドックつて名前に犬っぽいから素早いと思うんだ。

だから結構な速度を出して走ってるんだけど・・・

履いてるサンダルがパカパカになってきた。

やっぱり靴買わないと駄目だな。でも靴下売ってるの見た事ないしなあ。

ムムム、悩む・・・とそんな事を考えていると何やら物音が聞こえてきたので

微妙に方向転換して物音がした方へ向かう。

するとそこにいたのは・・・

1 m程の白い犬と20 cm程の白い子犬がいた。

「これは当たり前かなつと！」

「グヌルルルッ！」

・・・うん、当たりっばい。

威嚇にも又が入ってるし、

「さて、どうすつかねー」

威嚇されながら捕獲方法を考える。

んー親を殺して子供だけ連れて行くか？

それとも親だけを捕獲して連れて行くか？

親子仲良く捕獲して連れて行くっていうのもアリだよな。

依頼で数の指定はなかったから何頭連れて行っても大丈夫だろうとは思っただけだね。

にしても1mサイズで小型ねえ・・・大型だとどれくらいのサイズになることやら。

っといつまでも考えてる訳にはいかないな、逃げられても困るし。

さっさと捕獲して帰ってご飯にしよう。

「グ又アッ！」

「うおっ！」

危ない危ない

行こうと思っただら襲い掛かってきやがったZ E !

まあ、即座に回避行動を取ったから怪我は無いからいいんだけど・

ちょっとイラッとしたよ！だから殴り飛ばすよ！

「グヌルルッ！」

「・・・」

睨み合う俺とヌンドック・・・いつ動きがあってもおかしくない。

「ヌンヌッ！ヌンヌッ！」

子ヌンドックが俺に向かって吼えたその瞬間、止まった時が動き出すっ！

「グヌアッ！」

「舐めるなよ駄犬があっ！」

襲い掛かって来たその瞬間、俺は握った拳を親ヌンドックの顔に向かって振りぬく！

もちろん手加減は忘れずにね！

バキィッ！

「キャ又ンッ！」

「又ンッ！」

見事に顔面にヒットし倒れた親又ンドックに心配そつな子又ンドックが駆け寄る。

終わったと思ったが手加減しすぎたのか、フラフラと起き上がり逃げようとする又ンドック親子。

「逃がすかよっ！」

急いで地に手をつける。

「>アースカルティベート<！」

又ンドック親子の足元をふわっふわに耕す。

「追加で>アースライズ<！」

>アースライズ<は唱えなくても大丈夫だと思うが今回は実験も兼ねている。

直線効果だった>アースライズ<はイメージの仕方を変えられるかどうか・・・だ！

今回のイメージは円形、又ンドック親子を囲い込むのだ。盛り土くらいなら逃げられるだろって？

いいんだよ、ちょっとした実験と時間稼ぎだからあ！

「よっしゃ成功っ！」

円状の盛り土が又ンドック親子を取り囲んだ。

フハハハ！最高だよ『地』属性！

さてさて、追いつめましたよっつと。

「又ウン・・・又ウン・・・」

不安になったのか子又ンドックが親又ンドックに向かって鳴いている。

「グヌルルル・・・」

親又ンドックは俺に向かって威嚇をしているが、迫力があまりないのは弱ってるせいかな。

まあ弱らせたのは俺なんですがね！

さてさて、縄で口を縛るとしますかね。

「動くよ殺すぞ？」

と威圧を込めながら近づいていく。

まあ、又ンドックも俺の力がわかっているのだろう。近づいていくとすぐに大人しくなった。

良かった、知能はある程度あるようだ。これがゴブリンとかだと確実に死ぬまで暴れるもんなあ。

というか本来もつと簡単な依頼だったっぽいのに、あの倒れてた馬鹿が子供に手を出したからこんな事になったんだよな。

さて、とりあえず口を縛ってと。

親又ンドックは大人しく縛られたが子又ンドックはイヤイヤと首を振っている。

まあ、子又ンドックの方はいいか。

というかどうやって連れて行けばいいんだ？1m程の又ンドックを担いでいくのは荷物も持っているから無理。

首に縄をつけて連れて行くか？でも引きずっちゃうと傷がついちゃいそうだしなあ・・・

子又ンドックだけ連れて行くのも何だかなあって感じだし。

仕方がない、首に縄をつけてみるか。

「いいか？引つ張る方向についてこいよ？」

駄目もと言ってみる

「・・・又ン」

・・・返事しちゃったぞ。口を縛ってるのに器用な奴め。

まあ楽になったからいいや。

ちなみに子ヌンドックは肩に乗せて歩いている。

人質ならぬ犬質である。

そして俺は森の出口を目指して歩き出した。

森をひたすら歩いて出口を目指す

その途中で俺は面白い事を思いついた。

- 1 ・ヌンドックを引き渡す。
- 2 ・依頼達成書を貰う。
- 3 ・ヌンドックに逃げてもらう。
- 4 ・ヌンドック捕獲依頼を受ける。
- 5 ・1に戻り以下ループ。

どうだろうこの作戦！

そもそも又ンドックが完全に人語を理解してくれてないと駄目なんだけどさ！

よし、とりあえず警戒しながら着いてきている又ンドックに説明しよう。

「いいか、又ンドック。今から説明する事をよく聞け、上手くいけばお前達親子も無事に元の生活に戻れる」

「・・・又ン？」

訝しげな顔つきになりながらも話を聞いてくれるようだ。ってか知能高すぎね？逆に怖くなってきたよ。

（事情説明中）

「・・・又ン」

仕方ないな、みたいな顔つきだがどうやら納得してくれたらしい。

っていうか理解できたんだ、すげえよ又ンドック。

成功すればギルド職員が涙目になるだろう。

楽しみだZE！

「おっと、そうと決まれば仲間も同然だ。口の縄は解かせてもらおう。」

逃げやすいように首の縄もすぐにはずれるようにしておくからな。子供はどうする？早く走れるのか？」

「又ん！」

子又ンドックが元気に返事をするが頼りないなあ・・・親又ンドックの背中に乗せておくか。

「これで大丈夫だろ」

「・・・又ん？」

不思議そうな顔をしているが当然だろ。

ここまで知能高くて裏切るリスクがわからないわけがない。

まあ、逃げ出した時は躊躇無く殺すんですけどね。

そして森の出口に到着。

ふう、ようやく外に出れたか。

さっさと街に帰ろうと思いい街に向かって歩き出そうとしたらボブが死んだ場所で何かが光った。

「んん？何だ？」

とボブの死骸に近づいてみると、ギルドカードが太陽の光を反射して光っていた。

「ギルドカードか、そっぴや死んだ人のカードはギルドに届けた方がいいのかね？」

ああーでも何か疑われても嫌だから放置でいいか。

さ、街に帰ろうつと。

そしてしばらく歩いて西門に到着。

特にイベントも無く普通につきましたよ。

門にいる衛兵に声をかける。

「捕獲依頼を受けてヌンドックを捕獲してきたんだが、ギルド職員を呼んでくれないか？」

そう衛兵に声をかける。

「捕獲依頼か、ちょっと待ってる」

衛兵がギルド職員を呼びに門の中に入る。

今のうちに最終確認だ。

「いいか？合図をしたら逃げるよ？」

「又ンツ」

よしよし、大丈夫そうだな。

おっと戻ってきたようだ。

門の中から衛兵と男が出てきた。

あれがギルド職員か？見た目はかなり若いな、逃げられて怒られる
が良いさ！フハハハ！

「捕獲依頼と聞きましたが・・・おお！又ンドックですか！」

ふむ、やっぱりこいつが又ンドックであってたか、良かった良かった。

「傷は少ないはずだ」

「発殴り飛ばしただけだしね。」

「そうですね、目立つ傷はありませんね」

「そういえば又ンドックを捕獲してどうするつもりなんだ？」

これは聞いておかないとね。

「確か領主様の息子が又ンドックをペットとして欲しがっていたので、ペットじゃないですかね？」

・・・マジか？魔獣をペットつてすごいな、何考えてるんだ。

「魔獣をか？」

「魔獣と言つてはいますが、知能が高い獣は全部魔獣と呼んでいるので、その魔獣の中でもヌンドックの危険性は低く人懐っこいですから一部の貴族には人気あるんですよ」

ああ、知能が高い獣を魔獣つて言うんだ。道理で俺の言う事を理解できるわけだよ。

つてか危険性はないつて怒らせたらやばい事わかってんのかな？冒険者一人が立てなくなつてるんだZE！

「そついえば今回の依頼に数の指定はなかったから親子で連れてきたんだがどうなるんだ？」

「親子は珍しいですからねえ、二頭分の報酬に加えて更に増額が期待できるんじゃないかと」

おお！そつかそつか！

「じゃあ依頼達成書ももらえるか？」

「はい、こちらが依頼達成書になります。状態が良いのでその分も増額されると思いますよ」

依頼達成書を受け取る。

「そうか、期待しておこう。そういえば縄ははずして大丈夫か？買ったばかりだからもったいなくてな」

「はい、様子を見る限り大人しくしていますから大丈夫でしょう。それに、すぐにこちらの縄で縛りなおしますので」

「わかった。ほら、ヌンドックだ。逃がさないように注意しろよ」
きちんと忠告してヌンドックを繋いでいた縄をはずして渡す、フフフ・・・優しいな俺って。

「ハハ、大丈夫ですよ。今までも何度か扱った事ありますから」

そう言っただけでヌンドックがヌンドックを新たな縄で捕縛しようとした瞬間！俺は目で合図を出す！

「ヌンッ！」

と言っただけでヌンドックは逃げていった。

よし！完璧！タイミングバッチリだったぞ！

「・・・」

「・・・」

受け取ったギルド職員と見守っていた衛兵が固まっている。

「おいおい、忠告してやったのに逃がすなよ。結構苦労したんだぞ」

「？」

と追い詰めてみる。

「ハッ！ど、どうしましょう！？」

「俺は知らんぞ、依頼は達成したからな。そっちの責任だろ？」

そう言っつて衛兵にギルドカードを見せる。

「衛兵さん！追いかけてください！」

「無茶を言っつな！仕事があるんだ！」

衛兵とギルド職員の声を聞きつつ街の中に入る。

いや〜成功してよかったよかった。

さて、達成報告に行こつと。

第10話（後書き）

日間ランキング2位って・・・どうしてこうなった・・・
作者の知らない間に一体何が・・・
ボブか？ボブのせいなのか？

感想ありがとうございます！

返信は出来ませんがきちんと読ませてもらってます！

まあ、また更新が止まったりするかもしれませんが完結はさせます
ので
よろしく願います。

第11話

俺がギルドに向けて歩いていっていると、朝のガキがまたぶつかって来たので捕獲した。

この俺に向かって一日に二度もぶつかってくるとは良い度胸だ！その喧嘩・・・買ってやる！

「はなせっ！はなせよっ！」

「人にぶつかって謝りもしないガキを許すつもりは無い」

と説教していると朝にガキを追いかけたおっさんが走ってきた。

あれ？もしかして今まで追いかけてたの？マジで？もうお昼くらいだぞ？

「ゼエ・・・ゼエ・・・ガキを・・・捕まえてくれたのか・・・」

「今まで追いかけてたのか？」

そう言うとおっさんは息を整えて喋りだした。

「ああ、俺の全財産だからな・・・にしても助かった。そろそろ倒れそうだったんだ」

そりゃそうだろうな。

「大変だったな、ほらガキだ」

と言って未だに暴れているガキを渡してやる。

俺がボコボコにしても良いが、朝から追っかけていたおっさんの分を奪う気になれない。

「ああ、すまん。このクソガキ！よくも俺の財布を！」

そう言いながらガキの腹や顔を殴ってるおっさん。

俺はそれをニヤニヤしながら見守る。

そうしてしばらく堪能した後、満足した俺はギルドへ出発。

ギルドに到着し、受付へ。

「依頼を達成した」

そう言って依頼達成書とギルドカードを受付嬢に渡す。

「はい、お預かりします」

「基本報酬が3500ギルですね。更に二頭捕獲で1000ギルと貴重な子供と言う事で500ギル、合計1500ギルが追加されて5000ギルの報酬になりますね」

ふむ、報酬3500ギルに対して1500ギルの増額か。うまいな
！。

まあ、捕獲したと言ってるけど職員が逃がしちゃったんだけどね！

「では、こちらが報酬の5000ギル、大銀貨5枚とギルドカード
になります」

5000ギルとギルドカードを受けとる。依頼達成数が2/2にな
った。

うむ、失敗が無いって言うのは良い事だな。まあ、ランクだから
だろうけど。

「ありがとう、あと、聞きたい事があるんだが」

「何でしょうか？」

「帰ってくるときに冒険者らしき死体があつたんだが、死体を持っ
ているギルドカードは冒険者ギルドに持ってきたほうがいいのか？」

「・・・そうですね。発見したら持つてきていただけるとギルドと
しても助かります」

「こんな事を聞くのは不謹慎だと思うが・・・持つてくると報酬は
出るのか？」

「基本的にギルドからは報酬は出ませんね。出してしまうと盗んだ
り奪い取る人が出てきてしまいますから」

ああ、やっぱりそうなるのか。

「まあ、そうだよな。ああ、それと他にも聞きたいことがあってな」

「はい、なんでしょう?」

「又ンドックを探していたら又ビットという魔獣を見かけたんだが」

「ッ！又又、又ビットを見たんですか!?!」

いきなり大声で叫ぶ受付嬢。

「又ビットだと!?!」

「それは本当か!」

「いいな!」

受付嬢の声を聞いた周囲の冒険者も騒ぎ出した。

「おいおい、そんなにすごい魔獣なのか?」

「知らないんですか!?!」

知ってたら聞かねえよ!

「知ってたら聞かないと思うんがな?後、声の大きさを下げろ」

ちょっとイラッとしたので怒気を込めて言ってみた。

「っ！す、すみませんっ！」

よしよし、謝るなら許す。

「で？又ビットって何だ？」

「又ビットと言うのはですね。非常に希少な魔獣で、人の前には姿を現さないんですよ」

・・・又ンドオオックって叫べば出てくるのか？

まあ偶然だろうけどさ。あと希少なのは髭男に聞きました。

「一応確認するが、茶色くて耳が垂れててヌーンって鳴く魔獣で間違いないよな？」

「それですっ！それが又ビットです！」

また大声で叫んでるし・・・

「声が大きいって、さっき言ったよな？・・・それに又ビットを見つけたからってどうなるんだ？」

髭男とバンダナは高く売れるって言ったが希少以外の理由あるのかね。

「す、すみませんっ！・・・又ビットは幸運の象徴と呼ばれてまして見つけると幸運が訪れるらしいんです」

幸運ねえ・・・いわゆる迷信の類だろ？

「それだけでこんなに騒がれるのか？」

「そ、それだけって！すつごくありがたいんですよ！？」

でもなあ。見つけただけで幸運って事は売り飛ばそうとしてた奴らも幸運になるわけで・・・

「捕まえて売り飛ばそうとしてる奴らにも遭遇したんだが、そういう奴らも幸運になるのか？」

「ああ、まだいたんですね。そういう人が・・・」

えっ？何その反応。何か憐れみを向けるような顔なんだけど。

「ん？希少な魔獣で更に幸運が訪れるんだろ？そういう奴が出てくるのは普通だと思うが」

「それが・・・又ビットに害を加えようとした人達は必ず悲惨な最期をむかえるんですよ」

えっ、何それ。又ビット怖い。

俺は問題ない・・・よな？

良かった・・・撫でといて・・・蹴飛ばしたりしたら俺死んでたな。

「ですから又ビットは強さとしては最低限なのですが魔獣のランク

としてはSランクになってますね」

・・・はあっ!？

「・・・Sランク？」

「はい、Sランクです。決して手を出さないようにという忠告の意味合いを含んでいますので」

なるほどなー、確かにSランクの魔獣って聞いてればどれだけ姿が可愛くても手は出さなくなるよな。

ってか、それでも手を出そうとするこの世界の愛好家がすごい。

「ですから絶対に攻撃を加えようとしたり捕まえようとしなくてくださいね」

「わかった、気をつけよう」

そう言っつてギルドから出ようとしたのだが・・・

騎士っぽい格好をした女が道を塞いでいた。

「どいてくれないか？」

邪魔なんだよ!

「又ビットを見たと言っつのは本当なのか？」

「嘘だ」

面倒な事になりそうなので即座に否定する。これも全部大声で叫んだ受付嬢のせいだ・・・恨むぞ。

「ひうつ！急に寒気が・・・」

受付嬢が何か言っているが気にしてはいけない。

「だが・・・」

「急いでるんだ、邪魔をしないでくれ」

有無を言わず押し通るっ！

「す、すまない」

ようやく道を開ける女騎士。

さて、邪魔者もいなくなった事だし昼飯を食べに行こうと。

主人公の所持金 7万5570ギル 8万570ギル

屋台で適当に飯を買い、食いながら歩く。

買ったのは串に肉が刺さっているシンプルな食べ物だ。

一串150ギルだったから三串ほど購入。

うむ、塩と胡椒のシンプルな味付けながらも味わい深い一品。美味いな。

何の肉かは気にしてはいけないのである。どうせ名前聞いてもわからないしね。

流石に三串同時には食べられないので二串は包んでもらって食材用の袋に入れておいた。

これで依頼中にも飯が食える。

さて、次の依頼を受けに行く前に靴を見に行くか。

パカパカサンダルで戦闘をこなすのは怖い。俺は臆病なのである。

靴下がなくても大丈夫そうなのを探そう。いつそまたサンダルでもいいかもしれない。

この前は雑貨屋でハズレだったから今度は防具も売ってるドワーフのおっさんの所で聞いてみようか。

店に到着して中に入ると相変わらず客はいなかった。

この状態でよく店を営めるな。

ドワーフのおっさんは俺の顔を一瞥すると、

「・・・お前か、今度は何の用だ」

と話しかけてきた。

「足の防具を探してるんだ。出来れば靴と一体型のタイプで履き心地と通気性が良い物を頼む」

この世界で水虫になるかはわからないけど用心に越した事はない。

水虫のせいで戦闘に集中できなくて死ぬなんて絶対に嫌だからな！

まあ、魔法があるのなら治せそんな気もするけどね。

「また妙な注文しやがって・・・ちょっと待ってる」

そう言って探してくれるドワーフのおっさん。

やっぱり妙な注文なのか・・・他の冒険者ってやっぱり防御力優先なのかね？

履き心地や通気性って大事だと思うんだけどなあ。

「お前が出した条件に当てはまるのはこれくらいだな。」

あつたのかよっ！すげえ！すげえよ！

取り出された防具を試してみる。

ふむ、ブーツサンダル形の防具か。素材は何かの皮で出来ているみたいだ。

良いんじゃないのぉー！というかブーツサンダルがある事にびっくりです。

あつ、ブーツサンダルを超簡単に説明するとブーツの靴の部分がサンダルっぽく開いてるんだ。

ふくらはぎの部分はそのまま覆ってある物が多いよ！

でも・・・

「防御力は期待できなさそうだな？」

ドワーフのおっさんに気になった点を言ってみる。

まあ、今履いてるサンダルスリッパに比べたらかなり強化されるんだけどね。

だが防具に妥協するなといったドワーフのおっさんがこんな中途半端な物を出すだろうか？いや出さないはずだっ！

「お前もそう思うか？そこでこれが役に立つ」

更に取り出してきたのは金属製の・・・覆い？

「これを取り付けるんだ」

そう言って金属製の覆いをブーツサンダルに取り付ける。

「これで防御力の問題は無くなる」

なん・・・だどっ!?

「着脱可能か・・・便利だな」

「ああ、つけはずしもすぐにできるようになってる」

「激しい動きで、はずれたりする心配はないんだよな？」

これは聞いておかないとまずいよね。蹴りを出して覆いが飛んでいたら笑えない。

「当たり前だ。誰が作ったと思ってる」

「ですよー！」

「よし、買った。いくらだ？」

「着脱にかなり力を入れたからな、ちょっと高いぞ」

「金なら多少持っているから心配ない」

足りなかったら盗賊ギルドから奪って来てでも買っぞ。

「そうだな・・・2万ギルだ。出せるか？」

「ほら、2万ギルだ」

そう言つて即座に金貨2枚を取り出して支払う。

「本当に買うとはな・・・」

「ん？買ったちゃ不味いのか？」

「いや、構わないんだが・・・今までその防具を見た客の反応が反応だったからな」

んん？他の冒険者はこの防具の良さがわからなかったのか？

覆いの素材を変えればお手軽に防御力アップもできるだろうし、その上で履き心地も通気性も変わらず。

まあ、重さは変わるだろうがね。

後々の事を考えるとお値段安上がりじゃないですか。

フルで覆ってるタイプはやっぱり蒸れそうだな。

「俺が良いと思つたんだから良いんだよ」

「そうか・・・それなら金は1万ギルで良い」

「・・・いきなりだな」

「買った後で使われなかつたら防具が死んでしまつからな。本当に使つ気があるのか試したんだ」

ふむ、試されてたのか。

「それじゃ合格で良いんだな？」

「ああ、また何かあればいつでも来い。お前なら歓迎しよう」

よっしゃ！馴染みの店ゲットオオオオオ！

その後、ブーツサンダルを俺に合わせて微調整をして貰い店を出る。

いやあサンダルスリッパからブーツサンダルにレベルアップですよ。

履き心地良し！通気性も良し！金属を装着しても問題無し！

良い・・・良いぞおおおお！パカパカにならないぞおお！

最初からあの店で聞いとけばよかったっ！

さて、新たなサンダルも買ったし新たな依頼を受けにギルドに行くかあ！

ちなみに愛用していたサンダルスリッパは一応取ってある。

パカパカになったとしても・・・好きなんだ・・・サンダルスリッパ。

まあ、荷物が入りきらなくなったら泣く泣く処分するかもしれない。

主人公の所持金 8万570ギル 7万120ギル

ギルドに入り依頼を探す。

そろそろ魔獣か魔物退治でも受けてみるかなー

この世界に来て殺したのが人間だけってどうよ。初日に討伐依頼を受けようとしたけど馬鹿に邪魔されたしな。

でもこういう依頼って、漫画やラノベだと必ずと言っていいほど予想外の強敵が出てきたりするんだよな。

まあ倒すのが無理そうだったら全力で逃げるけどな！

その前に都合良く近場で討伐依頼があるかどうかだが・・・

普通に見つけてしまった、見つけたら行かないといけないじゃないか！

依頼：ビッグラットの退治

うちの畑に出たビッグラットを懲らしめてくれ！

畑が荒らされて困ってるんだ！

報酬：1500ギル

ううむ、報酬は少ないが討伐系で夜までに帰ってこれるのがこれくらいしかないな。

まあ、いいか。これ受けようっと。

受付で畑の場所を聞くと街を出て南に行くと川がありそこに農耕地があるらしい。

ほほー、南はまだ行った事ないな。

しかも農耕地になってるとか『地』属性大活躍じゃね！

まあ、今は活躍して無いのはわかりきってるんだが・・・悲しい事だ。

さて、行くか。

初めて西門以外から出たのだが、南門も何の代わり映えもせず西門と同じ普通の門だった。

つまらん！何てつまらんのだ！

それに面倒事の気配もしてるし・・・

何がつて？

ギルドで又ビットの事を聞いてきた女騎士がいただろ？そいつが後からついてきてるんだ・・・

試しに振り返ってみたら、顔をそむけながらもこつちをチラチラ見てるし、不器用な奴だ。

どうすつかなー、これから先もついてこられると面倒だし・・・声をかけてみるか。

「・・・何の用だ？」

相手は声をかけられるとは思ってなかったようだ

「わ、私に話しかけているのか？」

「見渡す限り、他に誰もいないと思うが？」

まさか霊的な物が見えるのか？

ってかこの世界だと普通に魔物としていそつだが。

「又、ヌビットの話を聞きたいんだ。さっきは急いでいると言っていたから邪魔をしないようにしていたのだが……」

「俺は見えていないと言った筈だが？」

「だ、だが！受付嬢に……」

はあ……ある程度聞かれてたつぽいな。こつこつ奴って話を聞くまで、ずつとついてくるんだよな。

ストーカー女とか刺されそつで嫌です。

「仕方ない、依頼場所にたどり着くまでなら話をしてやる」

「ほ、本当か！恩に着るぞ！」

「恩に着るくらいなら情報料を払え」

「うつ……わかつた。出来る限りの額を払おう」

おお！言ってみるもんだな！マネーは大切だからな！

「で、ヌビットの何が聞きたいんだ？」

「まずは、どこで見かけたのか教えてくれないだろうか？」

「西門を出てしばらく行つた先にある森だ。ヌンドックを探しに行つたら出てきたんだよ」

「西の森？そんな近場にいたのか・・・」

「聞きたいことはそれだけか？」

「あ、あと・・・その・・・どうだった？」

「・・・なにがだ？」

「み、見た目だ！可愛かったか！？」

「まあ、可愛かったし、触り心地も抜群だったが・・・」

「っ！？又ビットに触ったのか！？」

「ああ、又ビットの方から近寄ってきたからな。撫で回してやった

「よ

ふっわふわのもっこもこだったよ。」

「なんてことだ！私がいくら探しても全然見つからないと言つのに
！！」

「んん？魔獣つて生息地はある程度決まってるんじゃないのか？」

魔獣とはいえど縄張りの的な物があるだろうし。」

「いや、他の魔獣と違って又ビットは何処にでも現れるんだ。周りに何も無い砂漠でも見かけたという情報があるくらいだ」

ほほー、何処にでも現れるのか。でも流石に砂漠は暑さにやられて幻を見たんだろと思っちゃうよ。

「何でそこまで又ビットに会いたがる？」

幸運の象徴って言うても所詮迷信だろうに。手を出した時の不幸は本物っばいが。

「……からだ」

「すまん、聞こえなかったからもう一度頼む」

「可愛いからだー!!」

顔を真っ赤にして女騎士が叫ぶ。

「……それだけの理由か？」

「わ、悪いか……？」

いやあ、悪いって言われてもなあ……

「別に悪くは無いが……会った事無いのに可愛いと言えるのか？」

「私の両親が又ビットがきっかけで出会ってそのまま結婚したらしくてな、子供の頃からずっとその可愛さを聞かされていたのだ……大きくなったら絶対に会いに行つてやると誓ったのだが、両親が遭遇したという場所も探し回つても見つからず、各地を転々として情報を集めていたのだ！」

すげえ執念だなおい・・・

といつか恋のキューピッドまでやってるのかよ又ビット・・・幅広いな。

「ふうん、苦労してるんだな。それよりそろそろ依頼場所に到着しそうなんだが話は終わりでいいか？」

「ああ、ありがとう。情報料だ」

と言って金貨1枚を渡してくる女騎士。

金貨1枚ってマジかよ・・・ブーツサンダル代が浮いたじゃん。

「行って会えるかどうかもわからないのに、金貨1枚も出すのか？」

俺にとっては嬉しいが、会えなかった時に文句を言われても困るぞ。

「当日に出会ったという情報が初めてだからな、当然それくらいは出す。簡単に会えないのも今までの旅でわかっているさ」

「嘘だとは考えないんだな」

「嘘なら嘘で、騙された私が未熟だったと言う事だ」

ふむ、その考え方は嫌いじゃないぞ。まあ俺を騙そうなんて奴がいたら、相応の報いを受けてもらうがな。

「ま、頑張ればいい」

「ああ！早速今から行ってくる！それじゃあな！」

元気な奴だ・・・

あーそういえば、

「ちょっと待て」

ある事を思い出して女騎士を呼び止める。

「ん？何だ？情報料が足りなかったか？」

女騎士はまたお金を出そうとしている。どれだけ又ビットに会いたいんだよ。

「いや、情報料は十分だが又ビットを追いかけられるなら髭の男とバンダナを巻いた男の二人組に気をつけるよ」

「その二人組がどうかしたのか？」

「いや、俺が又ビットに会った時に追い掛け回していたからな。捕まえて愛好家に売り払おうとしているらしい。

俺は何ともなかったが邪魔をしようとするなら襲い掛かってくるぞ」

「ああ、冒険者ギルドで言っていた奴らか・・・」

あつ、そこまで聞いているのね。

「そうだ。まあ、もう死んでいるかもしれないがな」

又ビットに思いつきり害を加えようとしたもんなあ。
死んでいるならどんな悲惨な最後を迎えたか知りたいところだ。

「わかった、髭とバンダナだな！会ったら気をつける。ありがとう
っ！」

そう言つて笑顔で走り去つていった。

あつ、転んだ。

「・・・さて、依頼人に会いに行くか」

俺は何も見なかった事にして依頼人に会いに行く。

主人公の所持金 7万120ギル 8万120ギル

たどり着いた農耕地は周辺全てを木の柵で覆われていた、広さもかなりあるようだ。

畑で働いてる人に、ビッグラットに困っている畑がどこか聞いて向かう。

「依頼主の名前を聞いておけばよかった」

と今更ながら後悔しつつ、それらしき畑を見つけたので畑にいる人に声をかけてみる。

「ここがビッググラットに困っている畑か？」

「おお、そうだけどうちの畑に何か用か？」

「冒険者ギルドから依頼を受けてきたんだが」

「おお！そうかそうか！依頼を受けて来てくれたか！いやー依頼を出したのは良いが、誰も来ないから心配してたんだ！」

ふむ、やっぱり報酬が1500ギルじゃ少ないのかね。

「それで依頼内容を詳しく聞かせて欲しいんだが」

「ああ、ビッググラットはどんなのか知ってるかい？」

「いや、すまないが知らない」

「そうか、ビッググラットって言うのはその名の通りでかいネズミだな、自分が気に入った畑にだけ現れるんだ。

今回は運悪く、うちの畑を気に入ってな・・・巣穴をぼこぼこ作ってるんだ」

「ビッググラットは1体だけなのか？」

ネズミって言うなら繁殖してすごい数になってそうだが・・・

「ああ、今のところ確認してるのは1体だけだ。だがもうすぐ繁殖期に入るみたいでな、今のうちに退治しておかないとやばいんだ」

ああ、繁殖期じゃないと増えないネズミなのね。

「1体くらいなら退治できると思って他の畑の奴らにも手伝わってもらったんだが・・・すばしっこくて追いつけねんだ」

ふむふむ、素早さもあると。

「わかった、早速取り掛かるう」

「オラも手伝いたいんだが、他の畑に逃げ出さないように見回らなといけないんだ」

「ああ、別に構わない。討伐したら呼びに行くよ」

「それじゃあ任せたよ！」

そう言っただけで見回りに行った依頼人・・・

大変そうだな、生活も掛かってるだろうし。

「さて、まずは適当に見回るか。結構広そうだしな」

適当に歩いていると巣穴らしき穴がかなり作られていた。

この巣穴・・・地下で繋がってるならかなり面倒な事になりそうだな。

と思いつつ歩いていると遠くに動く物体を発見。

「秘儀っ！ズームアイツ！」

説明しよう！秘儀っ！ズームアイツ！とは主人公の強化された視力で遠くのものを見る事である！

ズーム機能？そんな物はもちろん無い！ただ注意して見る！それだけである！

「んん？あれか？ビッググラットって」

体長30cmくらいの巨大なネズミ、それが畑に生えている野菜を貪っていた。

「尻尾も含めると60cm近くあるぞ、あのネズミ……」

でけーなー。

と思いつつ見ていると……

まだかなりの距離があるのに何か気配を感じたのか、食べるのを止めて辺りをキョロキョロと見回している。

「あぁー……近づこうにも近づけないタイプか……」

遠くから投石でもして殺すか。

逃げ回るのを追いかけるのは面倒だし。

問題は・・・

「当てられるかどうかだな」

ちよつと距離が心配なんだよな。

それに当てたとしても死ななかつた場合は巣穴に逃げるだろうから
一撃で絶命させなければならぬ。

一応、腹案があるにはあるが実験的な意味合いが強いんだよなあ・・・

成功するかどうかもわからないから超不安。

まあ投石が成功すれば何の問題もない・・・よな？

さてと・・・まずは投石用の石を出すか。

「>ストーンイジェクト<！」

その一言で俺がイメージした投げやすいお手ごろな石が目の前に出てきた。

もちろん数は1つだけ！俺はこの一石に全てを・・・賭ける！

「・・・ふう、それじゃいくか」

ビッグラットは辺りを見回した後に気のせいだと思ったようで、また野菜を貪っている。

「最後の晚餐だ！味わって食べよネズミ野郎！」

そう言いつつ俺は狙いを定めて石を投げた。

ヒュンッ！

投げた石はビッグラットの頭に向かって真っ直ぐ飛んでいく。

「やったか！？」

発言してから俺は重大なミスに気づいた。

この発言は生存フラグを立てるものだった！

「や、やばいつ！今の発言無しっ！取り消しっ！」

しかし、一度言った発言は取り消すことは出来ない。

石がビッグラットに当たるその瞬間。

「クチュン！」

野菜の葉っぱがビッグラットの鼻をくすぐってくしゃみを出させた。

そのせいで俺が投げた石はビッグラットの頭上を通りすぎて近くの地面へ命中、衝撃で石は木っ端微塵になった。若干クレーターも出

来ているのはご愛嬌だ。

くしゃみ避けとかあああああああ！！ちくしょおおおおおおお
おお！

「ヂュ！？」

ビッグラットに石は見えなかったようだが通りすぎた時の風圧は感じたらしくビッグラットは近くの巣穴へと駆け込んでいった。

「避けたにしても石が通りすぎる時の風圧に巻き込まれて死んでおけよおおおおお！」

はあ・・・これで実験的な意味合いも強い、腹案を採用する事になつてしまった。

「まあ、いいか。過ぎた事をいくら気にしても仕方ない」

よし！やるか！

さて、まずはイメージ・・・

「さっきのいけ好かないネズミの姿を頭に思い描く・・・イメージが大事だ・・・」

くしゃみで避けた姿とか慌てて逃げ出した姿を思い出しイラツとした！

「・・・落ち着くんだ！俺！」

今は依頼を遂行する事が大事だ。

よし！イメージは出来た！後は・・・

詠唱の呪文を弄って・・・>ストーンイジェクトくならぬ・・・>
ビッグラットイジェクトくを唱えれば！

単純な改変だが地中にある石を取り出せるなら地中にいる生物も多
分いけるはずっ！

そう、これが腹案の作戦。

作戦名：出てこないなら取り出してしまえば良いじゃない！！

魔法の詠唱改変はこれが初。しかもぶっつけ本番。何このスリル・・・
・ヒヤッハアアアア！

やばい変なテンションになってきた。

「いくぜえっ！>ビッグラットイジェクトくオオオオオッ！」

変なテンションのまま唱えた俺の詠唱とともに地面が淡く光りだす。
・

淡い光が消えた後にそこに現れたのは！

バラバラになったビッグラットのグロ死体でした。

・・・これは成功と言っていいのか判断に困るな。

おかしいなあ。何処で間違えたんだろう。

本来の予定では生きたまま何が起こったのかわからずポカーンとしているビッグラットを捕まえてネチネチ虐める予定だったのだが・

どうしてこうなった？

と、そこで俺の脳にある閃きが！

「ああ！そうか！虐めた後の事も考えてたからだ！きっとそうに違いない！」

頭の中でビッグラットのイメージを思い浮かべた時にちょっとイラツとしちゃったから捕まえて虐めた後にバラバラにしてやろうとか考えてたんだった。

そのバラバラ状態のイメージで詠唱しちゃったからいけなかったんだな。

あと変なテンションだったのも影響してそうだ。

なあんだ。そうだったのか！H A H A H A！やっちまったZ E！

「さて、依頼人に討伐した事を報告しに行くか」

どんな状態だろうが依頼を遂行した事に変わりはないので依頼人の所へ行つちやうよ！

「あんだ・・・一体何やったんだ？」

依頼人に討伐の証拠であるバラバラ死体を見せたらこんな反応をされました。

まあそうなるよね！仕方ないよね！

「すまないな、どうやら魔法の威力が強すぎたみたいだ」

と言つて誤魔化しておこう。

「あんだ魔導師さんだったのか！？杖も持ってないし、足の防具の感じからてつきり格闘家さんかと思つたよ！」

ああー・・・確かに俺は杖も持ってないし足の防具だけ見れば格闘家っぽいかもしれない。

「まあ、討伐してくれた事に変わりは無いわな！ほら依頼達成書だ！」

「確かに受け取った。また何かあったら冒険者ギルドに依頼をしてくれ」

俺が受けるかどうかは知らないがな！

「ああ！そうさせてもらうよ！いやあ、にしてもこんなに早く解決してくれるとは思わなかったよ！」

あれ？これってそんなに時間がかかる依頼なの？

「そうか？普通だと思うが」

「いやいや、普通はこんなに早く終わらない！ビッグラットは弱いけど素早いから依頼を受けてやって来た冒険者は苦労するんだ」

ああー・・・確かにそう言われてみればそうかもしれない。

「それに俺達が出せる報酬も少ないからFランク以外の冒険者は見向きもしてくれないからな！」

そこは大声で言うセリフじゃないと思う。

「おお！そうだ！早く依頼を達成してくれたお礼にうちで取れた野菜をやるっ！」

マジで！

「いいのか？」

「ああ！あなたにはスマンが報酬の増額は出来ないからな・・・せめてものお礼だ」

「ありがとう」

「お礼を言うのはこつちだよっ！あなたが来なかったら繁殖期に入っ
て取り返しがつかなくなるところだった！」

そう言う依頼主から依頼達成書と野菜各種を貰い農耕地を後にする。

いやぁー最初はどうなるかと思ったが終わってみれば良い依頼だったな。

予想外の強敵も出てこなかったし。

ちなみに報酬で貰った野菜は前の世界の野菜に似ている物もあったのだが味が違うと困るので、

依頼主にどういふ食べ方がお勧めか聞いておいた。

作ってる人がお勧めする食べ方なら美味しいはずだっ！

・・・でも流石に食材用の袋が満杯になるまで野菜をくれるとは思

わなかった。腐る前に食いきれるかどうか、それが問題だ。

街に帰る途中で昼間に残しておいた串焼きを食べる。

うむ、冷えてても美味しい。残ってた二本とも食べちゃったZE！

そしてギルドに到着し、報告をして報酬を貰う。

特に何事もなく終了。ギルドカードの依頼達成数が3/3になった。

そう！俺がつ！ミスターパーフェクトだ！

なんて変な事を考えながら俺はある目的の場所へと向かう。

ふっふっふ、その目的とは・・・貰った野菜をおいしく調理するための調味料を買うのだ！

その為に街中の市場へとやってきた訳だが・・・

「・・・誰もいない」

普段賑わっている市場には店もなく、歩いている人すらいなくなっていた。

「うーむ、謎だ」

何でだろうと立ち止まって考え込んでいると・・・

「その君い！何でここにいるんだい!？」

いきなり見知らぬおっさんが声をかけてきた。

「何でって、ここは市場だろ？」

もしかして場所を間違えたとか？そんな馬鹿な。

「おいおい！知らないのかい!？」

「ん？何かあるのか？」

「今からここを領主様の息子が通るんだよ!」

「通ると何か不味いのか？」

「君はこの街に来てまだ日が浅いな!？」

「ああ、昨日来たばかりだが」

「くっ！そうか・・・急いでここを離れるんだ！領主様の息子は・・・

「・

「へいへいへーい！その者お!」

「ま、まずい！もうここまで・・・!」

また変なのが来たぞ、一体何なんだよこの街は・・・

現れたのはTHE・貴族と言ってもいい格好をした金髪ポブカット豚野郎とモノクルをかけたオールバックヒゲ執事の二人組。

豚貴族の方はどうでもいいが、後に控えている執事がすっげー強そうに見えるのは気のせいだと思いたい。

「余の道を遮るとは良い度胸だなあっ！」

「す、すみません！すぐに消えますので！」

「ノンノンノン！もう手遅れだあっ！判決を言い渡すうっ！鞭打ちの刑を執行だあっ！」

お前は裁判官じゃねえだろ豚野郎って言ったらやっぱり怒られるのかな？

「ひっ！どうかご勘弁をっ！」

見知らぬおっさん・・・土下座までする必要はないと思うが・・・

「ほらほらほらあ！そこのお前もひざまづくんだよあ！」

「断るっ！...！」

俺が何でひざまづかないといけないんだ。お前が俺にひざまづけ。

「おいおいおい！断っているのかあ？余は領主の息子なんだよ

お？」

・・・予想はしてたが、やっぱりこの馬鹿が領主の息子なのか。

又ンドックを逃がしておいて良かったなあ・・・としみじみ思った。

こんな奴に飼われるくらいなら死んだ方がマシだろ。

「残念ながら俺は街の住人じゃなく冒険者なんで・・・関係ない
と思うんだが？」

「あまいあまいあまああああい！余が毎日食べてるスイーツより
あまああああい！余が一言ギルドに言えば冒険者の資格を停止させ
る事もできるんだよお？」

何このうっざい言い方。ってか何で領主の息子にそんな権限がある
んだよ。

「ふむ・・・やれるものならやればいい」

ここは挑発しかないだろう！

「おうおうおお！言ったなあ？よしいっ！セバスちゃんあん！こ
いつの冒険者資格を停止するんだあ！」

「坊ちゃん、名前がわからなければ無理でございます」

セバスちゃん冷静だな。

「それもそうかあ！お前の名前は何ていうのだあ！？」

これは・・・イタズラの予感！

「俺の名は・・・フリーザ様だ！」

決まった！完璧に決まった！

「ハツハツハア！素直に教えるとは馬鹿な奴めえ！セバスちゃああん！フリーザの冒険者資格を停止するんだあ！」

「畏まりました」

・・・こうもあっさり成功すると何かこう達成感がないよね？

まあ偽名だつてすぐバレると思うんだけどさ。

「では、俺は帰らせてもらおう」

そう言つて俺は見知らぬおっさんを置き去りにして足早に立ち去つた。

後には見知らぬおっさんの悲鳴が街中に響いたとか響かなかつたとか・・・

主人公の所持金 8万120ギル 8万1620ギル

ふう、結局・・・調味料は買えなかったよ。

何か疲れたから宿に帰ろう。

まだ夕暮れ時だが仕方ないよね。

にしても今日も色々な事があったな・・・毎日イベント多すぎ。

これはもう完全にハプニング体質だろ。

そんな事を考えつつ「満腹のお宿」に入る。

「あら！お帰り！今日は早かったね！」

中に入るとおばちゃんを迎えてくれた。

「色々あってね」

「命があるならそれでいいさ！食事はもうできてるけど、どうするんだい？」

「先にシャワーを浴びさせてもらおうよ。あと裏にある井戸の水って飲めるのか？」

「うちで使ってる水は全部あの井戸から汲んでるから味と質は保証するよ！」

「なら安心だな。シャワーは今使っても大丈夫か？」

「ああ、無料の方ならいつでも好きに使ってくれて結構だよ！」

「わかった、ありがとう」

そう言っつて裏庭へ向かう。

「まずは冷水筒に水を入れるか、買ったのはいいけど水を入れるの忘れてたもんな」

と井戸に来たのだが・・・

「やっぱりというか何というか・・・蛇口ついてるのな・・・」

シャワーがあつたり水洗トイレがあつたりで不思議じゃないが・・・

「まあ、細かい事は気にするなつて事だな」

水筒の蓋を開けて蛇口全開で水を注ぐ。

凄い勢いで冷水筒が膨らんでいく。

あっ、ちなみに忘れてるかもしれないけど冷水筒は水筒つてついでるけど実際は何かの皮で出来た袋状の物だからね。

だから水が入ると膨らんでいくよ。

「んー……これだけの勢いがあればすぐに満杯になりそうだ。」

「おや、あなたは……」

と冷水筒が満杯になったところで声をかけられた。

蛇口を閉じ、今度は何のイベントだよ、と思って振り返ると……

「ん？ああ、誰かと思えば又ビット好きの騎士か」

「確かに私は又ビットが好きだが……騎士ではないぞ」

「違うのか？そんな格好してるから、てっきり騎士だと思っていたのだが」

「確かにこの装備品は騎士が身に着けるものだが、これは親から譲り受けた物でな。ほら、きちんと紋章部分は削ってあるだろう」

確かに良く見てみると鎧の一部分が削り取られている。

なるほど、普通の騎士は鎧に紋章がついてるのか。

覚えておけば何かの役に立つかもしれない。

……が、すぐに忘れそうな気もしている。

「ふむ、何故ここにいるんだ？」

「何故って、宿泊してるからに決まっておるっ」

「宿泊って「満腹のお宿」にか？」

「他にどの宿があるって言うんだ」

「そうか。変な偶然もあるものだな・・・で、又ビットには会えたのか？」

「・・・残念ながら会えなかったよ」

「そうか、残念だったな」

簡単に会えると思ったんだがな。

「ああ・・・まあ、そんな簡単に会えるとは思っていないさ。幸いにも住んでいる痕跡を見つけられたからな。気長に探すさ」

「住んでいる痕跡？」

そんなのあるの？

「ああ、又ビットが住んでいる場所では生物が少なくなるんだ」

えっ？何それ？初耳なんですけど。

「理由を聞いてもいいか？」

「あなたも又ビットに手を出したらどうなるかは知っているだろう？」

「悲惨な最後を迎えるって奴か？」

「そうだ、それは何も人間だけが対象な訳じゃなく生存する全ての生物が対象なんだ」

「・・・何それ超怖い。」

だからあの森で生物にあまり遭遇しなかったのか。

「怖いな」

「ふふっ、害を加えようとしなければ大丈夫さ」

そうだけどさあ！森を歩いててつまずいて転んだ先に又ビットがいたらどうなるのさ！

うっかり当たって怪我でもさせたら・・・怖すぎだろ。

「ああ、あと・・・あなたが言ってた髭とバンダナの二人組だが・・・

「・

「会ったのか？」

「・・・まあ、うむ」

歯切れが悪いな。どうしたと言っんだ。

「襲われたのか？」

「いや、それがな。私が見た時には既に死体だったんだ」

「……マジで？」

「おい、それは……」

「ああ、又ビットに害を加えてしまったんだろうな」

「……興味本位で聞くがどんな死体だったんだ？」

怖いけど興味あるよね！悲惨な最期ってさ！

「それが……残っていたのは首から上だけだったんだ」

怖っ！又ビット怖っ！

「表情も酷く歪んでいてな……髭とバンダナと言っわかりやすい特徴がなかったら判別は出来なかっただろうな。」

それにしても……一体何を見たのやら」

「そついつのを見ても又ビットを探すのを諦めないのか？」

「ああ！私の夢だからな！」

すげーなー。俺にはそんな度胸はないぞ。

「まあ、頑張ってくれ。俺はシャワーを浴びに行くから」

「ありがとう、必ず見つけてみせる！」

そう言っただけで別れた後、シャワールームへ突撃。

ちなみに男女別になっていたので諸君が期待しているようなイベントはない！・・・と思う。

そしてシャワーを浴びている途中である事に気づく・・・

「・・・タオルと石鹸買うの忘れてたああああああ！！」

絶望した！俺のうっかりぶりに絶望した！

まあ、いいか・・・また明日買いに行こう。そもそもこの世界に石鹸があるのかどうかすら知らないけどね。

シャワーを浴び終わった後に有料のタオルを借りた。

タオルのお値段は50ギル。後で部屋に食事を持って来た時に払えばいいみたい。

そして身体を拭き終わって着替えた後、おばちゃんに食事と洗淨水を頼み部屋へと戻る。

んー・・・そろそろ着替えも買っとくか。

同じものを何日も着続けるのはつらいんですう！

でもこの街で売ってた服はゴワゴワするんですう！

身体を拭くタオルは結構感触が良かったに服だけ何で駄目なんだよ
おおおおお！

・・・よし！決めたぞっ！明日この街を出よう！

とりあえず魔法学園がある街・・・サイクオッツ？に行ってみよう。

他の『地』属性魔法も気になるしな！。

サイクオッツ行きの依頼とかあればいいんだがなあ・・・

と考えていたら

ドンドンドンッ！

「食事だよ！」

おばちゃんが食事を持ってきてくれた。

「ちゃんと大盛りにしておいたからね！」

よっしゃあ！

「ありがとう」

「礼なんていいよ！それより残したら許さないからね！」

「それは大丈夫だ」

「それじゃタオルと洗淨水、合わせて100ギルだよ！」

おばちゃんに100ギルを渡した。

「100ギル、確かに受け取ったよ！」

そう言っておばちゃんは去っていった。

「さて、それじゃあお楽しみの食事になりますかあ！」

ふむふむ、今日の食事は平麵に肉や野菜がぶち込まれていて白いソースが絡めてある。

見た目だけならカルボナーラっぽいけど・・・味はどうかね。

とりあえず食べてみるか・・・

「もぐもぐ・・・からっ！からいよっ！でもうまひい！」

クリーム系の味かと思いきや予想外の辛さでびっくりしちゃったぜ。

元の世界のアラビータみたいな感じだな。

「ふむ、麵類も明日調達するかな。乾麵があるなら旅の途中でもお手軽に調理できそうだし」

ふう・・・にしてもからいな。

食事についていた、ちょっと赤みがかった飲料を飲んでみる。

「うはっ、これはちよつと甘めの果実水だな。おーいすいー！
からいーうまひいーあまひいーおーいすいーを繰り返して食事終了。
やっぱこの宿の食事美味いわ。明日の朝飯で最後か・・・それだけ
がちよつと残念だな！」

さて食事も取って洗浄水でお口の中もトゥルトゥルになったことだし・・・今日はもう寝るかあ！

ステータス

名前：ロツク

冒険者ランク：F

依頼成功率：3 / 3

所持金：8万1520ギル 金貨7枚と大銀貨10枚と銀貨14枚
と銅貨12枚

装備品：白のTシャツ、黒のジャージズボン、ブーツサンダル、黒
のフード付マント、ナマクラナイフ

持ち物：女パンツ2枚、ギルドカード、サンダルスリッパ、着火石、
結界針、冷水筒、毛布、包帯、

ポーシヨン×5、解毒ポーシヨン×5、縄、片手鍋、道具

袋、財布用道具袋、食材用道具袋、

野菜各種

使える魔法：>アースカルティベート<、>アースライズ<、>ス
トーンイジエクト<

第11話（後書き）

日間ランキング2位になったと思ったたら1位になっていた。何を言っているかわからな・・・以下略。

それはともかくありがとうございます。

単純にうれしいです。怖さも感じていますが・・・

さて、今回で二日目が終わりました。

次の更新はちょっと間が開くと思いますので気長に待っていてもらえたらなと・・・

あとこの作品を読む時に細かいことを気にしてはいけません。雰囲気とノリで読んでください。

これからもよろしくお願いします。

第12話

朝がやって来た。

「ギョーギョギョーギョエーギョーギョーエー」

今日もどこかで鳥が鳴いている。

「パターン変えてんじゃねえよっ！」

と言って俺は目を覚ます。

「ふう、今日こそは平穏な一日であってほしいな……」

絶対にありえそうにない事を言ってみた。

言うだけなら無料だもんな！

「えーっと、今日はまず……何だっけ」

やばい、まだ寝ぼけてるみたいだ。

確か買いたい物は……タオルと石鹸と調味料だったか。

他はなかった……よな？

さて、食事と洗浄水を頼んで来るか。

一階に下りておばちゃんに食事を頼む。

「おはようさん！今日も早起きだね！食事は出来てるよ！どうするんだい？」

朝から元気だなあ。

「すぐに食べるよ。洗淨水も頼む」

「あいよ！すぐに持っていくからね！」

部屋に戻り旅立ちの準備を始める。

「たった二日だけだったが色々あったな・・・」

としみじみ思っている。

ドンドンドンドン！

「はい！お待ち！」

早っ！早いっ！3分と経ってないぞ！

「ありがとう、50ギルだったな」

洗淨水分の50ギルを支払う。

「はいはい！どうもね！ところで今日の宿泊はどつするんだい？」

「今日はいい。ちょっと他の街へ行ってみようと思ってるんだ」

色々やっちゃったからな！

「あら！そんなのかい？残念だねえ・・・まあゆっくり準備していきな！焦らなくてもいいからね！」

とても・・・良い宿です。

「ありがとう。またこの街に来た時にはここに宿泊させてもらおうよ。食事も美味しいな」

「あっはっは！嬉しい事を言ってくれるじゃないか！その時は腕によりをかけて作ってあげるよ！」

そう言っておばちゃんは去っていった。

さーて！この宿での最後の食事だ！しっかり味わって食べようっと。

っとその前に洗淨水を半分使って口内洗淨をしてっと。

よっしゃ、お口はトウルトウル！次は食事だ！

「ふむ、今日はスープとパン・・・それにサラダか」

ちなみにコップに入っているのは昨日の朝食にも出てきたレモンジュースみたいな酸味のある飲料。

「早速いただくでガンス」

まずはパンから頂く。

「ふう・・・満足満足」

食後の洗浄水も終わらせたし、ちょっと休憩したら行くか。

主人公の所持金 8万1520ギル 8万1470ギル

「気をつけて行って来な！いつでも待ってるからね！」

宿から出る時、おばちゃんがそう言って見送ってくれた。

うむ、素晴らしい宿だった。

とりあえず買い物に行く前に先にギルドへ行ってサイクオッツ行きの依頼を探すか。

Fランクで受けられるといいなあ。

はい！ギルド到着！中に入って依頼を探す。

「ねえな・・・」

やっぱりと言うか何とかサイクオッツ行きの依頼はなかった。

でも又ンドツクの捕獲依頼が新たに貼り出されていた。

クツ・・・他の街に行くという予定が無ければ！

まあそれは置いといて、受付でも念のためにサイクオツツ行き依頼がないか聞いてみよう。

「ちょっと聞きたいことがあるんだが」

「はい、何でしょう？」

「Fランクでサイクオツツ行きの依頼ってないか？」

「サイクオツツですか？ちょっと待ってくださいね」

分厚い紙の束を取り出して調べだす受付嬢。

「その紙、全部Fランクの依頼なのか？」

「はい、掲示板に貼り付けた後に一定期間受けられなかった依頼は掲示板からはずされるんですよ」

あー、それもそうか。いつまでも貼ってある訳ないよな。

「あつ、ありましたよ」

そう言って一枚の紙を取り出す受付嬢。

「見せてもらえるか？」

「はい、どうぞ」

依頼書を見せてもらおうと・・・

依頼：手紙の配達

サイクオッツの魔法学園まで手紙を配達して欲しい。

報酬：3500ギル

「手紙の配達って冒険者がするものなのか？」

疑問に思ったから聞いてみる。

「いえ、普通はその街に向かう商人に頼んだりしますね」

だよな、その方が効率良いもんな。

「ですが商人は荷物ごと手紙を奪われる危険がありますから・・・その点、冒険者ならある程度は自衛が出来ます。ですから大事な手紙などの依頼は冒険者ギルドに頼む人もいますよ」

うーむ、でもさあ。

「Fランクだったら一般人とそう変わらないと思うんだが」

だって新人な訳じゃん？

「それでも商人よりは配達率が高いんですよ？」

えっ！？マジで？

「何か理由はあるのか？」

「理由としては、まず新人で配達依頼を受ける人がいないってことです。お金や名声を求める人は早くランクを上げたい訳です。ですから近場の討伐依頼や採集依頼を受ける事が多いです、あと配達先の街に行くにはどうしても準備などでお金が掛かります。報酬が出てその街に行くまでの費用で赤字になる事もあるんです。それでも受けるって言う人はよっぽどの物好きか、その街に行く理由がある人だけです。そういう人は大体新人じゃありませんからね。だから商人よりは配達率が高いんですよ」

「なるほどな。あと、この依頼ってどうやって達成証明するんだ？」

「配達専用の依頼達成書を手紙と一緒に持っていつてもらいます。それで相手から署名を貰えば大丈夫です。」

その後、依頼達成書をサイクオッツにある冒険者ギルドに渡せば報酬を貰えます」

ふむふむ。

「相手が手紙を受け取ってくれなくて拒否された場合は？」

受け取り拒否されて失敗扱いでこの街に帰還とか嫌だよ。

「その時も署名だけは貰ってください。その後にサイクオッツのギルドへと持って行って貰えれば大丈夫です」

「署名偽造の心配はないのか？」

署名を書くだけなら簡単に偽造されそうだけど。

「ああ、大丈夫ですよ。依頼達成書に書かれる事は誤魔化す事が出来ませんから」

「ん？どういう事だ？」

「依頼達成書に嘘を書くと預かった時にわかるようになってるんですよ」

何その機能。

「ちなみに依頼人を脅迫して依頼達成書を奪ったりしても預かった時にすぐにバレるようになってます」

依頼達成書すつげえええ！ただの紙じゃなかったのか！

っとまだ聞きたいことがあるんだった。

「ああ、あと届け先が魔法学園になっているが魔法学園の誰に届ければいいんだ？」

「それは依頼人から直接聞いていただくようになってます」

ふうん、プライバシーの問題かな？色んな依頼を見たけど依頼人の名前は基本的に書いてないし。

「よし、その依頼を受けよう」

「わかりました。依頼人の家を教えますので依頼人から手紙と依頼達成書を受け取って下さい」

「わかった」

「そういえばどうやってサイクオッツまで行かれるんですか？」

「ん？徒歩で行こうと思ってるんだが」

他に何かあるの？

「・・・ちなみにサイクオッツが何処にあるのかご存知ですか？」

「いや、知らないけど」

依頼人から聞こうと思ってるんだけど。

「はぁ・・・ちょっと待ってくださいね」

そう言って受付嬢は何かの紙を取り出ししてきた。

「いいですか？この地図を見てください」

取り出してきたのは地図のようだ。

そついや初めて見たな・・・この世界の地図。

「ここが今いる街カルナッタです」

ふむふむ。西の方には森があり南にはちゃんと川が流れている。

「そしてここがサイクオッツです」

受付嬢が指で示した場所はカルナッタのかなり東の方だった。

「遠いな」

うむ、遠いぞ。

「そうです。徒歩で行けば2〜3週間は軽くなるでしょう」

「途中に村や町はあるんだろ？」

「ありません」

えっ、ないの？

「もう！何も知らないじゃないですか！」

そう言つて受付嬢は丁寧に説明してくれた。

長いから俺がまとめるよ！よ！

ちなみに受付嬢は何人かいるから俺一人に時間を取られても何の問題もないよ！

毎回同じ受付嬢に当たっているのは偶然だよ！

どうやら魔族の住んでいる国、「魔国」があるのはこの大陸の東の方でサイクオッツはかなり魔国との国境に近い所にあるようだ。

争いが無くなったとはいえ魔族が強大な力を持つ事に変わりは無く、その力に恐怖して今でも魔国に近い東の方に住む人間は皆無らしい。

だからサイクオッツを除けばカルナツタが人が住む最東端だと言う事だ！

ちなみに何でサイクオッツが魔国に近い場所にあるかというところサイクオッツは元々、魔族を研究する為の施設だったんだってさ！

それがそのまま魔法を教える施設になって学園が出来た・・・と言うわけさ！わかったかな？

あとは魔国に近いと魔獣や魔物の数が増えて学生の戦闘訓練にも便利なんだって。

ついでに今いる人族の国の名前は「シルヴェウス」っていうらしい。初代勇者の子孫が治めている国のようだ。

初代勇者は王道パターンで魔王を倒した後に、その時の王様の娘、つまり王女様と結婚したらしいよ！それに側室が数十人もいたんだって！怖いね初代！

まあ、初代ってあの神様達にありえないチートをつけられて魔王を

瞬殺出来る勇者だから当然かもしれないな・・・

でも子供には恵まれなくて一人しか出来なかったらしい。相続争いが無くて良かったな・・・数十人全員に出来たら恐怖ですよ。

あーでもその辺もチートでどうにかなってたのかな、というか神様のチートって受け継がれるのかね？

第八代目勇者の子孫の長男と次男は評価を聞く限りある程度はチートを受け継いでそうだったけど・・・三男の馬鹿を見る限りじゃ違う気もするしなあ。

ちよつと神様達を呼んで聞いてみるか！

出るおおおお！ゴオオオオオッドガ ダアアア・・・

危ないっ！これは違う！もうちよつとで指も鳴らしてしまつところだった。

受付嬢がまだ長つたらしい説明してる途中に指鳴らしは駄目だよね。

何か話が逸れてるっぽいから聞き流してるんだけどさ。

～主人公の頭の中～

「……呼ばれて飛び出て……」

と4つの光の玉が現れた。

「それも駄目だっ！」

というか何で知ってるんだよ、世界違うだろ。

ネタを知らない人がいたらごめんね！

「とりあえず俺から見て左端の神様だけに聞きたいんだけどさ、勇者のチートって子孫にも受け継がれてるのか？」

後の神様は当てにならない事はもうわかっている！

「呼び出したのはそっちなのにまた放置っ……！駄目っ！我慢できなくなっちゃっ！」

と左から2番目の光が点滅しながらビクンビクンしている。

「放置キターアアア！」

無駄に輝きながらテンション高いのは左から3番目。

「俺の出番だな！」

と前に出ようとしているお前は一番右端だろ。見ようによっては左端だけどさ！俺から見て左端ってちゃんと喋ってるだろ！

「そうですね・・・受け継がれるとも言えますし、受け継がれないとも言えます」

ふう、やっと左端が喋りだした。

「運つて事か？」

「特殊な能力・・・例えば伝説の武具などは意思が宿っていますので使えるかどうかは完全に運ですね。身体能力に関する能力は素質は受け継がれていますが

覚醒するかどうかは本人の努力次第ですね。努力をすれば勝手に覚醒しますよ。まあ、覚醒した後も努力を続けないと消えるようにしてるんですけどね。

元々勇者を作ったのも、初代勇者は家族を魔物に殺されて復讐するためにそれはもうすごい努力をしましてね。これに能力を与えたら良い暇つぶしになるんじゃないかと思ったのが始まりですからね」

今明かされる衝撃の事実！初代勇者は復讐者だった！というか伝説の武器や防具に意思があるってのも初めて知った！

「努力をして自分を痛めつけてる人を見ると・・・ハアハア・・・堪んないわあっ！」

・・・努力仕様は左から2番目の神様が決めたっていうのはわかった。

「というか伝説の武具って言うけど作ったの神様達だよな？」

「そうですね？やっぱり強い武具には伝説ってつけないと駄目だし

よっっ」

子供かよっ！

「あと努力しないと消えるって俺のチートはどうなるんだ？」

消えられたら困るところか死ぬ自信があるぞ。

「ああ、我々から直接与えられた能力は消えませんよ」

良かった・・・努力なんて人をおちよくる時にしかないからな・・・

「ついでに聞くけど第八代目勇者につけたチートって何だ？」

子孫を見ちゃったから気になるよね。

「八代目ですか？八代目は確か・・・身体強化、肉体再生、カリスマでしたか？」

左端の神様が左から2番目に話しかけた。

「そう！カリスマで人の注目を集めながら戦闘で傷を受けて・・・でも身体強化されてるからすぐには死ねないし、時間が経つと傷が治っちゃうからまた見られながら傷ついて・・・か、感じちゃうっ！」

そう言っつて光は弱々しくなった。

「・・・もしかして勇者によってチートを与えた神様が違うのか？」

「ええ、最初の方は全員で能力を与えてたんですが変化をつけようと言う事で色々試してたんですよ」

「どれだけ暇なんだよ・・・」

「わかった、色々とすまないな」

「いえいえ、何かあればまた呼んで下さい。それではまた」

「今回も放置つ・・・でもそれがいいつ・・・ハアハア・・・」

「アイルビィバアアアック！」

「次こそは俺の番だよな！」

うん、やっぱり左端の神様だけが頼りだな。

にしても身体強化と肉体再生とカリスマか・・・

フリーザにあるのは肉体再生ぐらいか？

結構な怪我してたはずなんだけど、次の日には治ってたもんな。

まあ、まだ魔法で治したつて言う選択肢もあるが・・・

カリスマと身体強化は100%持ってないな、努力もしてないだらうし。

でも肉体再生つてどんな努力をすれば覚醒するんだ？

・・・ハッ！もしかして肉体再生のチートってボコボコにされたら
覚醒するのか！？

それなら納得ができるな！ってもしかしてボア戦で覚醒したのか・
・？

まあ、いつか。何かあっても再生する前に殺せば良いだけだ。

↓主人公の頭の中終了↓

「ですから、サイクオッツに行く場合は動物や魔獣に騎乗していく
か、荷車に乗って引つ張って行って貰うのが普通なんです・・・っ
て聞いてますか？」

おお、ちょうど話が終わったようだ。ナイスタイミング！

「ああ、聞いてるよ。にしても動物ならわかるが魔獣を使うなんて
大丈夫なのか？」

「ええ、大丈夫ですよ。前にも言いましたが知能が高い獣は全て魔
獣の扱いになりますので人が飼育出来る大人しい魔獣もいるんです
よ。昨日ロツク様が依頼を受けたヌンドックも大人しかったでしょ
う？」

でしょう？って全然大人しく無かったよっ！むしろ凶暴だったよ！

「というか俺なら全力で走れば時間をかけずにたどり着くんじゃないか？」

「まあ、人に見られるリスクを考えれば危険だからあんまりやりたくないんだけどさ。」

「ふむ、荷車は邪魔になるから手に入れるなら騎乗用だな。騎乗用の動物や魔獣は売ってるのか？」

「はい、販売している店はこの街にあります。魔獣の方は売っていないかはどうかわかりませんね。騎乗用の魔獣は人気がありますから……」

「ああーやっぱり魔獣は人気あるのか。まあ行って見て魔獣が売ってなかったら走るか。」

「ん？動物で良いじゃないかって？動物に乗ってもつまないじゃない！やっぱり魔獣だよ！魔獣！」

「つてというか騎乗するなら相棒になるわけだから気に入らなかつたら魔獣でも買いませんけどね！」

「赤いM字帽子を被った人みたいに乗り捨てにする訳にも行かないからな……」

「まあ、後で行って見る。依頼は受けるから依頼人の家とその店の場所を教えてください」

「わかりました。では案内図を用意しますので少々お待ちください」

そして依頼人の家と店への案内図を貰う。

「ああ、そういえば聞きたいことがあったんだ」

「何でしょうか？」

「この街の領主って冒険者ギルドに口を出せる程の権力を持つてるのか？」

これは聞いておかないとな！どこまで領主の権力があるのか気になるし！

「ありませんよ？」

ないのかよ・・・

「冒険者ギルドは完全に中立ですので、例え王様であっても理不尽な要求は突っぱねますよ」

まあ確かにフリーザの要求も突っぱねてたしな。

「でも、どうしてそんな事をお聞きになるんですか？」

「いや、昨日領主の息子がフリーザの冒険者資格を停止してやるって言ったのを街中で聞いてな」

嘘は言っていないよ！

「ああ・・・あの方ですか。毎回執事さんが来ていますけど苦勞しているみたいですよ」

だろうな・・・俺が執事だったら即効殴り飛ばしてる自信がある。

「まあ、いつもの事ですので気にしない方が良いでしょう」

気にしない方が良いって言ってもなあ・・・

「市場の露店が無くなってるのは毎回なのか？」

あれのせいで俺は調味料を買えなかった・・・買えなかったんだぞ
おおおおおお！

「そうですね。みんな厄介事に巻き込まれたくありませんから・・・
それに商人ギルドに所属しているならまだしも露店をやっている人は
一般の人も居ますからね、目をつけられたくないんですよ」

「商人ギルドに所属してないのに露店が出来るのか？」

所属してないと商売が出来ないと思ってたよ。

「ええ、ちゃんとしたお店を持つなら所属しないと無理ですが露店
くらいは大丈夫ですよ。その代わりトラブルがあっても自己責任で
すよ？」

商人ギルドはギルドにある程度のお金を納める代わりに厄介事がある
と守ってくれたり色々と便宜を図ってくれる役割も持ってるんで
すよ」

なるほどなあ。

「そうなのか、色々ありがとう。それじゃ」

「はい！ロック様もお気をつけて」

受付嬢の笑顔で見送られて俺はギルドを後にした。

先に依頼人の家へ行くべきか、それとも魔獣を見に行くか、それが問題だ。

ううん・・・魔獣はじっくりねっとり見たいから依頼人の家に先に行くか。

お気に入りの魔獣がいなくなったらそのまま調味料とかを買って街を出れば良いだけだし。

と言っわけで・・・

「はいつ到着しました！こちらが依頼人の・・・誰だっけ？」

渡された地図をしてみるが依頼人の名前は書いてなかった。

「また聞き忘れた・・・」

まあ、いいか・・・案内図の位置は間違ってないっぽいし。

とりあえず依頼人の家を見てみる。

石造りで出来た家は2階建てで街の中では、中程度くらいの大きさ。

入り口に門が付いて庭もあるから依頼人は貴族か・・・？

いや、まだお金を持った一般市民という可能性も・・・

貴族だったらちよつと嫌だ。

今の所良い印象がないんだよね・・・色んな意味で。

とりあえず、門についてる小さな鐘を鳴らしてみるか。

カランカラン。

ガチャつとドアを開けて出てきたのはメイドさんだった。

メイドさんか・・・メイドさんって何かエロスを感じるよね。

「何の御用でしょうか？」

と言いながらメイドさんは訝しげな目をしながら俺の事をジロジロと見てくる。

まあそついう反応だね。怪しい格好してるもんね。

「手紙配達の依頼を受けてきたんだが・・・」

と言つとメイドさんの俺を見る目がちょっとマシになった。

「依頼を受けて来てくださったんですか、ギルドカードを拝見してもよろしいですか？」

むっ、さすがメイドさん・・・簡単に信用しないな。まあ、それくらいはするよね。

「ほら、これでいいか？」

と言つてギルドカードを見せた。

「ロツク様・・・フランクですか・・・」

何そのちよつとガツカリした顔。フランク依頼で受けたんですけどお！

「フランクの依頼だったのだが、違うのか？」

「少々お待ちください、旦那様に確認してまいりますので・・・」

・・・この待つてる時間、俺は何をすれば良いのか。

体感時間で10分くらい経つとメイドさんが戻ってきた。

待つてる時間を使って俺の妄想力がちよつと上がったZEE！

何を妄想してたかつて？

・・・フツ、決まってるだろ？エロい事さ！

「確認が取れましたので中へどうぞ」

メイドさんに案内されて玄関を通過して中に入ると、廊下は木造でその上に赤い絨毯が敷いてあった。

金持ちっぽい雰囲気出してるなあ・・・こんな家が自宅だと絶対に落ち着かないだろうな。

とくだらない事を考えている間に目的地についたようだ。

「それでは、こちらへお入りください」

とメイドさんが両開きの扉を開けてくれたので中へと入る。

どうやらメイドさんは入ってこないようだ。そのまま扉を閉められてしまった。

部屋の中を見回してみると、本棚が大量にある。書斎かな？

「君が依頼を受けてくれた冒険者かね」

声が出た方へ顔を向けると、ダンディなおっさんが書類を積んである机の前に立っていた。

「ああ、あんたが依頼人か？」

「そうだ、私が依頼を出した。早速ですまないがギルドカードを見

せてもらっても良いかね？」

はいはい。

「これでいいか？」

「・・・やはりFランクか」

・・・メイドさんの時もそうだったんだけどさ。Fランクだと駄目なのか？Fランク依頼だったのに？そんな馬鹿なっ！

「Fランクに不満があるなら報酬を上げれば良いと思うんだがな？」

「ああ、すまない。気に障ったのなら謝ろう。私もこの依頼はどうしても成功させたいから焦っていてね」

そんなのはどの依頼人も思ってる事だよっ！お前だけが特別じゃねえええよおおおお！

「だから成功させたいなら報酬を上げれば良い話じゃないのか？」

「それがそう簡単にも行かなくてね。冒険者ギルドは報酬の不当な高騰を防ぐ為に依頼によつて最高額を規制しているんだよ」

ふむ、そんな事してたのか。まあ、確かに規制しておかないと高額依頼ばかり受けるようになって一般市民の依頼を受ける奴が居なくなるかも知れないな。

「それは知らなかったが・・・そこまで大事な手紙なら自分で護衛の冒険者を雇って行けばいいんじゃないか？」

今更思い出したんだけど、これって手紙の配達だよな？入れ込みすぎじゃねえの？

何か嫌な予感がするんだけど・・・誰か気のせいだと言ってくれよ！

「それができるならとっくにそうしている！」

「何かできない理由でもあるのか？」

「最近、周りで不穏な出来事が多くてな・・・迂闊に出歩く訳にはいかんのだよ」

当たった！嫌な予感が当たった！これは間違いなく巻き込まれるぞ
おお！

「それで魔法学園に居る娘が心配になり手紙を何通か出したのだが・・・」

「届いてないと？」

「ああ、出入りの商人に頼んでも道中で必ず襲われるらしくてな。手紙だけじゃなく荷物も全て奪われる・・・幸い命は奪われていないが、今では受け取ってもくれんよ」

「出入りの商人は護衛を雇っていないのか？」

「雇っていても倒されるそうさ。かといって雇いすぎると赤字になるからな。難しい物だよ」

ふむ、たまに襲われるならまだしも毎回襲われるなら赤字が凄いなになるな。嫌がるのも無理はないか。

「それで冒険者ギルドに依頼を出したのか」

「その通りだ」

「という事は俺も襲われるわけだ」

「だから高ランクの冒険者が来るのを期待していたのだが・・・」

「ギルドに話さなかったのか？」

そうすれば、ある程度の高ランク寄越してくれるだろ。

「あまり話を広めると、なりふり構わなくなるかもしれないからな・・・」

ああーなるほど。

「で、この依頼を受けてくれるのかね」

受けてくれるのかねってもう受けちゃったしな。

ってかこの家に入った時点で断っても絶対に襲ってくるだろ。

「報酬をギルドとは別に貰えるのならやろつ。もちろん前金でな」

襲われる事が確定してるのに3500ギルはちょっとねえ。

「それはもちろん払わせてもらうが・・・前金だと少なくなるぞ？」

「ああ、別に良い。後で支払われないよりマシだ」

と言っか取りに来るのが面倒です。この街に戻ってくるかどうかも分からないし。

「わかった、早速用意しよう」

そう言って机の上にあつたベルを鳴らす。

チリン（ガチャツ）チリン

「お呼びでしょうか」

早っ！ベル鳴らしてる途中で入ってきたぞ！

扉の外で話を聞いてやがったな・・・

「依頼を受けてくれるそうだが、前金で報酬も出す。手紙と一緒に用意してくれ」

「かしこまりました」

そう言って出て行くメイドさん。

報酬の額を言わないって事は既に予想してたのか。

「そっいえば聞き忘れていたが・・・」

「何かね？」

「襲って来る奴らの正体ってわかってるのか？」

それによって殺す殺さないの対応が変わっちゃうZEE！

「ああ、恐らく盗賊ギルドの連中だろうな」

・・・ああー初日に相手した連中か。殺しても問題なさそうだな。

「何かやったのか？」

「前に奴らの頼みごとを突っぱねたからな」

ふーん。

「そんな事で襲ってくるのか」

「奴らはメンツを大事にするからな」

「にしても盗賊ギルドって商人の護衛を潰せるほど強いのか？」

そんなに強い印象がないんだがな。

「強さはともかく人数は多いからな。この辺りの治安はしっかりしているから高ランクの魔物や魔獣は少ない。だから護衛もそんなにランクが高くないというのも関係あるだろうな」

ふむ、確かに道中で魔物に襲われた事は無かったな。最初のゴブリ
ンとボブの時だけだな。

まあ、両方とも襲われてたのは俺じゃないんだけどさ。

「ふむ、あと聞きたいのは娘さんの名前と特徴だな。確認するが手紙を渡す相手は娘さんで間違いないんだろ？」

「ああ、娘で間違いない。娘の名はレイシアと言う。これが娘の絵だ」

そう言っで見せてくれた絵に描かれていたのは、かなり幼い顔をしたら可愛らしい女の子だった。

まあ一番の特徴は燃えるような赤い髪ということだろう。これは目立つからすぐ探せそうだな。

にしても・・・

「娘さんって何歳だ？」

幼い顔をしていると言ったがちよっと幼すぎる。この絵の通りならロリコンさん大喜びだぞ。

「15歳のはずだが・・・」

うっそん！これで15歳！？ありえねえよ！

「ああ、この絵に描かれてるのは10歳の時のレイシアだぞ」

それなら見せる時にそう言えよ！びっくりしたぞ！

「すまない、びつくりさせたな。魔法学園は入学すると手紙以外のやり取りを禁じられるんだ、もちろん緊急時は別だがな。だから入学する直前に描いたこの絵が一番、新しいんだ」

「何で手紙以外のやり取りが禁止されてるんだ？」

「出来た当初はそんな決まりはなかったらしいのだが、子供が帰省中に魔法が暴発する事故が多くあったみたいでな、魔法をきちんと制御できるまでは禁止するようになったんだ」

「ああー、中途半端に習得していると暴発する危険があるのか。」

「きちんと学ぶと大変なんだなあ・・・魔法って・・・」

「まあ、『地』属性チート持ちの俺には関係ないんですけどね！」

「などと考えているとメイドさんが帰ってきた。」

「お待ちせしました。こちらが報酬と手紙になります」

「渡してきたものを受け取る。手紙はちゃんと蠟で封されてるみたいだな。」

「つと報酬もきちんと確認しておかないとな。ふむ、大銀貨が10枚・・・1万ギルか。」

「フランクに渡す額としては高い方じゃね？」

「報酬と手紙は確認したが依頼達成書はどこだ？」

あれがないと依頼が達成できないよ。

「ああ、手紙の中に同封している」

ふむ、用意の良い事だ。

「入ってるのは確実なんだな？」

「ああ、間違いなく入れてある」

これで入ってなかったら・・・ねえ？

「ならいい。それじゃそろそろ行くが、手紙のほかに伝言でもあれば伝えるぞ？」

ああ・・・何て優しい俺！

「いや、心遣いはありがたいが手紙に全て記してあるから必要ない」

あつ、そうですか。

「手紙に全部書いてるって奪われたら危険じゃないか？」

「それも大丈夫だ。娘以外が手紙を開封すると燃え尽きるように魔法がかかっている」

・・・え？そんな事出来るの？

「便利な魔法があるんだな」

「初代勇者が王女と文通するために作った魔法を元に行っているらしいが……」

初代勇者……文通してたんだ……というかそんな魔法作るならワープ魔法作って会いに行けよ。

「まあ、いい。それじゃ出発する」

「ああ、娘の元へ何としても届けてくれ」

「どうかよろしくお願いします」

ふむ、メイドさんに見送られるのも悪くは無いな。と思いつつ依頼人の家を後にした。

さて、次は騎乗用の魔獣探したZE！好みの魔獣が居るといいな！

主人公の所持金 8万1470ギル 9万1470ギル

第12話（後書き）

明けましておめでとございます。

いやあ、週間でも1位になっていたみたいで感動しています。

その上、更新が止まっていたのにまだ日間100位に入ってるとは・・・ありがたいです。

第3話の誤字を修正しました。内容は変わってませんので・・・ご指摘感謝。

今年もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2381w/>

『地』属性は『最強』じゃないが『最高』だって言ってるだろ！！

2012年1月3日05時30分発行